姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第72集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第303次・第315次発掘調査報告書―

2019

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た今も威容を誇っています。姫路城下町は、天守のある姫山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中枢の置かれた内曲輪、武家屋敷が建ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されています。このうち内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され保護・顕彰が図られております。

一方、町人地を中心とする外曲輪は、江戸時代以来、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨の中核都市にふさわしい都心づくりが進められています。今回報告する調査の原因となった都市計画道路内々環状東線の拡幅事業は、姫路駅高架化と駅周辺土地区画整理事業に関連するものです。この事業は現代の築城にも例えられ、姫路のまちづくりにおける大きな画期となるものです。調査では姫路城外堀、土塁、武家屋敷などが見つかり、市街地においても良好に遺跡が残されていることが確認できました。ここにその成果を報告し姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました東駅前町自治会の皆様をはじめ、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成31年(2019年) 3月31日

姫路市教育委員会

教育長　松田　克彦

例　　言

1．本書は都市計画道路内々環状東線の道路拡幅事業に伴い実施した姫路城跡第303次･315次の発掘調査報告書である。

2．調査は、姫路市都市拠点整備本部姫路駅周辺整備室が行う内々環状東線の道路拡幅工事に伴い、平成25年度に同室より依頼を受け、教育委員会生涯学習部文化財課及び埋蔵文化財センターが実施した。

3．整理作業、報告書の編集は、平成29年度･平成30年度に埋蔵文化財センターが実施した。
調査及び整理の体制は下記のとおりである。
姫路市教育委員会　平成30年度末現在　　（　）内は、調査開始から平成29年度末まで在籍した職員
　教 育 長　　松田克彦　（中杉隆夫）
　教育次長　　名村哲哉　（八木優、林尚秀）
生涯学習部
　部　　長　　岡田俊勝　（植原正則、小林直樹）
文化財課
　課　　長　　花幡和宏　（福永明彦）
　課長補佐　　大谷輝彦
　技　　師　　黒田祐介　【調査･整理担当】
埋蔵文化財センター
　館　　長　　前田光則　（秋枝芳）
　課長補佐　　岡﨑政俊
　係　　長　　森恒裕
　主　　事　　（岡本武平、小林啓祐、嶋田祐）
　技術主任　　小柴治子、福井優、中川猛【調査･整理担当】、南憲和、関梓
　技　　師　　（堀本裕二）
　技 師 補　　山下大輝

4．発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は埋蔵文化財センターにおいて保管している。

5．発掘調査･出土品整理および報告書作成においては、下記の機関より御協力･御教示を賜った。深く感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）
城巽地区連合自治会、東駅前町自治会、姫路市立城郭研究室、兵庫県教育委員会、姫路市史編集室

目　　次

序
例言
目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過・・1
　第１節　調査に至る経緯・・・1
　第２節　調査の経過・・・1

第Ⅱ章　遺跡の歴史的環境と立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第１節　遺跡の歴史的環境・・3
　第２節　調査地の立地と基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第Ⅲ章　東部地区の調査（１区・２区）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第１節　１区の遺構と遺物・・6
　第２節　２区の遺構と遺物・・6

第Ⅳ章　西部地区の調査（４区）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

第Ⅴ章　外堀の調査（３区・５区）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

第Ⅵ章　江戸時代以前の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

第Ⅶ章　総括・・・37

遺構一覧表・・41

遺物観察表・・44

写真図版

凡　　例

1．近世姫路城は、文化財保護法では「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地である「姫路城城下町跡」に区別されている。調査次数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。また、江戸時代の城下町についての言及には「姫路城下町」を使用している。

2．遺構名の表記は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』記載の略号を使用したが、報告書の記載上、遺構の性格が明らかな場合は屋敷境、石組溝等と表記した。

3．発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。

4．遺構・遺物の法量等は一覧として巻末にまとめた。遺構の深さについては、遺構検出面からを基本としたが、江戸時代以前の遺構については地山検出レベルを基準とした。

5．土層注記に用いた色調は『新版　標準土色帳』（1999年度版）に準拠している。

6．本書で用いる分類名・土器編年および年代観は次の文献によっている。

肥前陶器・磁器：九州近世陶磁学会事務局　2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会、備前焼：乗岡実2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会、丹波焼：長谷川眞2006「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ、焙烙：中川猛2012「焙烙考－姫路と周辺の焙烙－」『山口大学考古学論集Ⅱ』中村友博先生退官記念論集作成委員会、土師器皿：森恒裕1991「淳心学院出土遺物の検討－16世紀後半から17世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察－」『姫路市立城郭研究室年報』Vol.1　姫路市立城郭研究室

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

姫路市東駅前町の都市計画道路内々環状東線において道路拡幅工事が計画された。本事業は、鉄道により南北に分断された姫路駅周辺を一体化することを目的とした鉄道高架事業に関連するものである。鉄道の高架化事業（山陽本線等連続立体交差事業、以下連続立体交差事業と呼ぶ）は、昭和48年に国鉄高架化基本構想を樹立したことに始まる。連続立体交差事業は、関連道路及び姫路駅周辺土地区画整理事業とともに昭和62年2月に都市計画決定を受け、平成元年には連続立体交差及び交差道路2路線の事業認可を得た。平成3年から貨物基地、車両基地の移転工事に着手し、JR山陽本線高架工事等を経て連続立体交差事業は平成23年3月に完了した。これらの事業に伴い発生する広大な貨物ヤード跡地等の活用を図るため、姫路駅周辺土地区画整理事業が平行して進められ、現在も継続して行われている。区画整理道路と連結する都市計画道路の整備についても平行して事業が進められている。内々環状東線はその一つであり、計画幅員25m、2車線で供用される。

事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡に含まれている。内々環状東線の拡幅部分は基本的に歩道となるが、埋設管等の工事が生じることが判明したため、平成25年3月5日から調査区を5箇所設定し確認調査（姫路城跡第297次調査）を実施した。西側拡幅部のうち北側に設定した調査区については、既存建物により遺構は残存していなかったが、その他の調査区では遺構・遺物が確認でき、計画地に遺跡が残存していることが判明した。その後、姫路駅周辺整備室と文化財課で遺跡の保存を含めた施工方法について協議を行った。結果、工事により遺跡に影響が及ぶ範囲を対象に記録保存調査を実施することとなった。

調査地は酒井氏時代中期（寛延4（1751）年～宝暦4（1754）年）に描かれた「姫路侍屋敷図」と現況とを重ねた図1･2によれば、姫路城外堀及び土塁、武家屋敷等に該当している。

第２節　調査の経過

調査地は市街地であり、交通量も多いことから姫路警察と協議を行い、東部と西部の施行時期をずらして調査を行った。東部地区の調査（第303次調査）は株式会社三木組と工事請負契約を締結し、平成25年7月23日から開始した。調査箇所が民有地の出入口にあたることから、調査区を細かく分断しながら行った。1区は3分割、2区は分割なし、3区は4分割して実施し、10月1日に調査を完了した。調査中は適宜、遺構の記録をとり、各調査区の調査終盤で空中写真測量を株式会社パスコと委託契約を締結し実施した。

西部地区の調査（第315次調査）は有限会社サンエステートエンジニアリングと工事請負契約を締結し、平成25年11月22日から開始した。東部と同様、民有地の出入口の関係から調査区を細かく分断する必要が生じた。4区は4分割、5区は2分割して調査を行った。調査は4-1区西側から開始し、4-1区東側、4-3区、4-2区の順に実施した。4-2区と4-3区の調査を北から順に実施できなかったため、遺構名は各区毎に採番した。5区については、絵図の記載から遺構が少ないことが予想されたため一連で採番している。調査は平成26年2月12日に完了した。調査中は適宜、遺構の記録をとり、各調査区の調査終盤で空中写真測量を伸栄開発株式会社と委託契約を締結し実施した。

整理作業は平成29年度から開始し、遺物の実測作業を有限会社フジテクノ有限会社と委託契約を締結し実施した。平成30年度には遺構図面のトレース作業等を株式会社パスコと委託契約を締結し実施した。その後、編集作業を経て本書の刊行をもって当該事業は完了した。

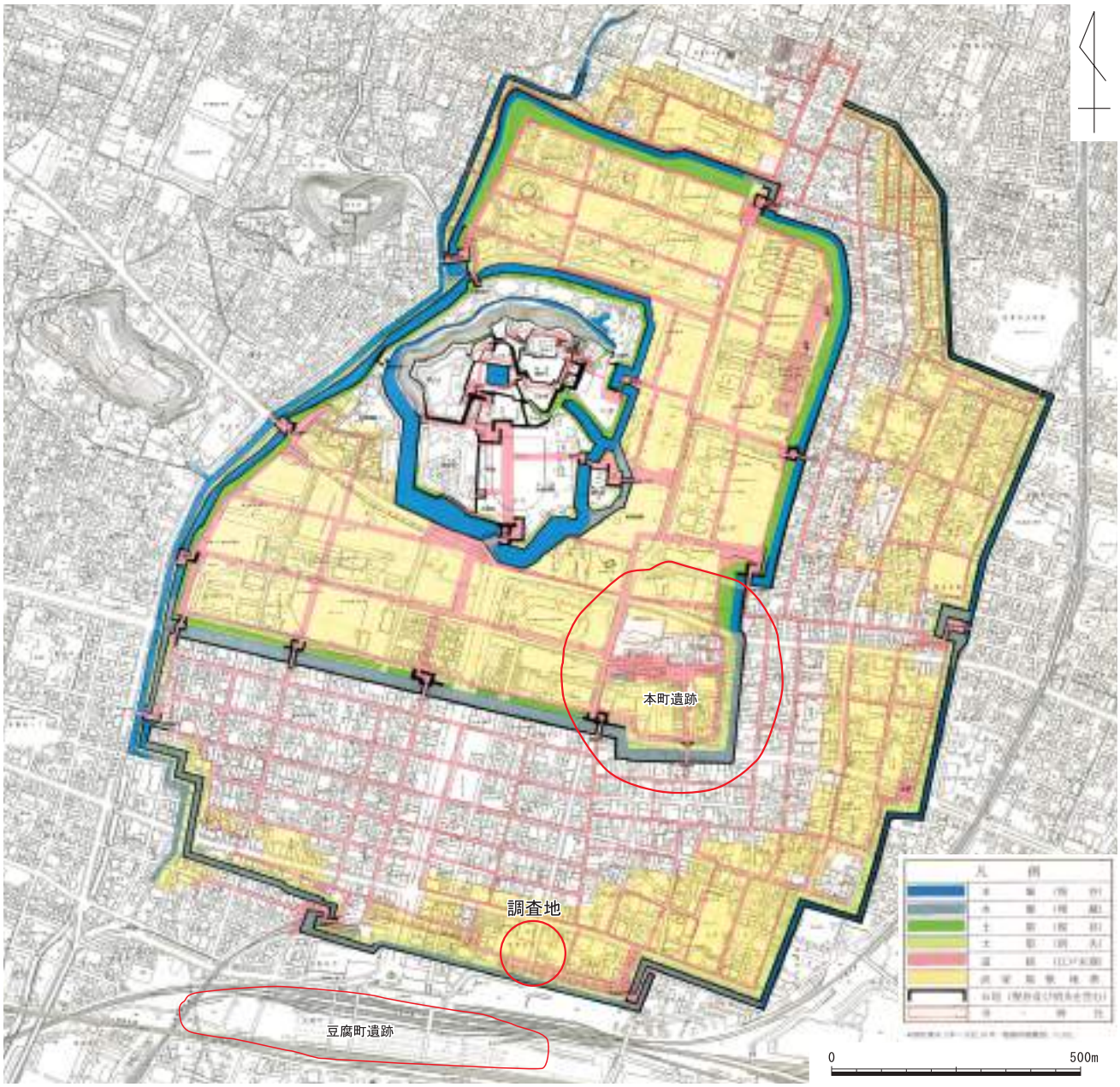


図1　調査位置図（S=1:13,000）

図2　調査区位置図（S=1:4,000）

第Ⅱ章　遺跡の歴史的環境と立地

第１節　遺跡の歴史的環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に貫く市川と夢前川によって形成された姫路平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、更に姫路を基点として東へは丹波、有馬方面へ、西へは美作あるいは因幡へと街道が延びている。南側は瀬戸内海航路が存在し交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として姫路は古代以来播磨の中心地として栄えた。近年の調査によって城下町の下層において、正方位を指向する奈良時代の遺構が次々と見つかっている。本町遺跡や豆腐町遺跡を含め、城下町に重なる広い範囲に播磨国府の諸施設の存在が予想される。平安時代になると遺構の分布は本町遺跡周辺に集中する傾向がうかがえ、緑釉陶器や黒色土器等が認められる。その後平安時代末から中世になると、城下町に重なる広い範囲で再び遺構･遺物が確認できるようになる。室町時代後半には元塩町や平野町といった播磨国総社周辺で遺構･遺物が検出されているものの、当該時期の遺構の広がりは未だはっきりしない。その後、羽柴秀吉が姫路に現れるまでは、近世の城下町に重なる広い範囲に田園風景が広がっていた様相が明らかになりつつある。羽柴･木下時代の姫路の様相は未だ明確ではないものの、近年の発掘調査の進展により情報が蓄積しつつある（姫路市埋蔵文化財センター 2018）。

近世姫路城は池田輝政により、慶長6年から同14年までかけて平野部と独立丘陵である姫山･鷺山を利用して作られた平山城である。独立丘陵の標高は約50m、平野部は11 ～ 15mを測る。市川の支流である船場川を西限とし、姫山･鷺山を囲うように内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされている。調査地である東駅前町は、外曲輪及び外堀に該当する。図3の「姫路侍屋敷図」に基づけば調査地の東約200mには北条（口）門があり、周辺には下級武士の屋敷が配置されている。西側には姫路藩筆頭家老、高須隼人の下屋敷がある。その南には街路をはさんで土塁際に土居が描かれている。この土居について本絵図には何であるかの記載はないが、17世紀中ごろの第一次榊原氏時代の絵図には同じ場所に馬場の表記がある。武家屋敷の住人は図3によれば調査地の1区が

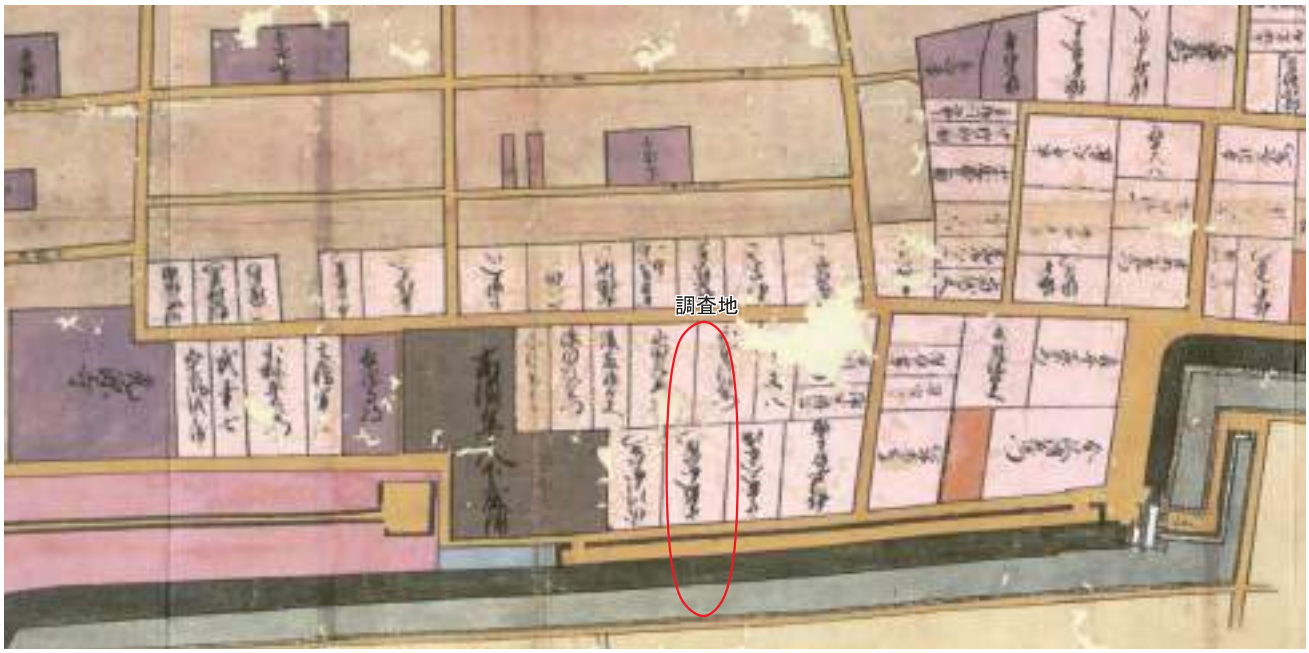


図3　「姫路侍屋敷図」部分〔寛延4年～宝暦4年（1751年～1754年）『姫路市史』第十一巻　付図３を一部改変の上転載〕

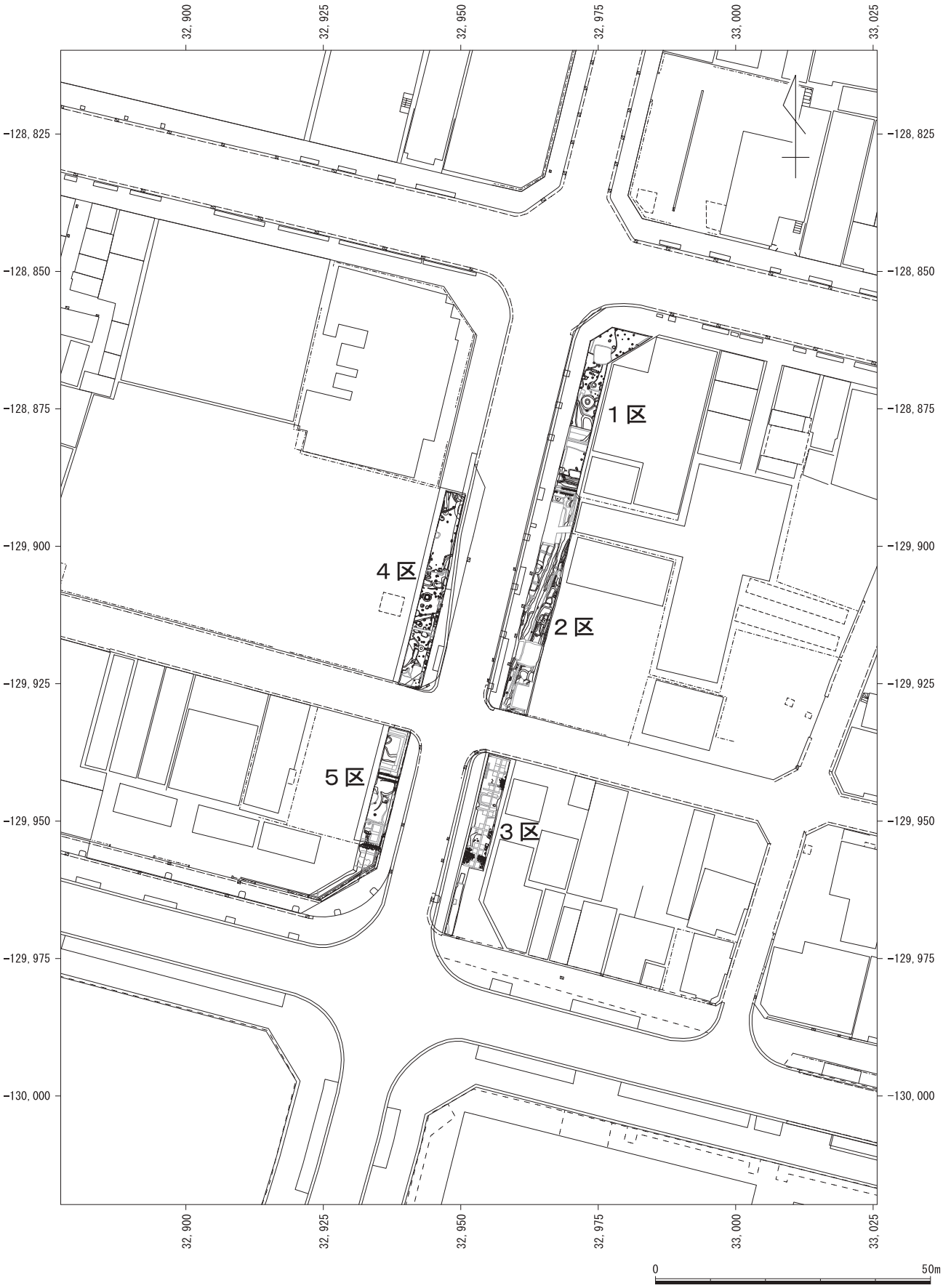


図4　調査区位置図（S＝1:1,000）

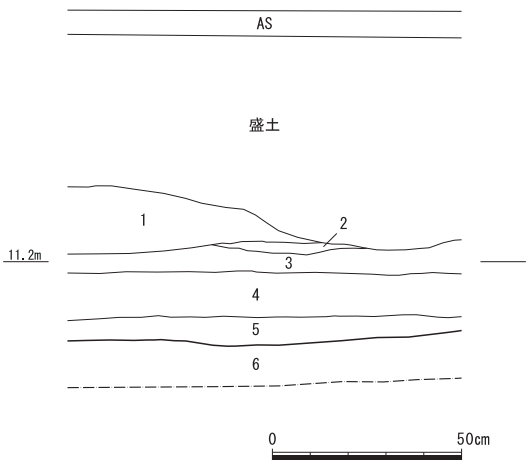
「山本源左衛門」、2区が「宇殿久米治」と「宇殿甚右衛門」にまたがり、4区が「宇殿甚右衛門」に、3区と5区が馬場・土塁・外堀に該当している。外堀は18世紀前半頃に描かれた「姫路城総堀管尺大間数図」に「堀幅7間5尺、水深4尺」と記載がある(姫路市立城郭研究室2014)。

明治維新を経て、明治21年に姫路－神戸間の鉄道が開通した。姫路駅は近世以来の町場であった外曲輪の町屋地域を避けるように姫路城の南側、外堀の外側にあたる田園地帯に建設された。そのため、町場と姫路駅との間に横たわる外堀・土塁は都市域の発展をさまたげる障害となり、明治～昭和にかけて徐々に埋められていった。姫路駅前は姫路の玄関口として都市化が著しく進み、往時の外堀や武家屋敷といった江戸時代の名残をとどめる場所は完全になくなった。そのため南部外堀の位置については絵図から推測できる程度で、現地表からその位置を厳密に特定することは困難となってしまった。図2は調査前の外堀の位置を想定復元したものであるが、本報告書で示す調査成果と比較すると南側に大きくズレて考えられていたことがわかる。近年の姫路駅周辺における公共事業・民間開発によって外堀の原位置が判明し、近世から近代、現代に至る姫路の都市化の変遷が明らかになりつつある。

第２節　調査地の立地と基本層序

姫路城城下町跡は、市川と夢前川によって形成された沖積平野に立地する。夢前川は市内最高峰である雪彦山(標高約915m)付近を水源とし、播磨灘まで南流する二級河川である。市川は朝来市生野町にある三国岳(標高約855m)付近を水源とする二級河川で、播磨灘まで南流している。この河川の上・中流域は侵食作用により、河岸段丘が発達しているが、遺跡の北方にある広峰山地と市川が接する付近から南側の下流域については様相が異なっている。左岸には段丘が発達しているが、遺跡の所在する右岸については発達せず、広峰山地から広がる緩やかな扇状地性の低地となっている。こうした低地では一般的に河道が安定しておらず、姫路平野においても市川あるいは夢前川の旧河道が随所に認められる(田中・成瀬1998)。姫路城城下町跡の範囲にも姫路市史において示されているように複数の旧河道跡が確認されている(八木1988)。これらの旧河道が、実在はともかく江戸時代以前の様相を記した地誌に青見川や藍染川などとして記載されたものであろう。地誌によれば姫路城の中堀などがこうした旧河道を利用し築かれたと記述するものもあるが、これまでの発掘調査においてそうした説を裏付ける成果は得られていない。

調査地の基本的な層序は、図5のとおりである。舗装版の下に約40cmの盛土、その下位に江戸時代の整地層(本図では1層であるが、場所によって複数層に及ぶ)、その下に江戸時代より前にあたる黄灰色細砂のいわゆる中世耕土及び床土層が確認できる。この層の上面までが江戸時代の遺構検出面となる。さらに下位には中世～古代の遺物を包含する暗灰黄色細砂がある。その下の黒褐色シルトは弥生時代頃の堆積層で本来はこの上面が弥生時代以降中世段階までの遺構検出面となる。ただ、この層は厚さ10cm未満と薄く、その下位にあるにぶい黄褐色細砂を通常地山と呼び遺構検出面としている。なお、この地山としている黄褐色細砂－シルト層は、中部礫層と呼ばれる5000年前の堆積層の上部に堆積したものである(成瀬1998)。



土層標準断面
1　2.5Y4/2 暗灰黄色細砂（江戸時代整地層）
2　2.5Y5/1 黄灰色細砂（耕土）
3　2.5Y6/4 黄褐色極細砂（床土）
4　2.5Y5/2 暗灰黄色細砂（中世～古代遺物包含層）
5　10YR3/1 黒褐色シルト（堆積層・遺構検出面）
6　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂（地山・遺構検出面）

図5　調査区標準断面（S=1:20）

第Ⅲ章　東部地区の調査(1区・2区)

第１節　１区の遺構と遺物

調査区は南北約31m、幅4mを測り、武家屋敷の一画に該当する。後述するように武家屋敷間の背割りの屋敷境が確認されているため屋敷地の半ばから裏手に該当していると考えられる。検出した遺構は、柱穴34基、土坑13基、溝3条、井戸１基である。個別の規模等については一覧を巻末にまとめている。ここでは、特徴的な遺構あるいは遺物がまとまって出土した遺構について言及する。

屋敷境遺構(SD6・SD7)　SD6はSD7を切り、SE2に切られる溝である。南半が既設配管と重なっていたため、この部分の調査はできなかった。主軸はN14° Eの直交方向である。調査区土層断面から確認できる幅は1.3m以上、深さは90㎝である。SE2は出土遺物が概ね19世紀のものであることから、本遺構はそれ以前の時期に位置づけられる。出土遺物は極めて少なく、図化できたのは肥前系磁器碗の**1・2**のみである。

SD7はSK33を切り、SD6・SE2に切られる溝である。主軸はSD6と同様でN14° Eの直交方向である。土層断面から確認できる幅は1.4m、深さは110㎝である。出土遺物はなく、切り合い関係にあるSK33に関しても同様であるため、年代の特定は困難である。

この2条の溝は東西方向に延びることから、背割りの敷地境としての機能が想定される。また、SD6の直南には同方向に伸びる間知石組みの溝が構築されており、江戸時代から近代に至るまで、位置を南にずらしながら敷地境として機能していたものと考えられる。これらの遺構の主軸であるN14° Eの方位は「築城ライン」と呼ばれ、これ基づく町割りは池田輝政による姫路城の築城時に新たに設定されたと想定されてきた(堀田1988)。近年では、姫路城城下町跡の調査の進展により、この町割りが築城以前の地割りを踏襲していることを示す事例が確認されている(姫路市教育委員会2014a・b、姫路市埋蔵文化財センター 2015)。この方位に基づく町割りは姫路城大天守からみて南面、調査地以西の外曲輪及び中曲輪南部に広くみられる。

SE2　SD6・SD7・SD8・SK29を切る。掘方は直径約1.6m、井戸側は河原石組みで内径約1.1m、深さは遺構検出面から110㎝を測る。埋土からは多量の陶磁器が出土した。**3**は肥前系磁器碗、**4**は肥前系磁器広東碗、**5・6**は肥前系磁器皿、**7**は瀬戸・美濃焼磁器皿、**8**は肥前系磁器仏飯具であり、**9**は施釉陶器片口、**10**は京・信楽系陶器皿、**11**は施釉陶器土瓶、**12**は丹波焼甕、**13**は堺・明石系擂鉢、**14**は丹波焼擂鉢である。これらは概ね19世紀に位置づけられる。

SK9　1区のほぼ中央部で検出した大型の土坑である。大部分が調査区外に広がるため、全形は不明である。深さは110㎝を測る。図9の9層のように薄い粘土層が堆積していることから一定期間開かれた状態が維持されていたことがわかる。また、出土遺物は極めて少ないため、廃棄土坑とは別の性格を考える必要があるだろう。**15**は磁器皿、**16**は肥前系陶器碗、**17**は志野皿、**18**は土師器皿で、口縁には灯芯痕が認められ、灯明皿として使用されていたことがわかる。**19**は砥石である。出土遺物が少ないため、年代の特定は困難である。

第２節　２区の遺構と遺物

調査区は南北41.5m、幅約5mを測り、武家屋敷の一画に該当する。後述するように調査区中央を縦断する屋敷境が確認されているため、東半部と西半部で帰属する敷地が異なっていることが明らかになった。南は近世の街路を踏襲している道路に面し、北は背割りの屋敷境遺構(SD6・SD7)までであることから、本調査区は武家屋敷の北端から南端までを縦断していることがわかる。検出した遺構は、柱穴1基、土坑16基、溝2条、井戸1

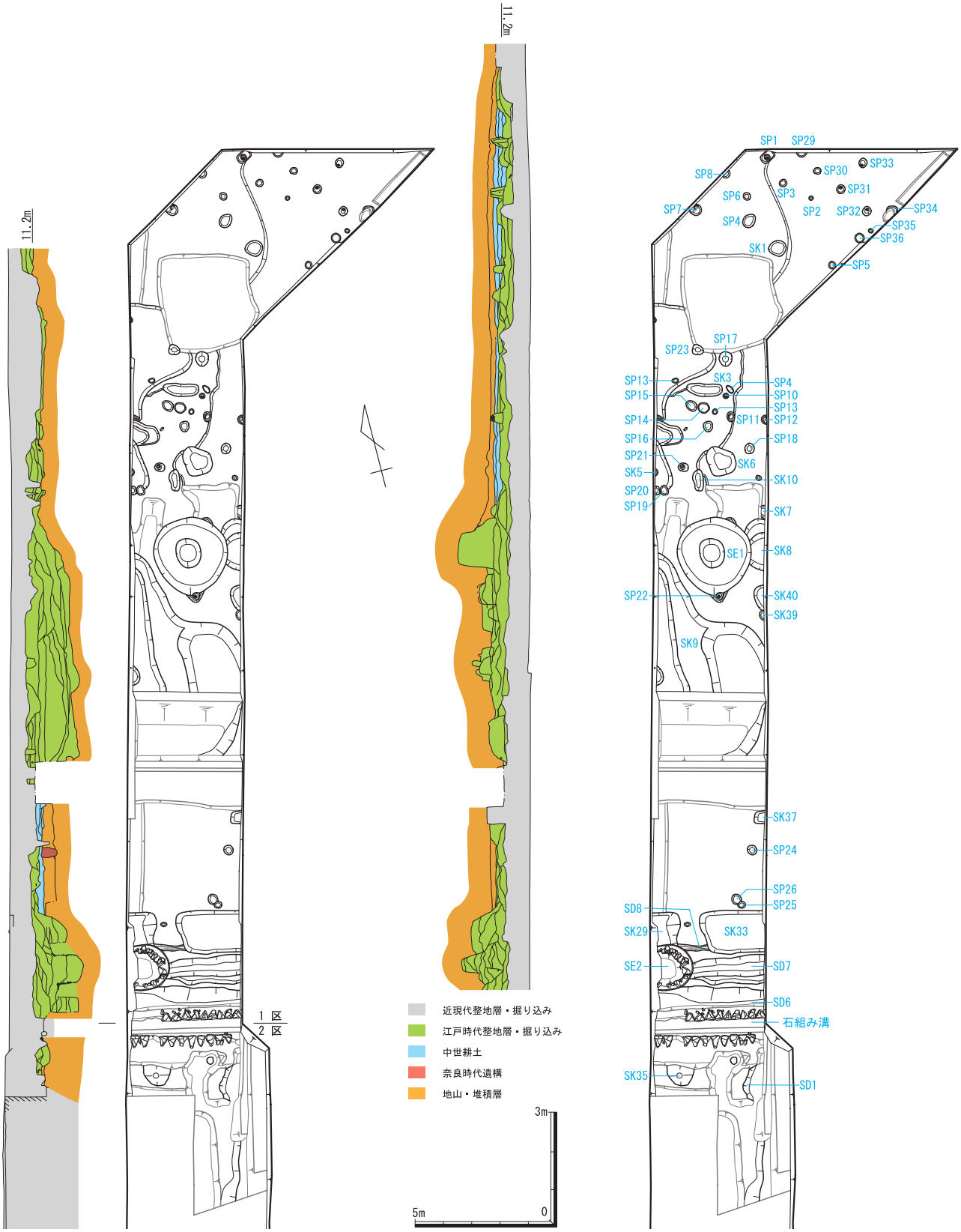
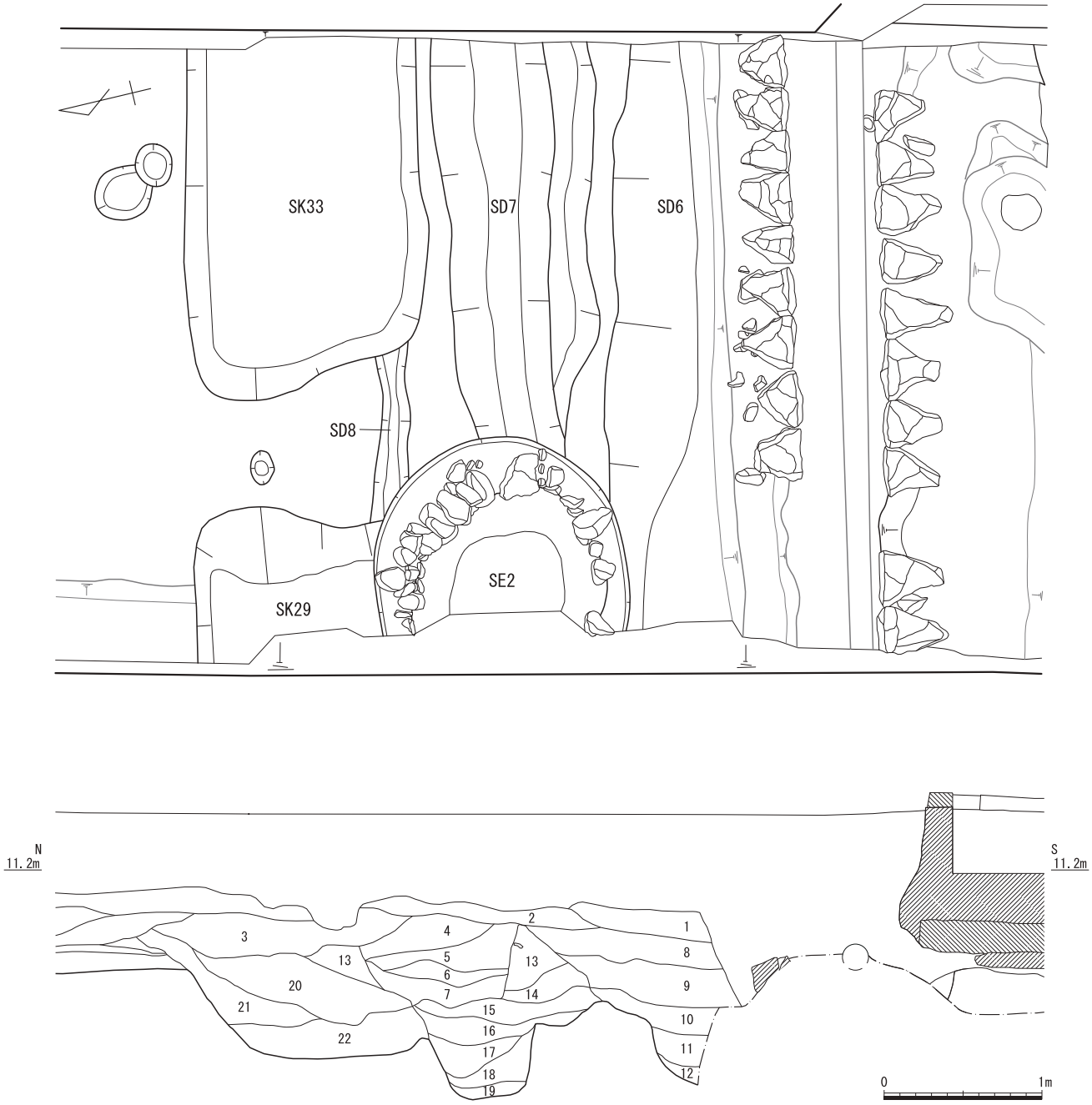


図6　1区 平面・断面図、遺構番号図（水平 S=1:200、垂直 S=1:150）



1　10YR4/1褐灰色細砂　炭を含む
2　10YR5/2灰黄褐色中砂
3　10YR5/2灰黄褐色極細砂
4　10YR5/2灰黄褐色細砂
5　10YR5/2灰黄褐色細砂　炭を多く含む
6　10YR5/2灰黄褐色細砂　黄色土ブロックを含む
7　10YR5/3にぶい黄褐色細砂　黄色土ブロックを含む
8　10YR5/2灰黄褐色極細砂
9　10YR5/2灰黄褐色砂礫　3～10cm大の円礫からなる
10　10YR6/1褐灰色シルト
11　10YR6/1褐灰色極細砂～細砂
12　5GY6/1オリーブ灰色極細砂
13　10YR6/3にぶい黄橙色細砂　炭を含む
14　10YR6/3にぶい黄橙色細砂
15　10YR6/2灰黄褐色細砂
16　10YR5/2灰黄褐色細砂
17　10YR4/2灰黄褐色極細砂
18　10YR6/1褐灰色シルト　黄色土・黒褐色土が互層状に入る
19　10YR6/1褐灰色シルト
20　10YR6/2灰黄褐色極細砂　黄色土・黒褐色土ブロックを多く含む
21　10YR6/1褐灰色極細砂～シルト　炭を含む
22　10YR6/1褐灰色極細砂　黒褐色土ブロックを含む

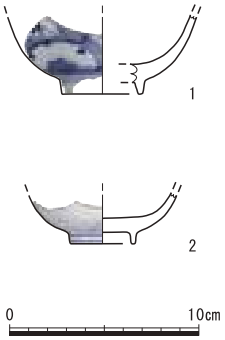


図7　SK33・SD6・SD7 平面・断面図（S=1:40）、SD6出土遺物（S=1:4）

図8　SE2 平面・断面図（S=1:40）、出土遺物（S=1:4）

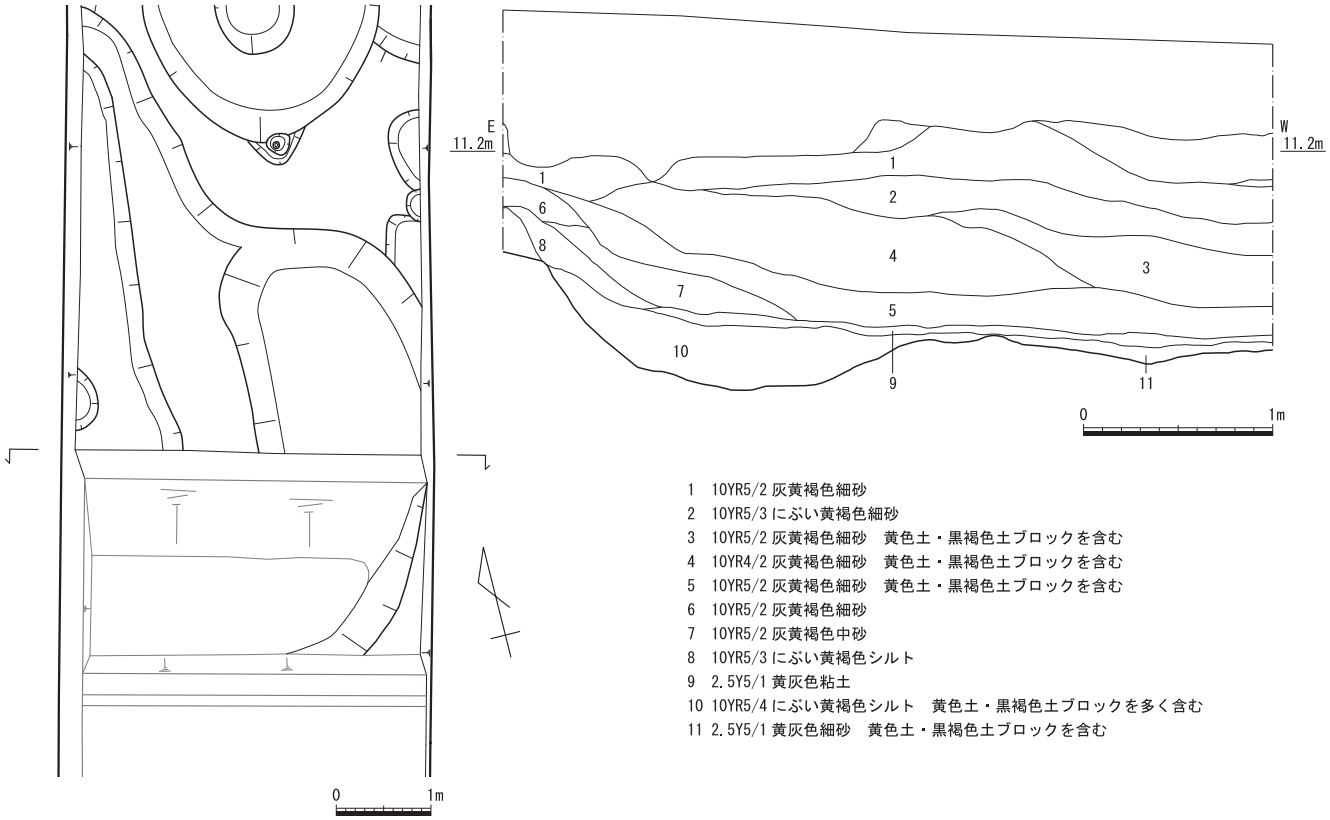


図9　SK9 平面（S=1:80）・断面図（S=1:40）

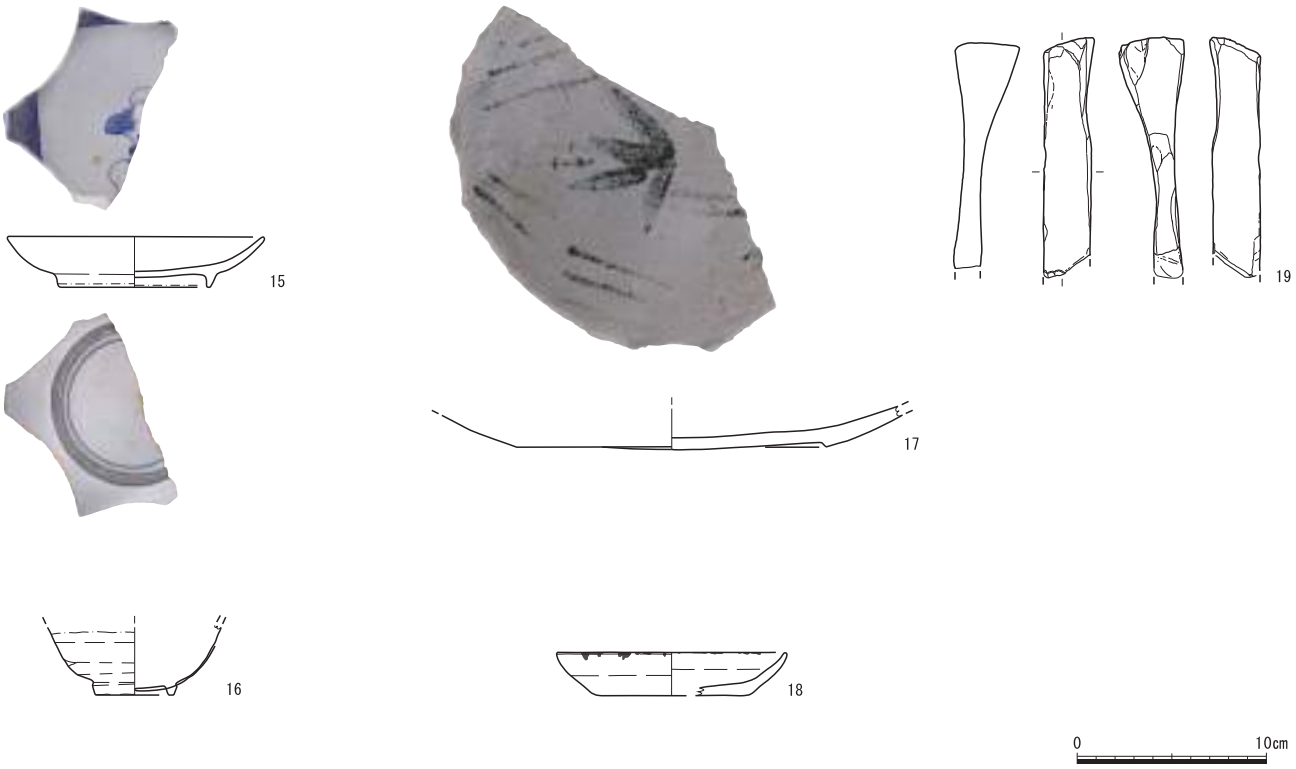


図10　SK9 出土遺物（S=1:4）

基である。個別の規模等については一覧を巻末にまとめている。ここでは、特徴的な遺構あるいは遺物がまとまって出土した遺構について言及する。

SD1　2区中央を縦断する溝で、SK13、SK19、SK27、SK28に切られる。幅1.4m、延長37m以上を測る。図12のA-A'断面では深さ50cm、B-B'断面では深さ25cmと北に向かって浅くなる。主軸はN21°Eで、飾磨郡の条里地割の方位と一致する。出土遺物は良好な一括資料と評価できたため、図化できるものは全て掲載した。**20**は青花皿、**21**は肥前系磁器皿、**22**は肥前系陶器皿で、**22**には胎土目が認められる。**23**は肥前系陶器碗、**24・25**は備前焼壺、**26**は信楽焼蓋、**27**は備前焼平鉢、**28・29**は備前焼擂鉢である。また、**30〜38**は土師器皿で、**30〜35**が手づくね、**36〜38**が底部糸切りと分類できる。**34・37**には灯芯痕が認められる。**39**は瓦質土器の容器で、火消し壺の可能性がある。これらは概ね17世紀前葉に位置づけられる。また、本遺構が埋められた後このラインを越えて遺構が広がらないため、屋敷境としての機能が想定され、江戸時代を通じてその位置は動いていないものと考えられる。さらに横倒しの丸太を埋設した近代の溝状掘方がSD1の西肩に沿うように配置されていたことから、この屋敷境は近代まで維持されていたと考えられる。先述のように本遺構の主軸はN21°Eで、当該地の条里地割の方位と一致しているが、1区で検出した背割りの屋敷境遺構(SD6・SD7)とは斜交する。この状況は図3の「姫路侍屋敷図」の記述とよく整合している。また、2区東半で確認したSK19・SK22・SK32・SD4の主軸はSD1と平行している一方で、西半ではSK27・SK28の東辺はSD1ではなくSD7・SD8と同じ方位を採っているようにもみえる。

SD4　SD1に平行して延びる。SK22、SK30を切り、SK16に切られる。幅1.0m、深さ50cmを測り、主軸はSD1と同様にN21°Eで、当該地の条里地割の方位と一致する。出土遺物は少ない。**40・41・42・45**は肥前系磁器碗、**43**は青磁香炉、**44・46**は施釉陶器碗、**47**はミニチュア鉢、**48**は肥前系陶器甕、**49**は瀬戸焼鉢、**50**は備前焼擂鉢、**51**は土師器焙烙である。18世紀に位置づけることができる。

SK19　延長2.7m、幅0.7m、深さ30cmを測る。出土遺物は少ない。土師器焙烙**60**があり、外面下半にタタキ目が認められるA3類である。

SK20　SK30に切られ、SK22を切る。長辺2.6m、短辺0.8m、深さ40cmを測る楕円形の土坑である。底には凹凸がある。年代を特定しうる遺物は出土していない。

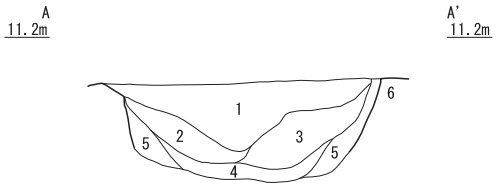
SK22　SK20、SK30、SD4に切られる。延長1.8m、幅0.8m、深さ50cmを測る隅丸方形の土坑である。埋土は10cm大の円礫を主体とした砂礫であった。**52**は瀬戸・美濃焼天目碗、**53**は肥前系陶器碗、**54**は京・信楽系陶器鉢、**55**は肥前系陶器皿である。**56・57**は土師器皿で、いずれも手づくねによるものである。**58**は丹波焼鉢、**59**は土師器焼塩壺である。17世紀前葉に位置づけられる。

SK27　SK28を切る。大部分は調査区外のため全形は不明である。延長2.5m、幅1m以上、深さ50cmを測る。**61・62**は肥前系磁器碗、**63**は肥前系磁器小碗、**64・65・66**は京・信楽系陶器碗、**67**は京・信楽系陶器鉢、**68**は丹波焼壺、**69**は丹波焼甕、**70**は土師器焙烙である。これらは18世紀前半から中ごろに位置づけられる。

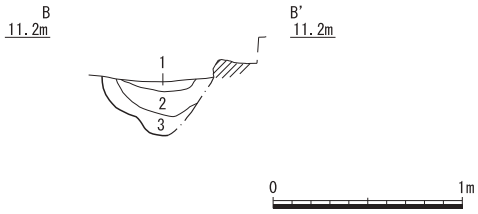
SK28　SK27に切られる。大部分は調査区外のため全形は不明である。延長3.6m、幅1m以上、深さ30cmを測る。**71**は肥前系磁器碗、**72**は肥前系磁器皿、**73**は肥前系青磁香炉、**74**は瀬戸・美濃焼陶器碗、**75**は京・信楽系陶器碗、**76**は肥前系陶器鉢、**77・78**は堺・明石系擂鉢である。**78**の片口部内面には刻印が認められる。**79**は土師器皿、**80**は土師器焙烙である。これらは18世紀前半から中ごろに位置づけられる。

SK31　SK30・SK32を切る。長辺1.3m、短辺1.2m、深さ35cmを測るやや不整形の土坑である。断面によると桶が据えられていたと考えられる。桶自体は腐朽していたが、土層の色調差などから概ね直径1.0m程度のものであったと考えられる。遺物は出土しなかった。

図11　2区 平面・土層断面図（水平 S=1:200、垂直 S=1:150）、遺構番号図



1　2.5Y4/1黄灰色極細砂　炭を含む
2　2.5Y5/1黄灰色極細砂　基盤層ブロックを含む
3　2.5Y4/1黄灰色砂礫　5～10ｃｍ大の円レキを含む
4　2.5Y4/1黄灰色極細砂　炭を含む
5　2.5Y6/1黄灰色極細砂　基盤層ブロックを含む



1　10YR5/1褐灰色極細砂　炭を含む
2　10YR6/1褐灰色シルト
3　10YR6/4にぶい黄橙色シルト　黄色土ブロックを含む

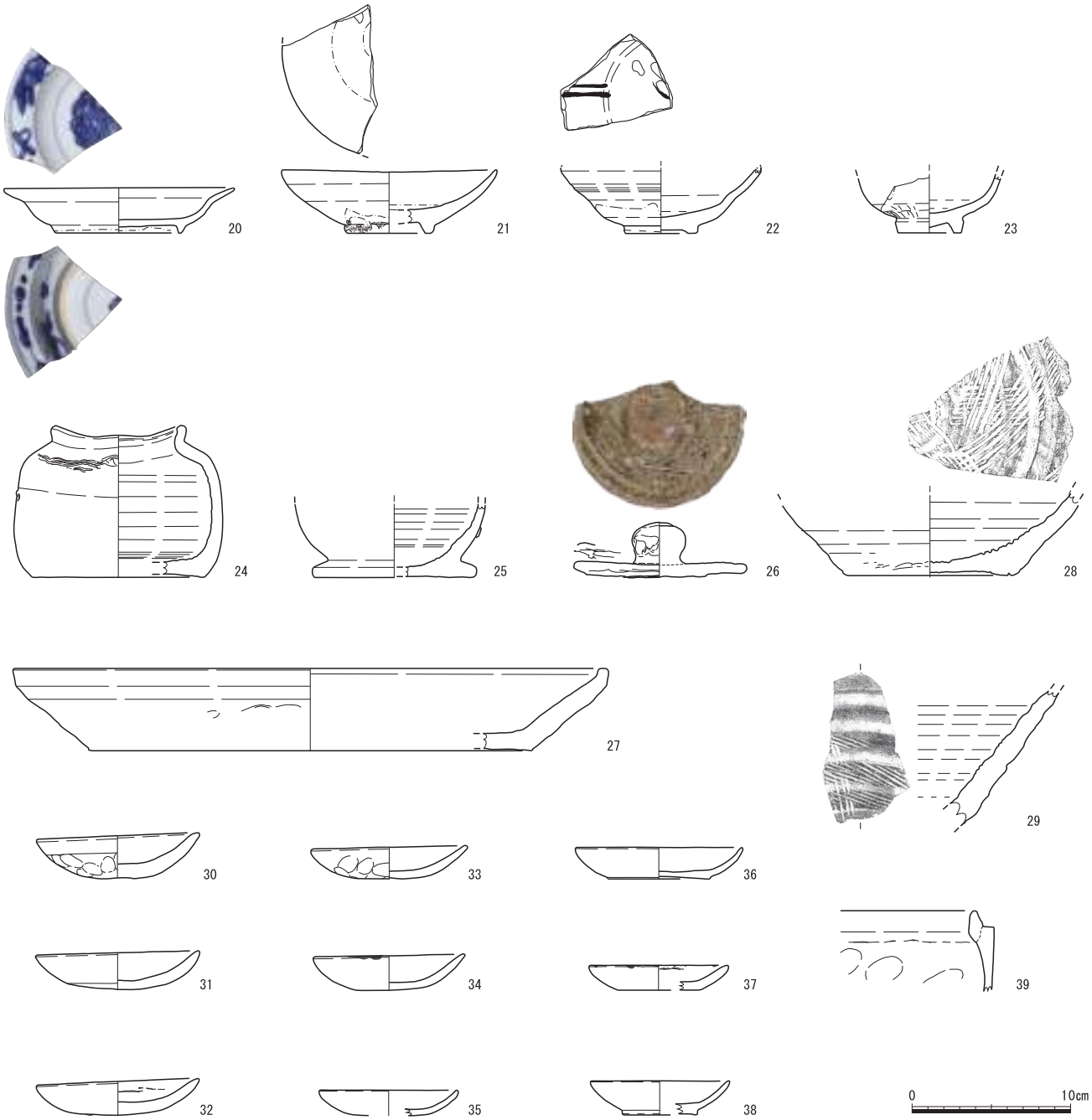
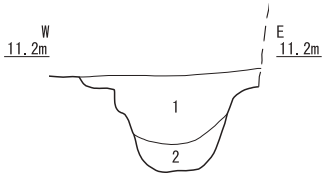


図12　SD1 断面図（S=1:40）、出土遺物（S=1:4）



1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
2　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　黄色土ブロックを含む

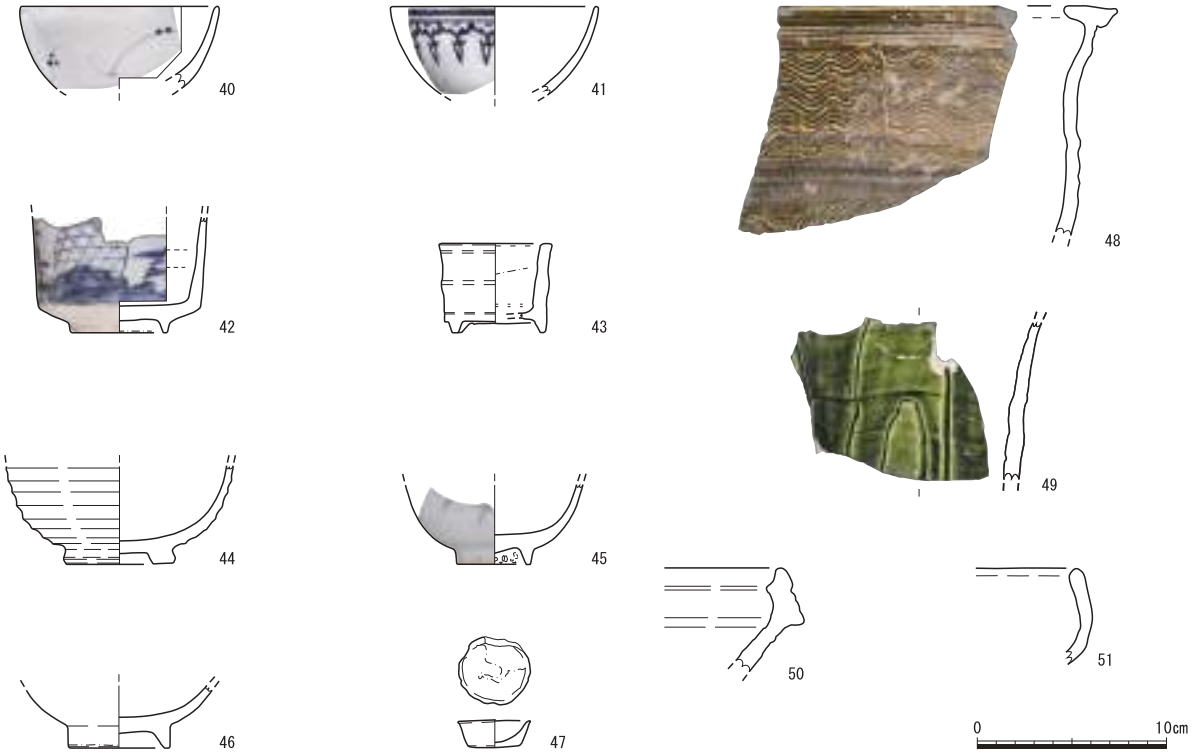


図13　SD4 平面（S＝1:80）・断面図（S=1:40）、出土遺物（S=1:4）

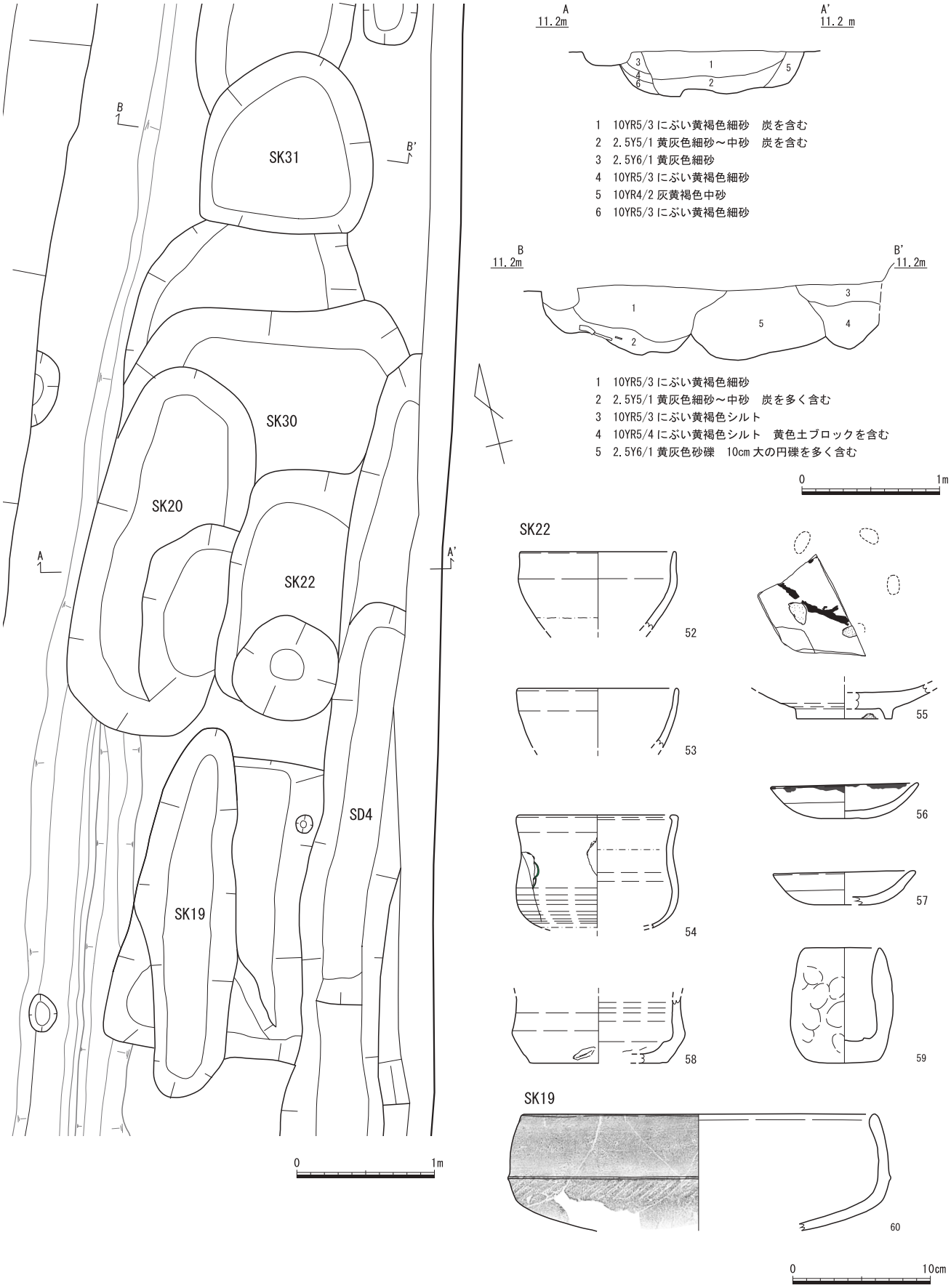
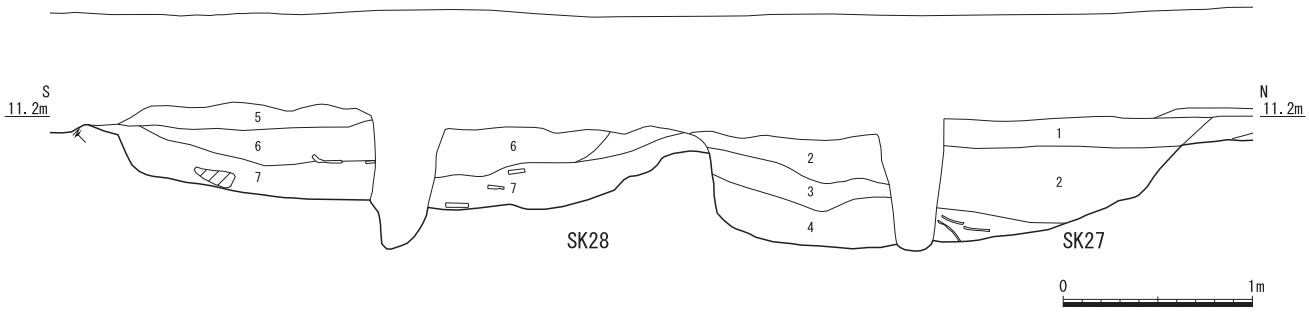


図14　SK19・SK20・SK22・SK31・SD4 平面・断面図（S=1:40）、SK19・SK22 出土遺物（S=1:4）



1　2.5Y5/2 暗灰黄色中砂
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂
3　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
4　2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂　炭を含む
5　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂　炭を含む
6　2.5Y5/3 黄褐色細砂　炭を含む
7　2.5Y6/2 灰黄色細砂

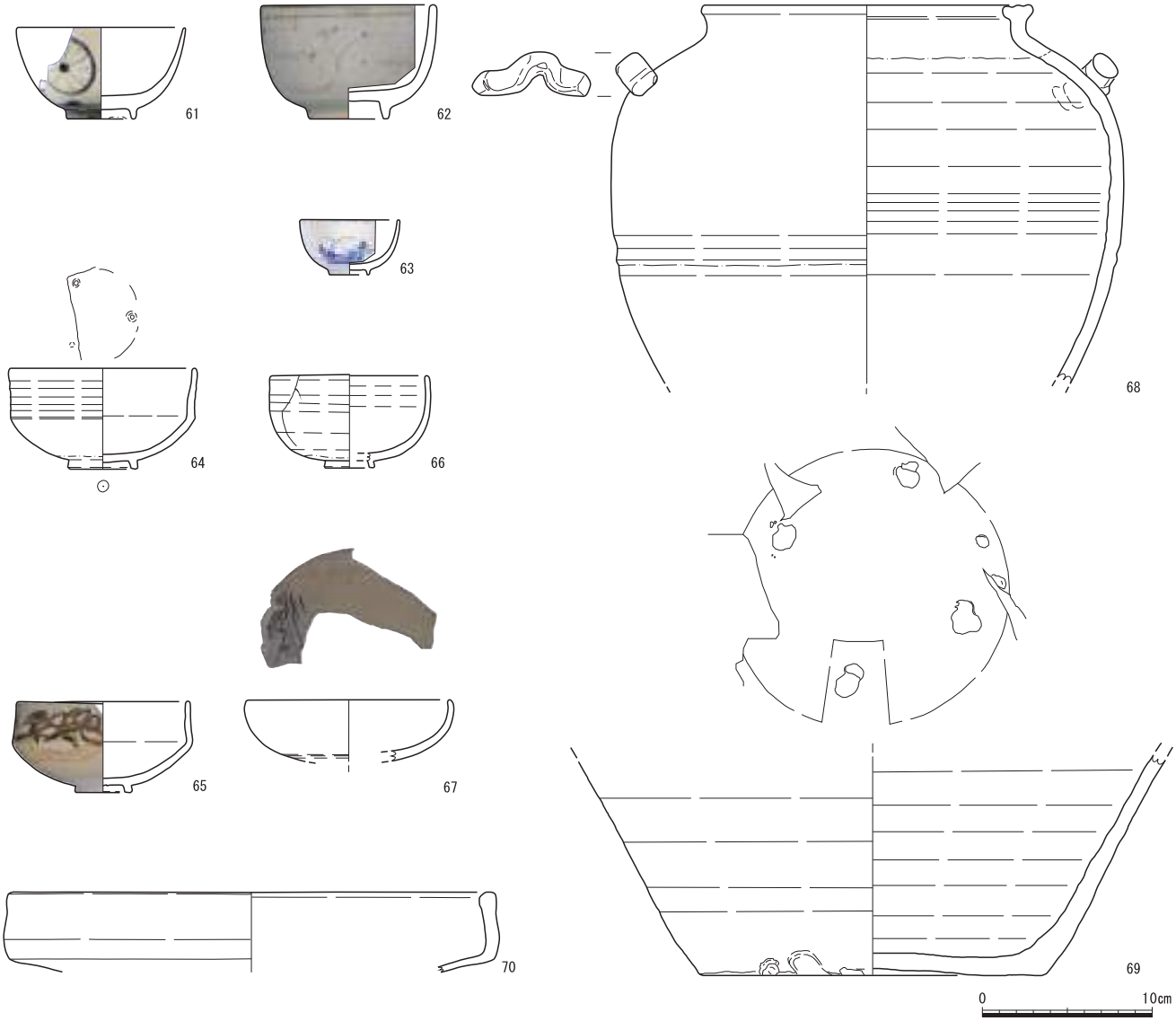


図15　SK27・SK28 断面図（S=1:40）、SK27 出土遺物（S=1:4）

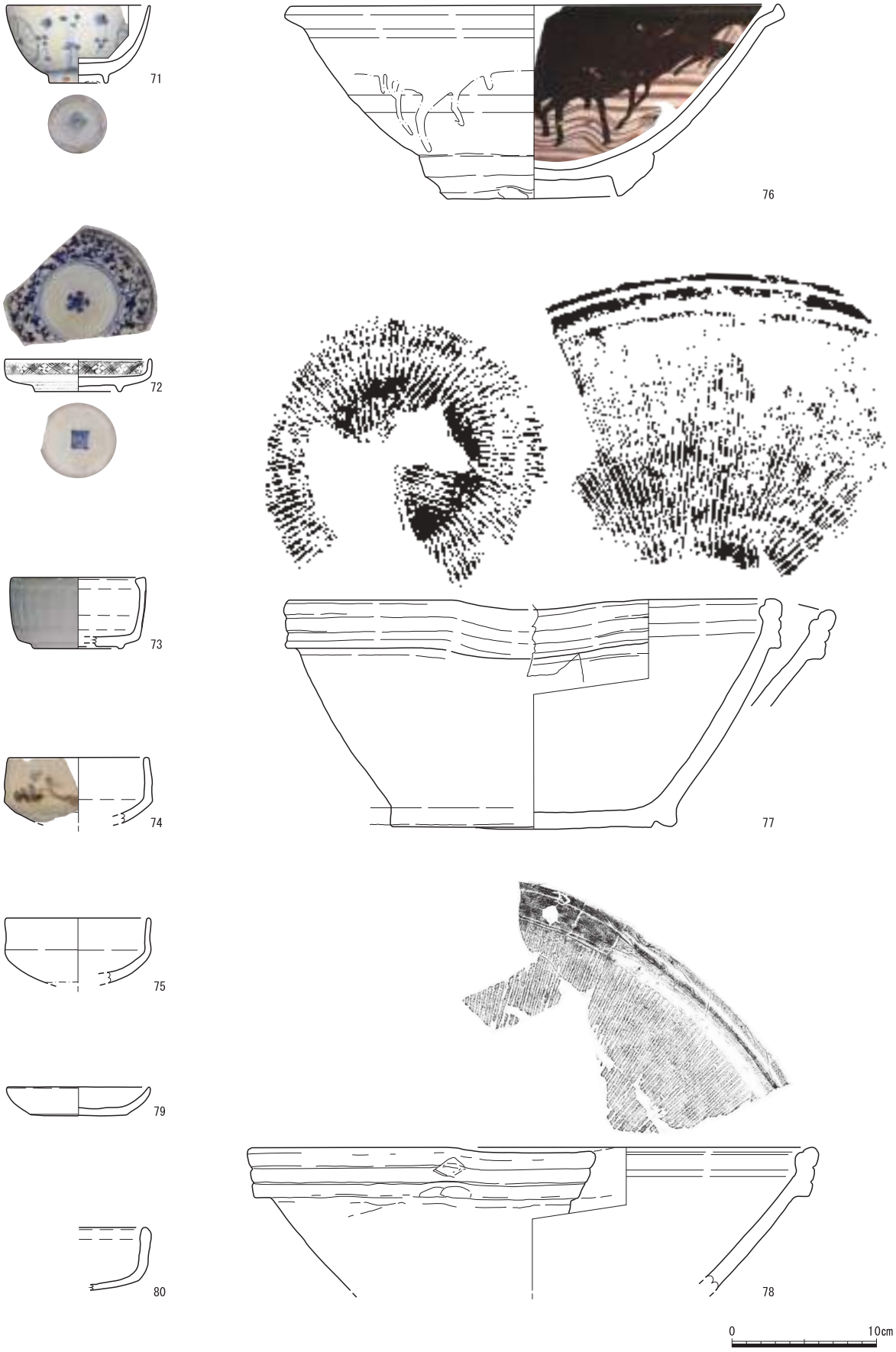


図16　SK28 出土遺物（S=1:4）

第Ⅳ章　西部地区の調査(4区)

調査区は南北36m、幅4.2mを測り、江戸時代の武家屋敷の一画に該当する。武家屋敷全体の構造が不明なため、調査区が具体的にどの場所にあたるのかは明らかでない。ただ、第Ⅲ章第2節で述べたように武家屋敷の屋敷境が検出できていることから、「宇殿甚右衛門」の屋敷内の西寄りにあたると想定できる。検出した遺構は、4－1区で柱穴16基、土坑14基、溝1条である。4－2区で柱穴40基、土坑7基、溝2条、井戸1基である。4－3区で柱穴18基、土坑5基、不明遺構1基である。個別の規模等については一覧を巻末にまとめている。ここでは、特徴的な遺構あるいは遺物がまとまって出土した遺構について言及する。

4－1区

SK5　調査区西壁沿いで検出した。調査区外に大半が延びるため全形は不明であるが、検出規模で長辺1.7m以上、短辺27cm以上、深さは33cmを測る。遺物は**95**の陶器甕が出土した。外面にはトビガンナ状の削りが認められる。

SK9　調査区北西端で検出した。SK8に切られる。調査区外に延びるため全形は不明であるが、検出規模で長辺4.27m、短辺1.07m、深さは最大で75cmを測る。上層は明らかに江戸時代の埋土であるが、下層埋土は古代の遺構埋土と共通する。まとまった遺物の出土がないため明確な時期は特定できない。遺物は**81**の須恵器杯Bが出土している。内面に漆の付着が認められる。調査区の南にある豆腐町遺跡でも同様の漆付着土器が多数出土しており関連がうかがえる。

SK10　調査区北東端で検出した。SK28に切られる。調査区外に延びるため全形は不明であるが、検出規模で長辺2.0m、短辺1.65m、深さは最大で1.49mを測る。掘方上部は緩やかに傾斜するが、中位から角度をもって掘り込まれ調査区北東隅で最大深度となる。遺物は中位から下位にかけて埋土中から散漫に出土した。**84**は肥前系磁器の紅皿である。**85**は瀬戸新製焼、**86**・**87**は肥前系磁器である。**88**は柿釉の灯明皿、**89**は京・信楽系陶器の碗、**90**は備前焼蓋、**91**は在地産の焙烙である。**92**・**93**は堺・明石系擂鉢、**94**は瓦質土器火鉢であろう。出土遺物の時期は端反碗85・86、焙烙H類**91**の存在から19世紀前半～幕末に位置づけられる。

SK27　調査区南側で検出した。上部は撹乱を受けており、遺構の輪郭と下層埋土の一部がかろうじて残っていた。検出規模で長辺2.83m、短辺1.3m、深さ70cmを測る。遺物は下層埋土から出土した。**96**は瀬戸・美濃焼の皿か。内面に銅版転写により文様を描く。**97**は外面に人工コバルトを用いた型紙摺絵を施す。**98**は頭部を欠く土人形である。時期は**96**・**97**から明治時代に位置づけられる。

SK28　SK10を切る。調査区外に広がるため全形は不明であるが、検出規模で長辺3.45m、短辺1.3m、深さ91cmを測る。埋土には大量の礫や炭が含まれ、一度に埋められた様相を呈する。遺物は土坑の規模に比して少なく、**82**と**83**の染付碗を図示した。**82**は瀬戸新製焼、**83**は青花であろう。切り合い関係からSK10に後続する時期に位置づけられる。

SP17－SP26　調査区のほぼ中央で検出した。柱穴の間隔は1.4m～3.0mとばらつくが本来は一連の柵あるいは塀と考えられる。検出長で10.8mを測る。遺構の主軸は調査区に対して斜行し、2区で検出した屋敷境と平行するN21° Eである。敷地内を区画する施設であろうか。

4－2区

SE1　西部地区で見つかった唯一の井戸である。掘方は直径約1.6m、井戸側は河原石組みで直径約80cmを測る。石組みは遺構検出面から約50cm掘り下げた時点で検出した。井戸内は礫と砂により埋め戻されていた。深さは遺構検出面から1.55mまで確認したが、河原石の抜けた部分等があり、安全上それ以下の調査を行っていない。調査した深度までに遺物の出土はなかったため、厳密な時期は不明であるが、掘方と石組みの間の間隔が狭いことから江戸時代後半以降の所産と推測できる。

SP19　調査区中央付近の東壁沿いで検出した。土坑内から「山本酒店」「貪、个」「電話ニ七六」「非売品」と鉄釉で書かれた通い徳利が横位の状態で出土した。山本酒店は、山本寅吉氏により明治33年に創業され現在も古二階町で営業している。電話番号が3桁であるため手動交換機時代のものと考えられる。大正12年の姫路市域の電話数

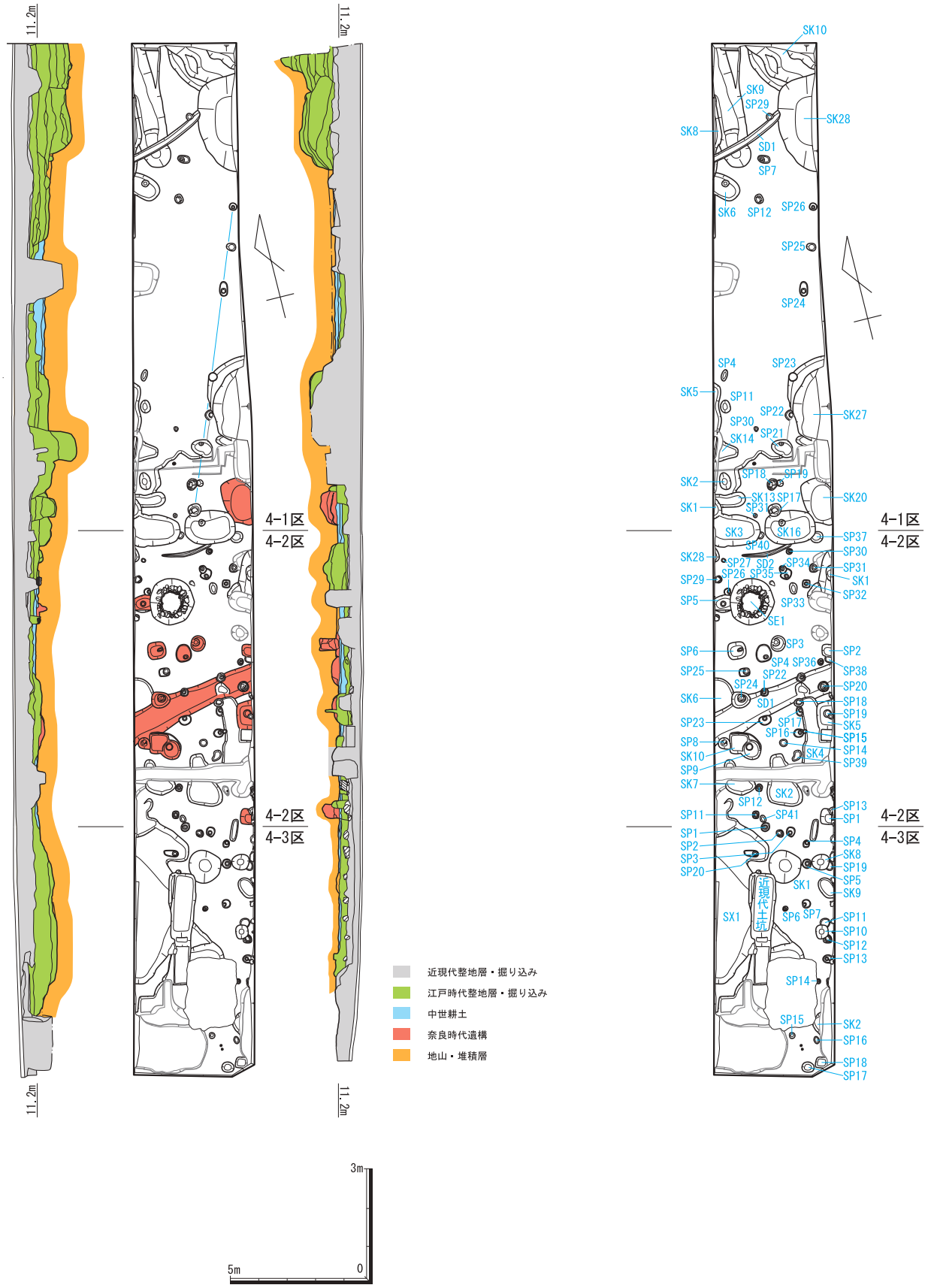


図17　区 平面・土層断面図（水平 S=1:200、垂直 S=1:150）、遺構番号図

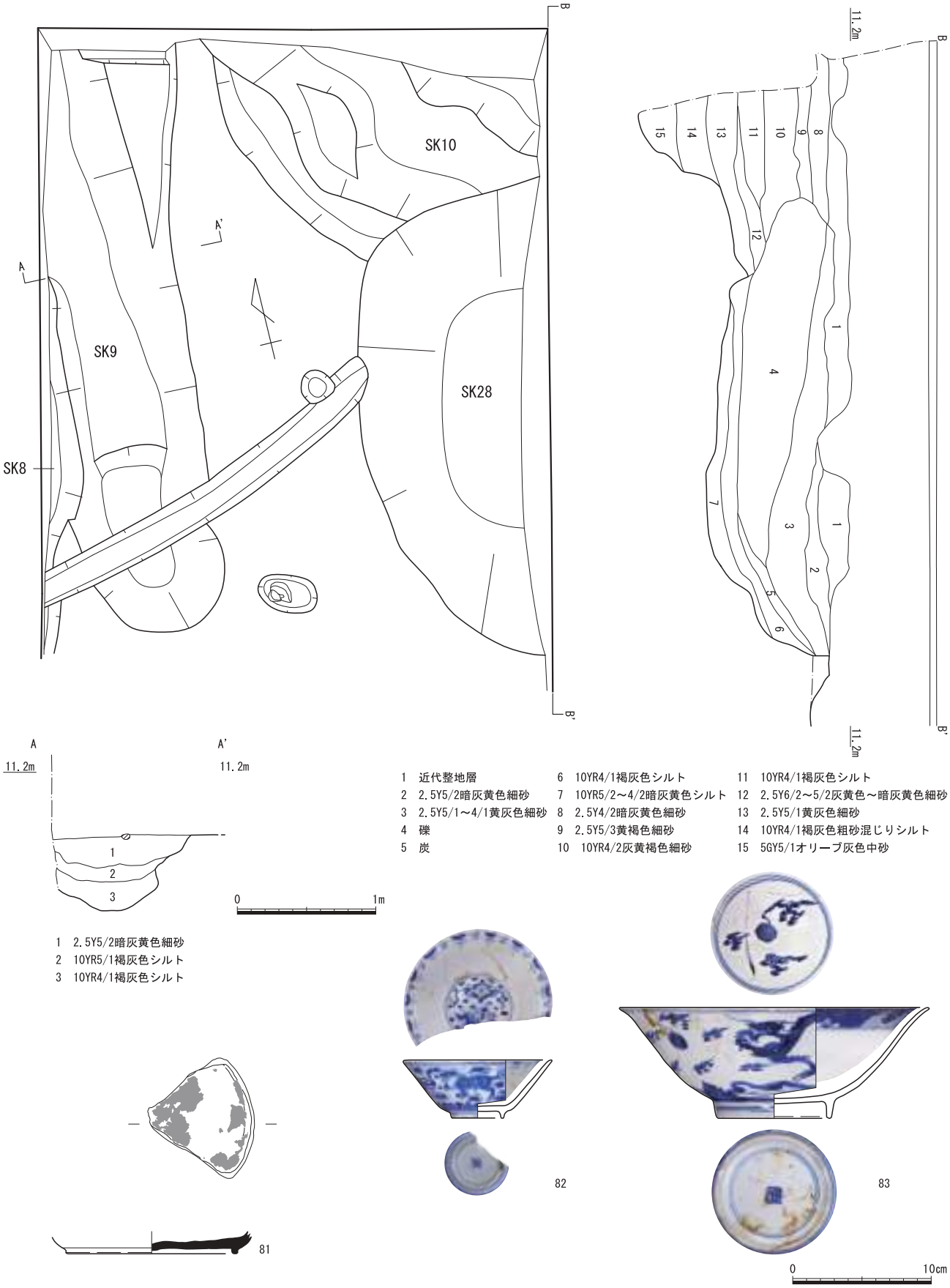


図18　4-1区 北端部平面・断面図（S=1:40）、SK9・SK28出土遺物（S=1:4）

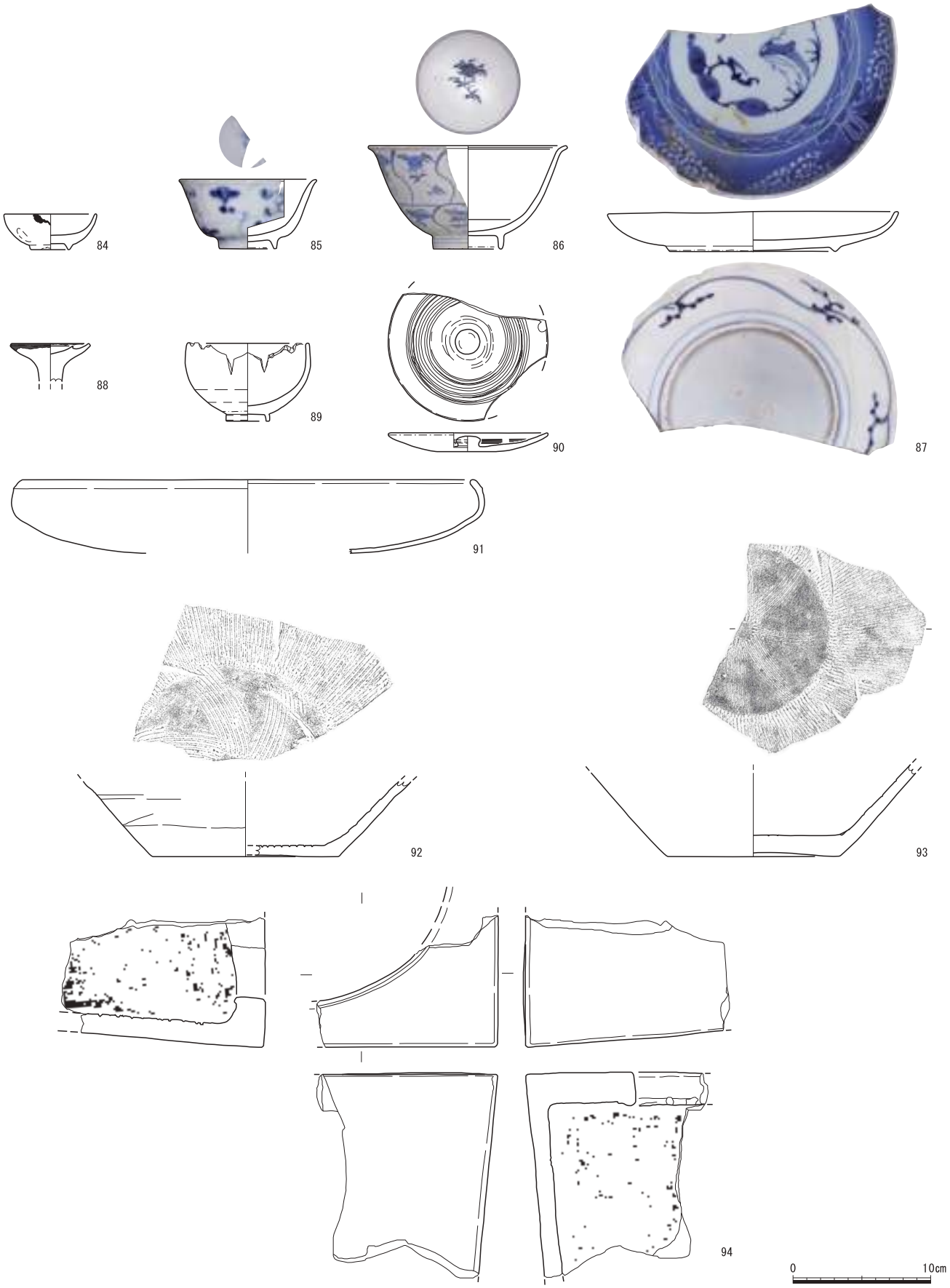


図19　SK10 出土遺物（S=1:4）

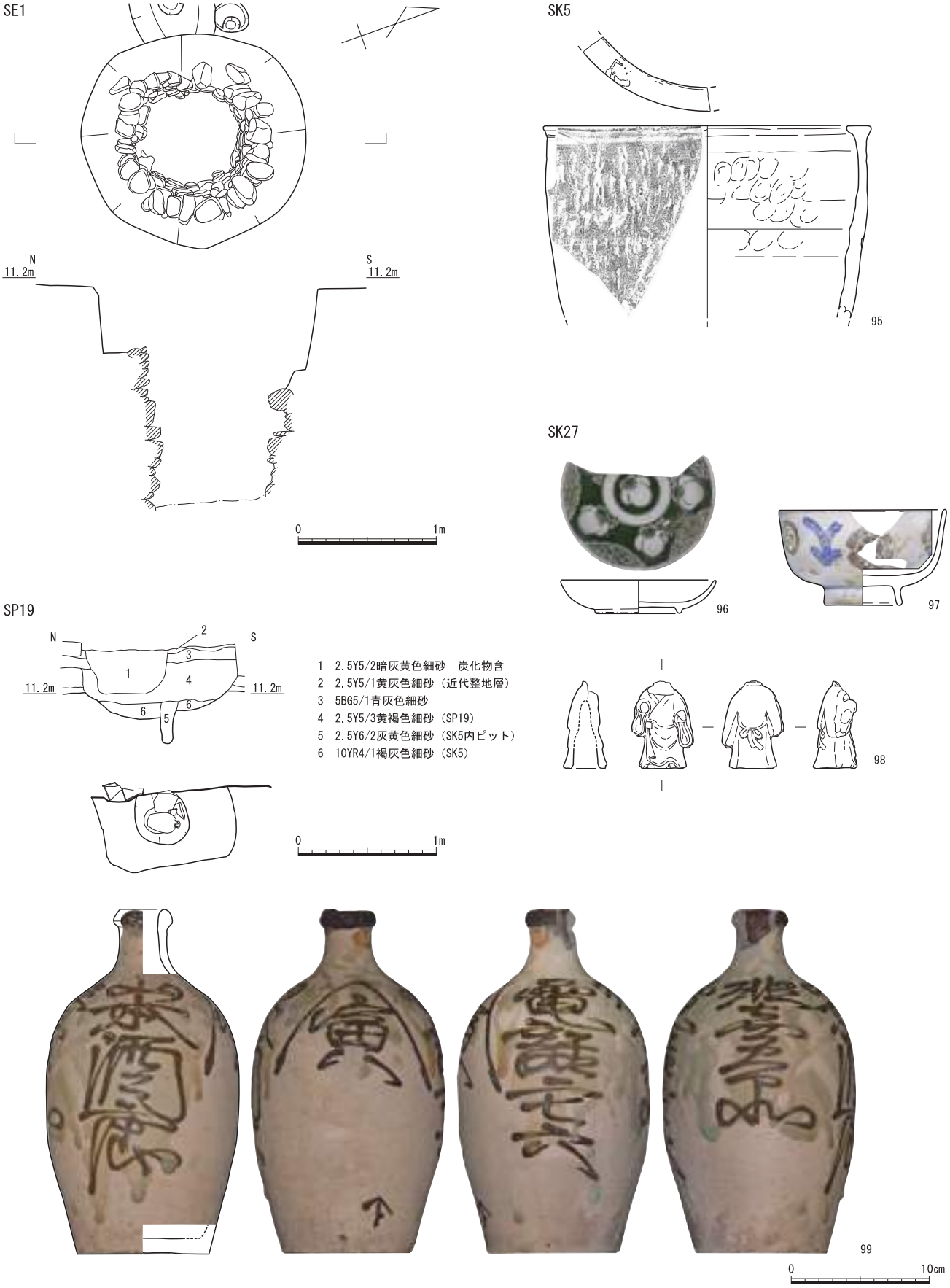
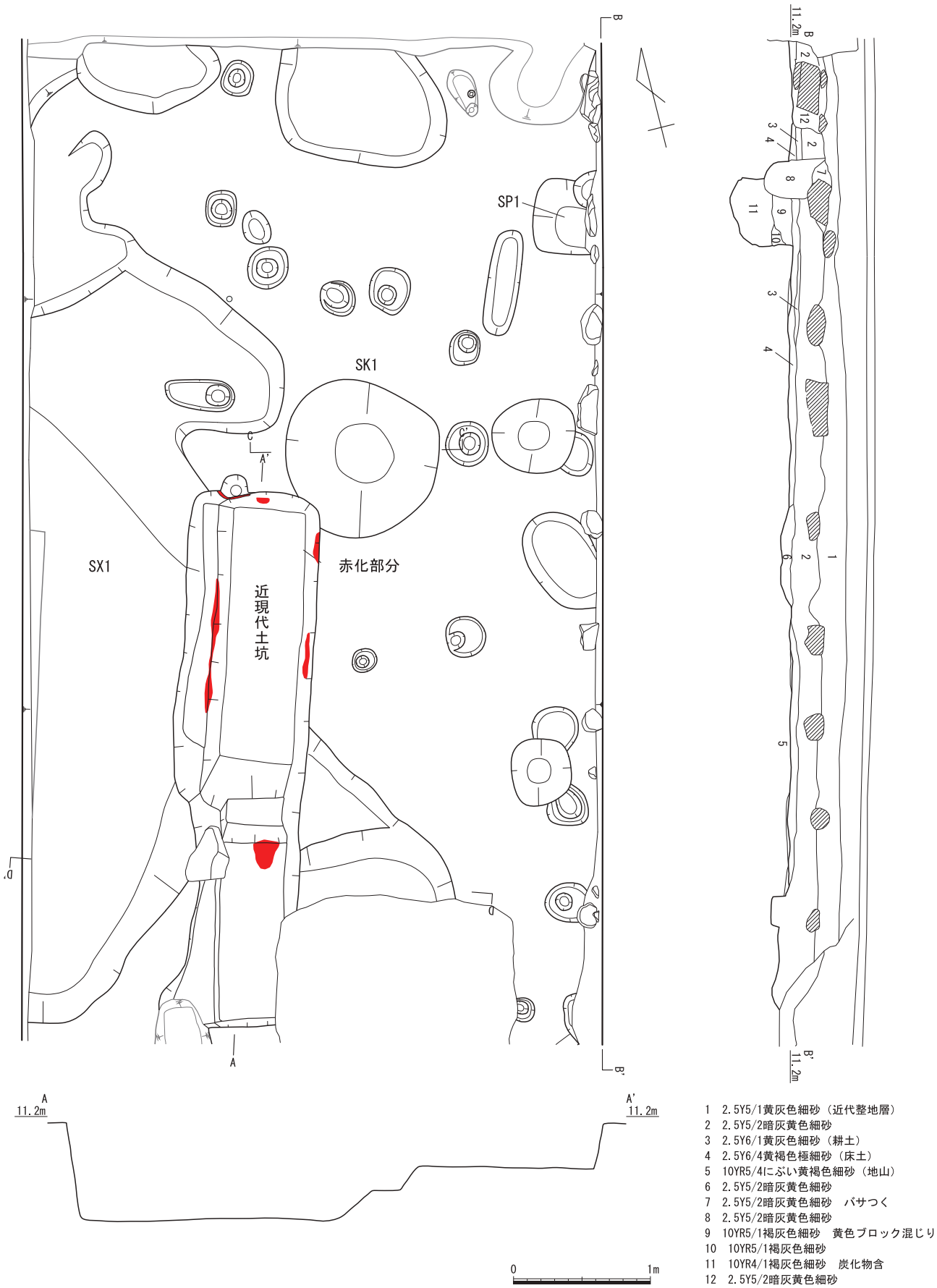


図20　4-2区 SE1、SP19 平面・断面図（S=1:40）、遺構出土遺物（S=1:4）



1　2.5Y5/1黄灰色細砂（近代整地層）
2　2.5Y5/2暗灰黄色細砂
3　2.5Y6/1黄灰色細砂（耕土）
4　2.5Y6/4黄褐色極細砂（床土）
5　10YR5/4にぶい黄褐色細砂（地山）
6　2.5Y5/2暗灰黄色細砂
7　2.5Y5/2暗灰黄色細砂　バサつく
8　2.5Y5/2暗灰黄色細砂
9　10YR5/1褐灰色細砂　黄色ブロック混じり
10　10YR5/1褐灰色細砂
11　10YR4/1褐灰色細砂　炭化物含
12　2.5Y5/2暗灰黄色細砂

図21　4-2・3区 平面・土層断面図、近代土坑断面図（S=1:40）

が1,184台であることから、本資料はそれ以前の番号と考えられる(籠谷2002)。本遺構の下部で古代の遺構SK5を検出した。

4－3区

礎石　調査区東壁に沿って、近世整地層の直上で礎石を9石検出した。礎石の上部は近代整地層が覆っている。礎石は河原石と割石を使用している。礎石の間隔は概ね70cmで配されている。調査区壁沿いに揃っていることから、これらの礎石を用いた建物の軸は、現在の道路の軸と揃うN14° Eと考えられる。この方位は2区で検出した屋敷境や4区で検出した柵あるいは塀の主軸とは異なり、1区で検出した背割り遺構(SD6･SD7)と揃っている。検出した礎石が建物のどの部分を構成するかは不明であるが、検出した層序から江戸時代から近代にかけての時期に位置づけられる。

SK1　近現代土坑の北東側で検出した。直径約1.11m、深さ32cmを測る円形の土坑である。断面はボウル状を呈し、埋土中から遺物がまばらに出土した。**100**は黒色粘板岩を使用した硯であろう。海部分は小さく縁辺部に細かい線刻がある。裏面にも線刻が認められる。**101**は瓦質土器羽釜である。

SX1　調査区西端から中央付近に広がる不整形の遺構である。検出規模は長辺7.36m、短辺3.1mを測る。遺構の東肩は明瞭な掘り込みをもたず、西側にむかって徐々に深くなり最大で45cmを測る。遺物は上層から出土した。**102**は底部糸切りの土師器皿、**103**は肥前系磁器碗、**104**は肥前系陶器碗である。**105**は瓦質土器火鉢、脚の有無は不明である。これらから遺構の時期は17世紀後半頃に位置づけられる。

近現代土坑　調査区の南部で検出した。長辺3.92m、短辺1m、深さは最大で70cmを測る。土坑埋土は戦災焼土であり、内面は被熱箇所が複数確認できる。土坑は概ね垂直に掘りこまれている。縦断面では南側がやや浅く、中央付近で階段状に下がる。土坑内には上部構造に関わる掘り込みや板材の痕跡等は確認できなかったが、戦災焼土により埋まっていることから防空壕の可能性がある。焼土に含まれる瓦片を除けば時期を示す遺物はなかった。

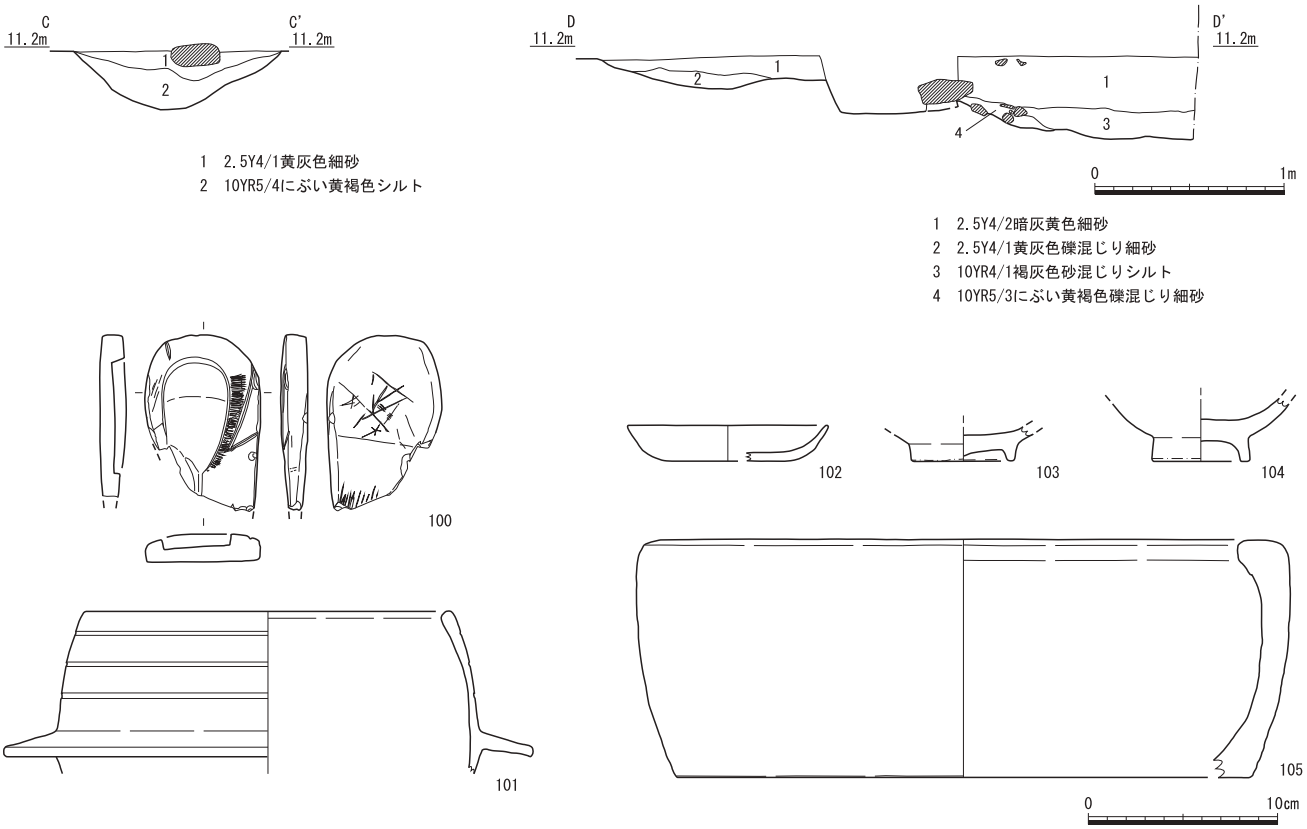


図22　SK1・SX1断面図（S=1:40）、出土遺物（S=1:4）

第Ⅴ章　外堀の調査(3区・5区)

調査区は3区・5区とも南北約33m、幅約4mを測る。絵図との対比から3区と5区は北側から武家屋敷と馬場を区画する土塁、馬場、土塁、外堀に該当する。検出状況が比較的良好であった5区では、北側の馬場部分にSK2が、調査区北端から南へ8mで石組溝を、調査区北端から19.5mの位置で近代石組溝を検出した。この近代石組溝以南が外堀と考えられる。石組溝南側の地山が残存している範囲で古代の遺構SK1・SP1・SP2を検出した。3区は調査区全域に既存建物の基礎が及んでおり、遺構の残りは良いとはいえないが、近代石組溝や石列等を検出した。

5区SK2　既存建物による撹乱を受けているが、基礎掘方の影響を受けていない部分は残存していた。検出規模で南北5.1m、東西2.4m、深さは90cmを測る。断面観察から本来は2基の土坑が切り合っている。調査段階では、これらを分離することができず一つの土坑として調査した。北側の土坑が先行し、深さは約1mを測る。遺物は遺構の規模に比してほとんど出土していない。京焼風陶器碗**106**と肥前系磁器皿**107**を図化した。これらの遺物の時期は17世紀後半頃に位置づけられるが遺物の全体量が少なく遺構の具体的な時期は不明である。土坑を検出した位置は図3に基づけば馬場であるが、SK2の性格は判然としない。

5区石組溝　調査区を東西方向に延びる。検出規模で延長3.86m、掘方幅1.4mである。検出したのは石組みの一部を確認したが、調査区断面からは掘方はほぼ垂直に掘られており、本来は深さ60cm以上あったと推測できる。溝は幅20cm、長さ30cm程の河原石を用い、石材の長手を溝と直交するように配し、内法幅は50cmを測る。石組みは最も残りの良い部分で3段分確認したが、本来はさらに高く積まれていたとみられる。この溝は絵図との対比から土塁際側溝と考えられる。この石組溝と後述する間知石組溝までの10.5mの幅に土塁が想定されるが、この間の土層断面に明確な土塁痕跡は認められなかった。地山の検出レベルが高いことから、明治維新後に削平を受けた可能性が高い。ただ、図25に示した土層断面で中世耕土(6・7層)を確認したことから、土塁は中世耕土を削ることなく構築されていたことを指摘できる。

3区の様相　土塁下に該当する部分は既存建物による影響を受けていたため、5区に比べて遺構の残りは悪い。かろうじて東壁際のみ遺構が残存していた。平面的な位置関係から図26の15層が土塁際側溝部分に対応する。調査区南側の東壁に沿って長辺60cm、短辺40cmほどの比較的大きい割石を用いた石列を検出した。石列が途切れる部分の18層がシルトと細砂の互層であることから水流があったことがわかる。また、石列の天端レベルが比較的揃っていることを踏まえると、土塁内の石組み暗渠の底石である可能性が高い。石列から西側は既存建物による影響を受けているため判然としないが、石列は調査区外の東側に広がる可能性がある。調査区北側においても割石と栗石の石組みを確認したが、調査区外に広がっているため、その構造、性格等は判然としない。遺物は**108**の染付碗が石列を被覆する4層から、**109**は北側の石材が集中する部分から出土した。

外堀　3区・5区の南側全域が該当する。後述する近代石組溝の北側掘方が地山を掘りこんでいることから、江戸時代の外堀北肩は近代石組みと大きくズレない場所にあったと考えている。掘方から調査区南端までは約15mを測るが、この間は全て堀の埋土であることを確認した。埋土は大きく上層と下層に分けられる。下層はグライ化し、比較的均質な細砂・シルトで遺物をほとんど含んでいない。上層はいわゆるヘドロで、土器や有機質を大量に含んでいる。下層は江戸時代に堆積したもの、上層は明治維新後に堆積した層と考えられる。5区南端で現地表から約2m下で地山を検出した。近代石組溝の南側では同じレベルで堀底を検出できていないことから、南側にかけて徐々に堀底が高まっていると考えられる。遺物は堀上層埋土にあたる10・11層から出土した。**110**は柿釉の灯明皿である。**111**は陶器の灯明皿である。**112**は人物の芥子面、**113**は彩色が良好に残る土人形である。**114**は陶器仏花瓶、**115**は土瓶の身と蓋である。外面にはトビガンナを施し、鉄釉を施釉する。**116**は磁器染付碗、染付けは人工コバルトを使用している。**117**は瀬戸新製焼碗、**118**は磁器染付碗、染付けは人工コバルトを使用している。**119**は英国DAWSON製の磁器皿である。内面は紫色顔料を用いた銅版転写、

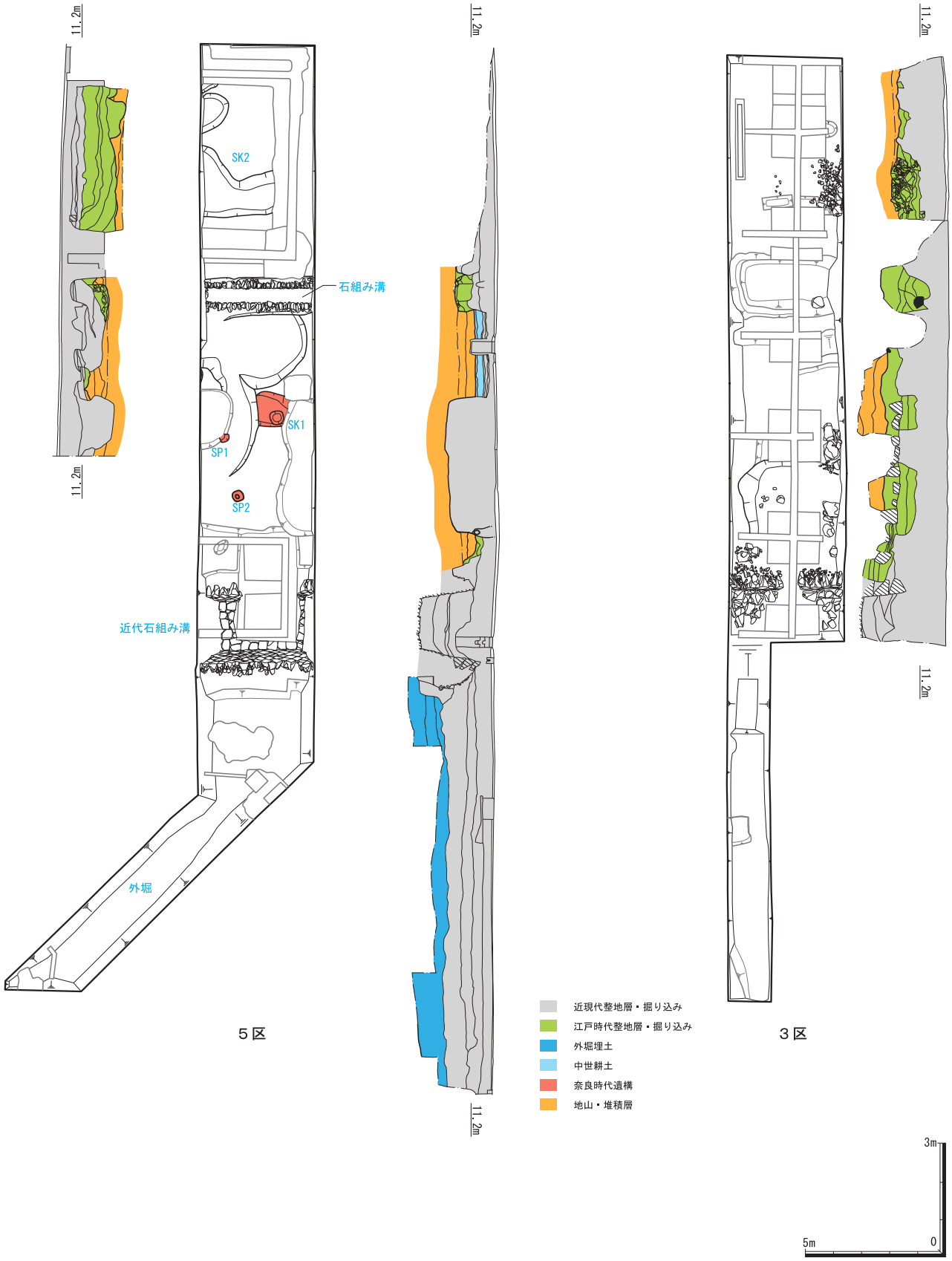


図23　3区・5区 平面・土層断面図（水平 S=1:200、垂直 S=1:150）

高台内にはDAWSONの陰刻。**120**は色絵段重蓋、近代石組溝の掘方にあたる9層から出土した。総じて幕末～明治時代の遺物であるが、**119**の西洋製の銅版転写は認められるも国産の銅版転写を含まないことから明治20年頃から大きく下らない時期に位置づけられる。

18世紀前半の第二次榊原氏時代に描かれた「姫路城総堀管尺大間数図」によれば、調査地付近の堀幅は7間5尺、深さ4尺とある。1間1.8mで換算すると堀幅は約15.3m、深さは約1.2mとなる。この数値については、姫路城跡254次調査における発掘遺構の検討から水面部分での計測である可能性が高く、本来の堀肩はさらに広いと考えられる。また、水深についても本来の堀底ではなく、水面から江戸時代中に堆積した泥土までの距離を計測している(姫路市教育委員会2011)。

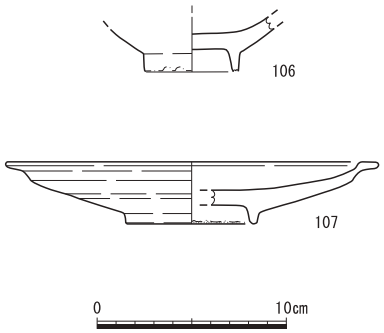
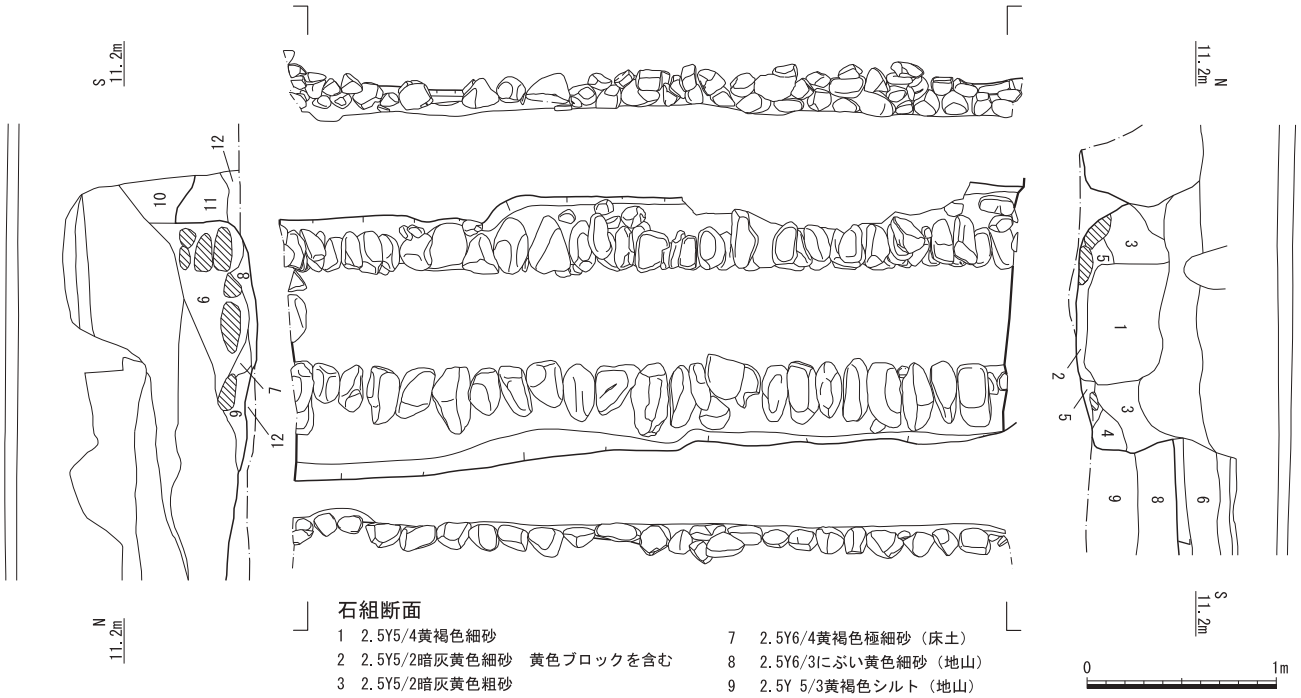


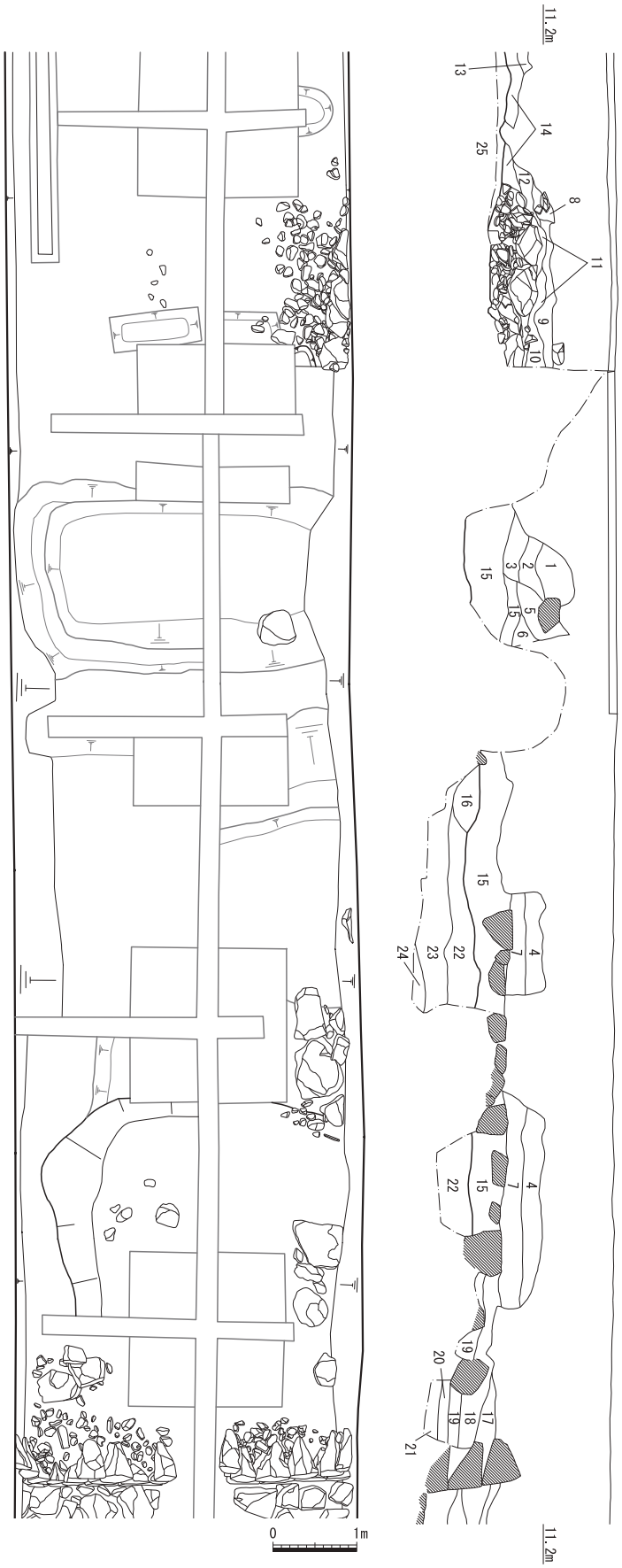
図24　5区 SK2出土遺物（S=1:4）

近代石組溝　江戸時代の外堀北肩と重なる位置で検出した間知石組みの溝である。5区で検出した規模で上幅約2.5m、下幅1.8m、深さ1.6mを測る。断面は台形を呈しており、断面積は約3.4㎡である。溝は一辺約30㎝、奥行40㎝程度の間知石を用い落とし積みによって構築している。底面にも間知石を敷いている。南側は天端まで残存しており、上部が揃うように石材をカットしている。北肩は既存建物により撹乱を受け、残りは悪く、天端まで残存する部分はない。北肩部分の断割り断面の観察から、石組みの掘方は地山を掘り込んでいる。この部分に江戸時代の石垣石材が確認できないことから外堀北肩と同位置に作り変えたものか、本来の肩はもう少し南にあったのかについては判然としない。ただ、堀埋土の調査では石垣に使用したような石材は確認できなかった。3区でも同様に間知石組溝を検出したが、南肩については調査区外であるため検出できなかった。姫路市城郭研究室所蔵の「姫路市外濠埋立工事計画平面図」と題された史料によれば、検出した溝は外堀の埋め立てに伴い設けられたものであり、北条門以西の町屋側からの排水を受けるものであることが判明する。なお、北条門より東側について



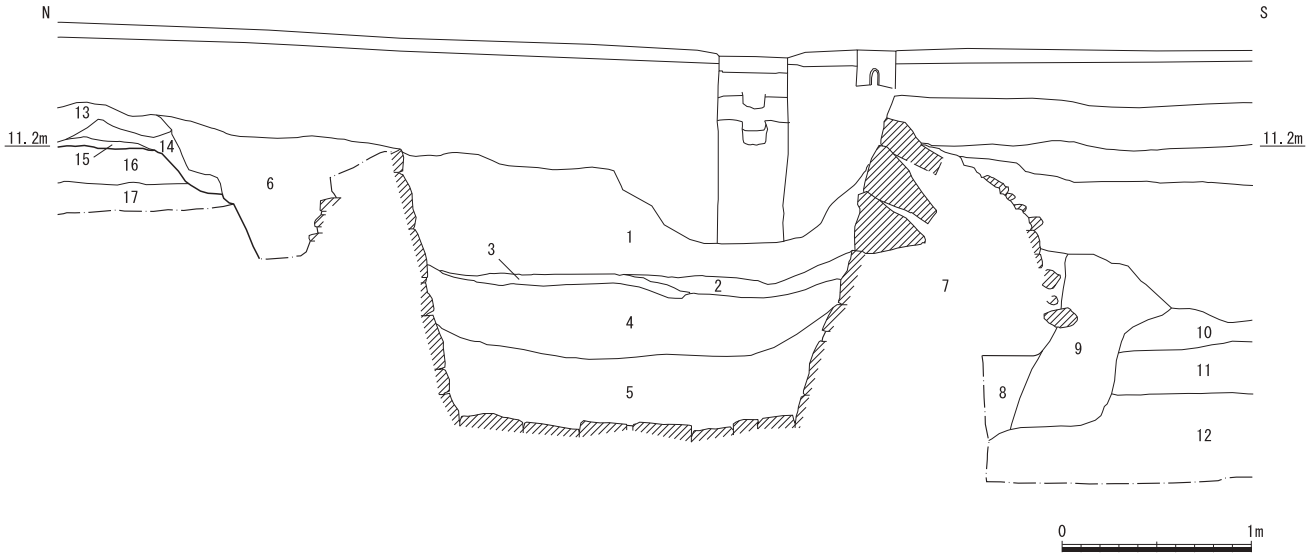
石組断面
1　2.5Y5/4黄褐色細砂
2　2.5Y5/2暗灰黄色細砂　黄色ブロックを含む
3　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
4　2.5Y5/1～5/2黄灰色～暗灰黄色砂混じり細砂
5　2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり粗砂
6　2.5Y5/1黄灰色粗砂（中世耕土）
7　2.5Y6/4黄褐色極細砂（床土）
8　2.5Y6/3にぶい黄色細砂（地山）
9　2.5Y 5/3黄褐色シルト（地山）
10　2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
11　10YR3/1黒褐色細砂
12　10YR5/4にぶい黄褐色極細砂

図25　5区 石組溝平面・立面・断面図（S=1:40）



1　10YR4/1褐灰色細砂
2　10YR5/3にぶい黄褐色細砂
3　10YR4/2灰黄褐色細砂
4　10YR4/1褐灰色細砂
5　10YR4/1褐灰色細砂
6　10YR4/3にぶい黄褐色細砂
7　10YR6/1褐灰色シルト
8　10YR4/1褐灰色シルト
9　2.5Y5/3黄褐色粗砂混じり中砂
10　2.5Y4/2暗灰黄色細砂
11　2.5Y5/2暗灰黄色細砂混じりシルト
12　2.5Y5/3黄褐色中砂
13　10YR5/4にぶい黄褐色細砂
14　10YR5/2灰黄褐色細砂　5cm大の円礫を稀に含む。
15　10YR5/1褐灰色極細砂
16　10YR5/1褐灰色細砂
17　10YR5/1褐灰色シルト
18　10YR5/1褐灰色シルト　シルトと細砂の互層。
19　10YR6/4にぶい黄橙色中砂
20　10YR6/2灰黄褐色極細砂
21　10YR6/4にぶい黄橙色中砂
22　10YR5/4にぶい黄褐色細砂（地山）
23　10YR7/2にぶい黄橙色細砂（地山）
24　10YR7/2にぶい黄橙色粗砂（地山）
25　10YR4/4中砂褐色（地山）

図26　3区 平面・断面図（S=1:80）、石組み上層出土遺物（S=1:4）



1　焼土混じり土
2　10YR3/1 黒褐色粗砂混じりシルト
3　2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
4　5Y3/1 黒色粗砂混じり砂　レンガ・ガラス・土器を含む
5　5Y3/1 黒色粗砂混じり砂　汽車土瓶を含む
6　2.5Y5/1 黄灰色礫混じり細砂（近代石組み溝掘方）
7　栗石　空隙多い（近代石組み溝掘方）
8　2.5Y5/1 黄灰色礫混じり細砂　バサつく（近代石組み溝掘方）
9　2.5Y5/2 暗灰黄色礫混じりシルト
10　10BG6/1 青灰色シルト（堀埋土）
11　10BG3/1 暗青灰色シルト　土器・有機質を含む（堀埋土）
12　N5/ 灰色シルト（堀埋土）
13　2.5Y4/1 黄灰色細砂　（近代掘り込み）
14　2.5Y6/2 灰黄色細砂
15　2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂（床土）
16　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　マンガンを含む（地山）
17　10YR5/4 にぶい黄褐色砂（地山）

図27　5区 近代石組溝、外堀断面（S=1:40）

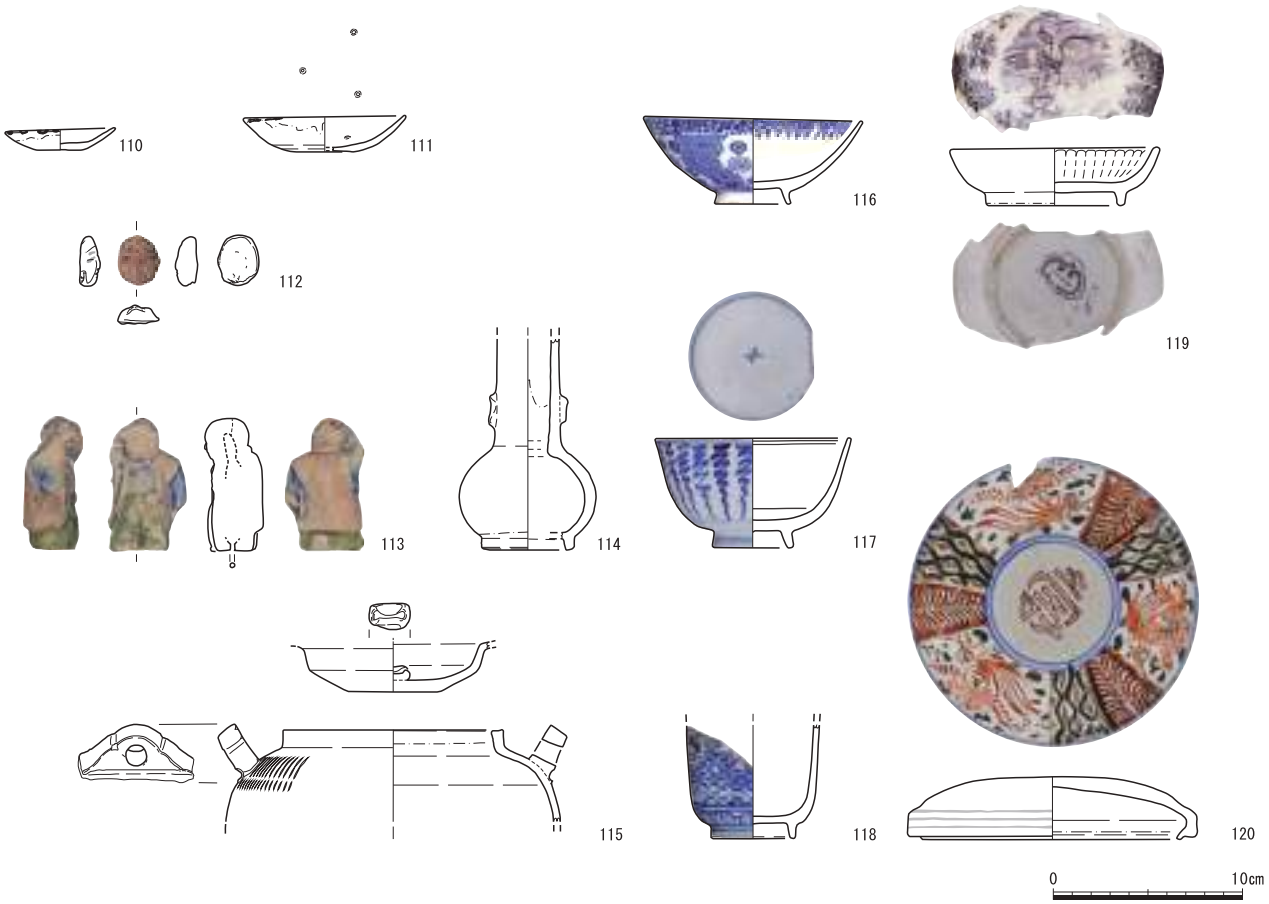
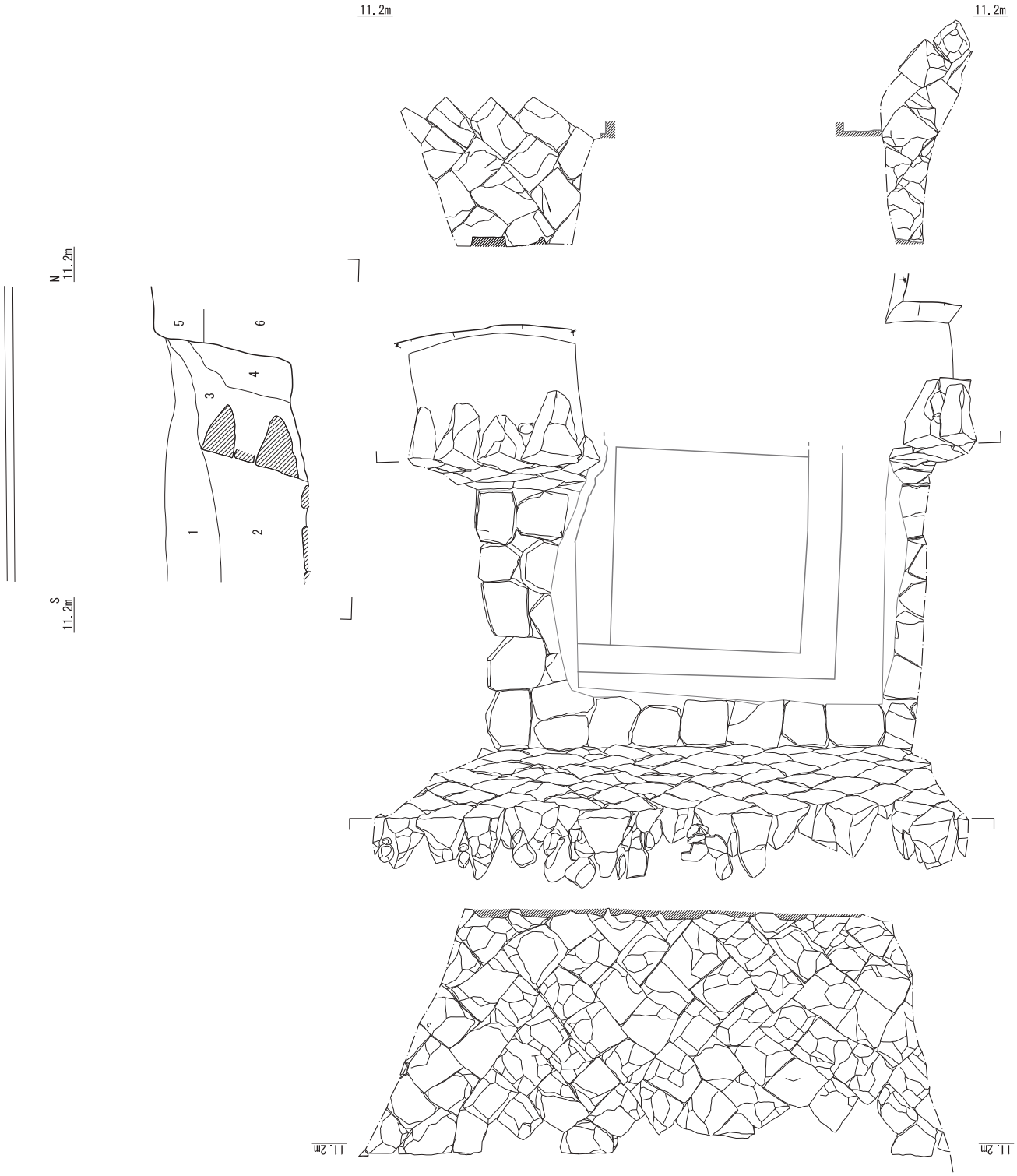


図28　5区 外堀埋土出土遺物（S=1:4）



1　撹乱
2　10YR2/1黒褐色砂　コークス混じり
3　10YR4/2灰黄褐色礫（掘方）
4　2.5Y4/2暗灰黄色栗石混じり細砂（掘方）
5　10YR5/4にぶい黄褐色細砂（地山）
6　10YR5/4にぶい黄褐色砂礫（地山）

0　1m

図29　近代石組溝平面・立面・西壁土層断面図（S=1:40）

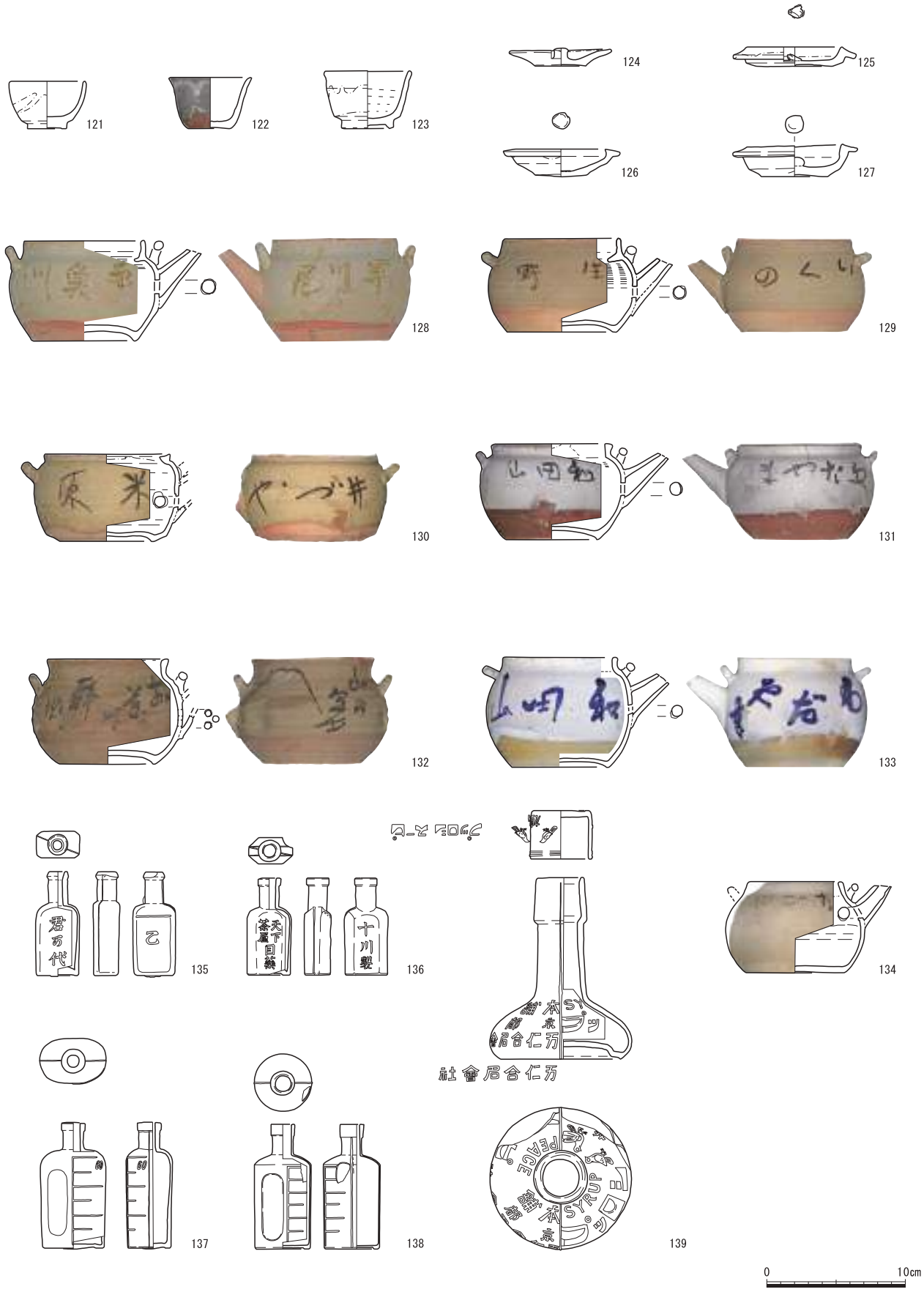


図30　近代石組溝出土遺物１（S=1:4）

は、この溝とは別の溝が描かれており別系統の排水路が設けられていたことがわかる。残念ながら本史料には年月の記載がないことから具体的な施行時期は不明である。

溝の埋土は大きく上層と下層に分かれ、図27の1～3層が上層、4･5層が下層となる。遺物は主に下層から出土した。特に汽車土瓶**121～134**は溝底付近から比較的まとまった状態で出土した。**121～123**は汽車土瓶の湯呑みである。湯呑みの出土点数は多いが、器形で分類するとベタ高台で体部が丸く立ち上がる**121**、無高台で口縁部が外反する**122**、輪高台で口縁部が直線的に立ち上がる**123**の3タイプとなる。**124～127**は汽車土瓶の蓋である。**124**は丸い摘みが付くタイプで内キ土瓶に伴うものである。**125～127**は口縁端部を折り曲げ、土瓶の口に直接当てるものである。**128～134**は汽車土瓶である。出土量は多く、器形を留めている個体も散見された。そのうち、外面に駅名あるいは販売店の記載があるものを中心に図示した。**128･129**は内キ土瓶。**130～134**はキ無土瓶である。土瓶に記載の駅名は播但線の「和田山」「生野」を除けば姫路以東のものが目立つ。**135**は白髪染めの乙液を入れたガラス瓶である。**136**はガラス製の目薬瓶。**137･138**は側面にエンボスの目盛りがあり、薬瓶であろう。**139**は大正12年から西村仁兵衛により製造･販売された清涼飲料水ピースシロップの瓶である。(都ホテル1989)。**140**はガラス茶瓶。**141**はカルピス瓶である。エンボスで「カルピス　名古屋駅松浦　定価金拾五銭」とある。これは現在、名古屋駅前に本社を構える大正11年創業の株式会社松浦商店のことであろう。**142**は牛乳瓶、中安牧場は赤文字となっている。牧場の所在は不明である。**143**は姫路産の焜炉である。脚部の刻印「炊」は明治26年に建立された池田屋弥七の墓碑に刻まれたこんろ焼屋中の中に認められる(中島1989)。これらの遺物は総じて大正末～昭和初期に位置づけられる。

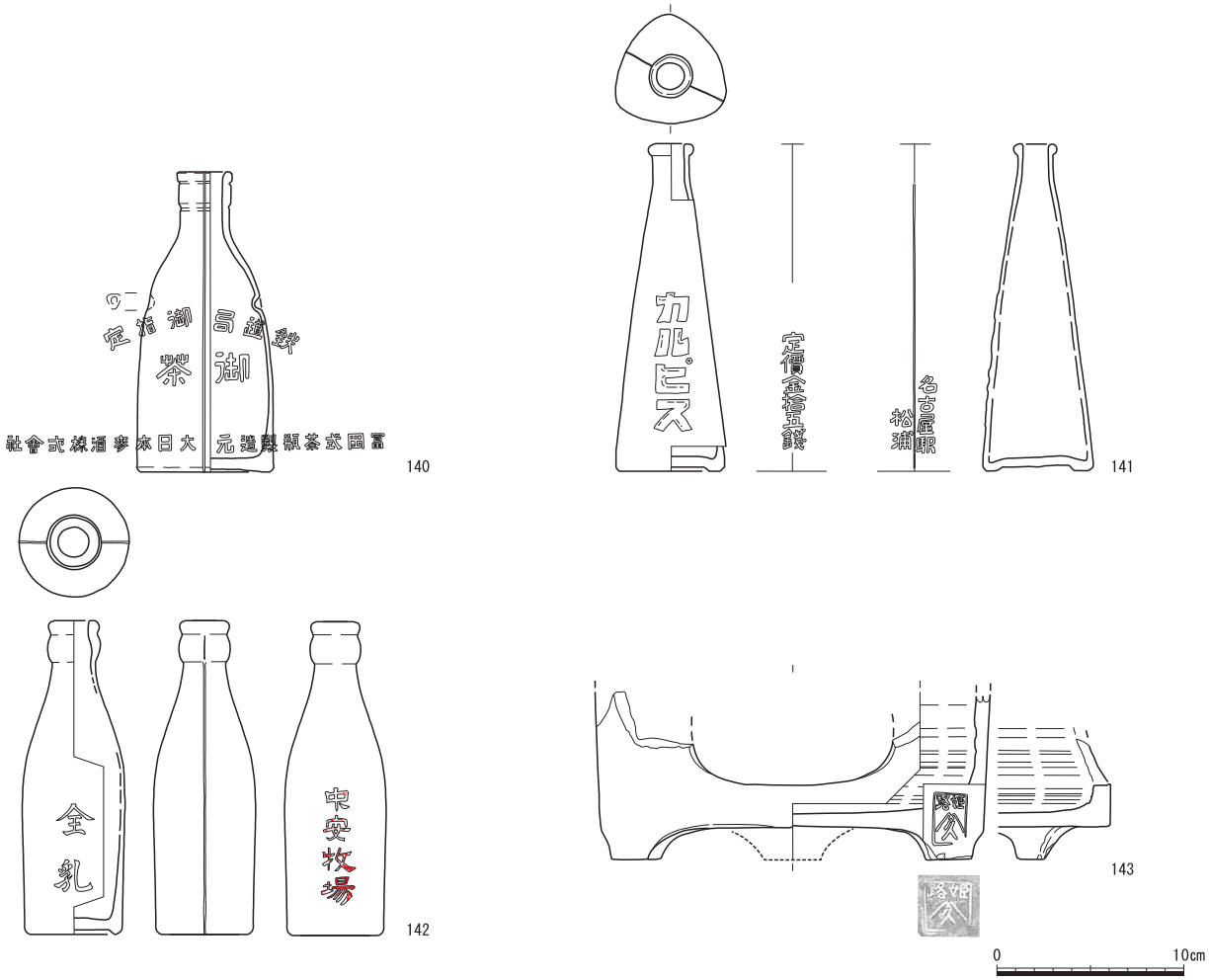


図31　近代石組溝出土遺物 2 (S=1:4)

第Ⅵ章　江戸時代以前の遺構と遺物

調査地が江戸時代に土塁、あるいは武家屋敷であったため、地山を掘り込む土坑等が少なく、城下町下層から江戸時代以前の土坑･溝･柱穴等の遺構を確認した。

包含層　**144～150**の遺物が出土した。**144**は土師器皿、145は土師器杯Ａ、いずれも器面が剝離･摩滅しており細かい調整は確認できない。**146**は稜碗蓋、**147**は稜碗である。小川分類のB類にあたり播磨国内で通有の器形である（小川1999）。**148**は須恵器壺の下半部、底部はヘラ切りである。**149**は須恵器杯Ｂ、復元口径は18.2㎝、器高は5.7㎝を測る。**150**は須恵器杯Ａ、内面は灰を被っている。包含層からは他に製塩土器も出土している。出土量は多くないものの、総じて8世紀半ば頃に位置づけられる。次に個別遺構及び出土遺物について述べる。

4－1区SK20　調査区東壁沿いで検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが､検出規模で長辺1.75m、短辺98㎝、深さ88㎝を測る。遺物は遺構検出面から比較的浅い上層6層から出土した。**151**の土師器蓋は炭層（7層）直下で摘みを下に向けた状態で出土した。その他の遺物は埋土中から散漫に出土した。下層からの遺物の出土は認められなかった。

151は土師器蓋である。外面にはヘラ磨きが密に施され、内面は反時計廻りに円弧を描く暗文が観察できる。頂部には上部が凹む摘みがつく。**152**は須恵器蓋である。口縁部は屈曲せず丸く端部に至る。**153**は土師器皿である。**154**は瓦質土器壺の耳部である。**155**は土師器壺である。口縁端部は外傾する面を持つ。**156･157**は土師器甕である。いずれも口縁内面にハケによる調整を施す。外面は縦方向のハケによる調整を施す。内面には粘土紐の接合痕跡が確認できる。**158～161**は製塩土器である。外面にはユビオサエが残り、内面は板状工具によるナデ後横方向にナデている。本遺構からは細片であるが製塩土器が比較的まとまって出土している。

4－2区SP1（以下、SD1までは4－2区の遺構）　東壁沿いで検出した（図21）。SP13に切られる。平面形は調査区外に広がるため正確ではないが隅丸方形の可能性が高い。検出規模で長辺54㎝、短辺40㎝、深さ41㎝を測る。埋土から**162**の土師器甕が出土した。

SP2　4－3区SP1から北へ約6mの位置で検出した。SP37に切られる。平面形は調査区外に広がるため正確ではないが隅丸方形の可能性が高い。検出規模で長辺34㎝、短辺33㎝、深さ44㎝を測る。出土遺物はなく詳細は不明であるが、4－2区SP1と形状等は類似している。

SP3　調査区中央、SP2から西へ約1.5mの位置で検出した。平面形は円形を呈し、直径約50㎝、深さは30㎝を測る。埋土から163の端部が屈曲しない須恵器蓋が出土した。

SP4　SP3の西で検出した。平面形は円形を呈し、直径約54㎝、深さは11cmを測る。遺物は出土していない。

SP5　SE1の西側で検出した。平面形はSE1に切られるためはっきりとしない。検出規模で長辺61㎝､短辺55㎝、深さ48㎝を測る。掘方底で検出した柱痕跡は直径18㎝を測る。遺物は出土していない。

SP6　SP5の南1.6mで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺63㎝、短辺60㎝、深さ39㎝を測る。柱痕跡は直径20㎝を測る。遺物は出土していない。

SP7　SP6の南1.8mで検出した。平面形はややいびつな円形を呈し、長辺65㎝、短辺55㎝、深さ36㎝を測る。柱痕跡は直径23cmを測る。底部で石材を検出した。

SP8　SP7の南1.7mで検出した。SP10を切っている。平面形は円形を呈し、直径約40㎝、深さは50㎝を測る。掘方内に石材を複数検出した。遺物は出土していない。

SP9　SP7の南1.8mで検出した。SP10を切っている。平面形は円形を呈し、直径約65㎝、深さ40㎝を測る。柱のあたりは直径20㎝を測る。遺物は出土していない。

SP10　SP8･SP9に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長辺75㎝、短辺67㎝、深さ20㎝を測る。柱痕跡は確認できなかった。遺物は出土していない。

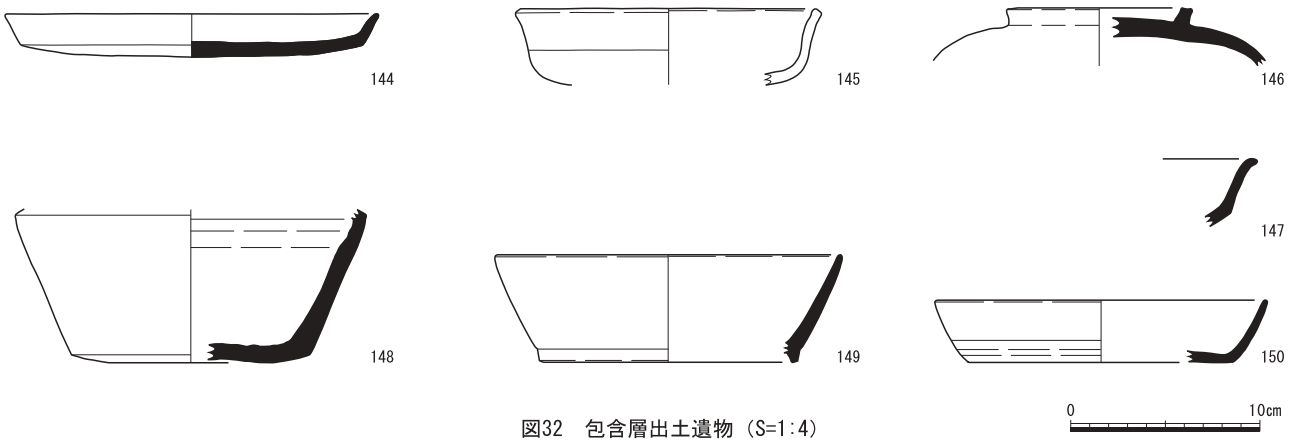
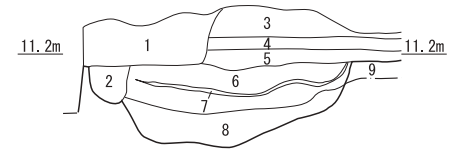


図32　包含層出土遺物（S=1:4）



1　2.5Y5/2暗灰黄色細砂（江戸時代土坑）
2　10YR4/2灰黄褐色細砂（江戸時代ピット）
3　2.5Y5/2～5/3暗灰黄色～黄褐色細砂（整地層）
4　2.5Y6/1黄灰色細砂（耕土）
5　2.5Y6/4黄褐色極細砂（床土）
6　10YR4/1褐灰色細砂
7　炭
8　10YR4/1褐灰色細砂　地山ブロック混じり
9　10YR5/4にぶい黄褐色細砂（地山）

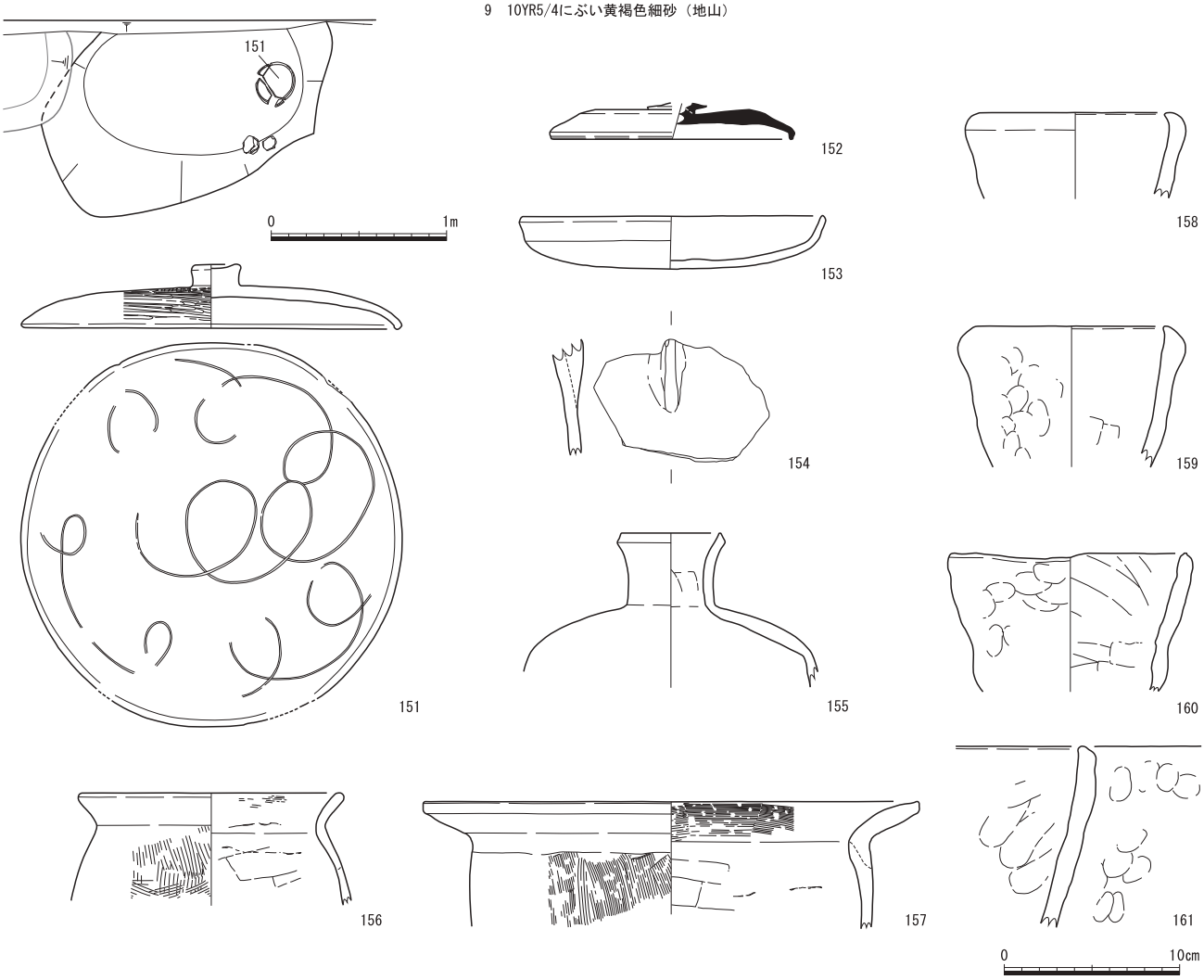


図33　4-1区 SK20 平面・断面図（S=1：40）、出土遺物（S=1:4）

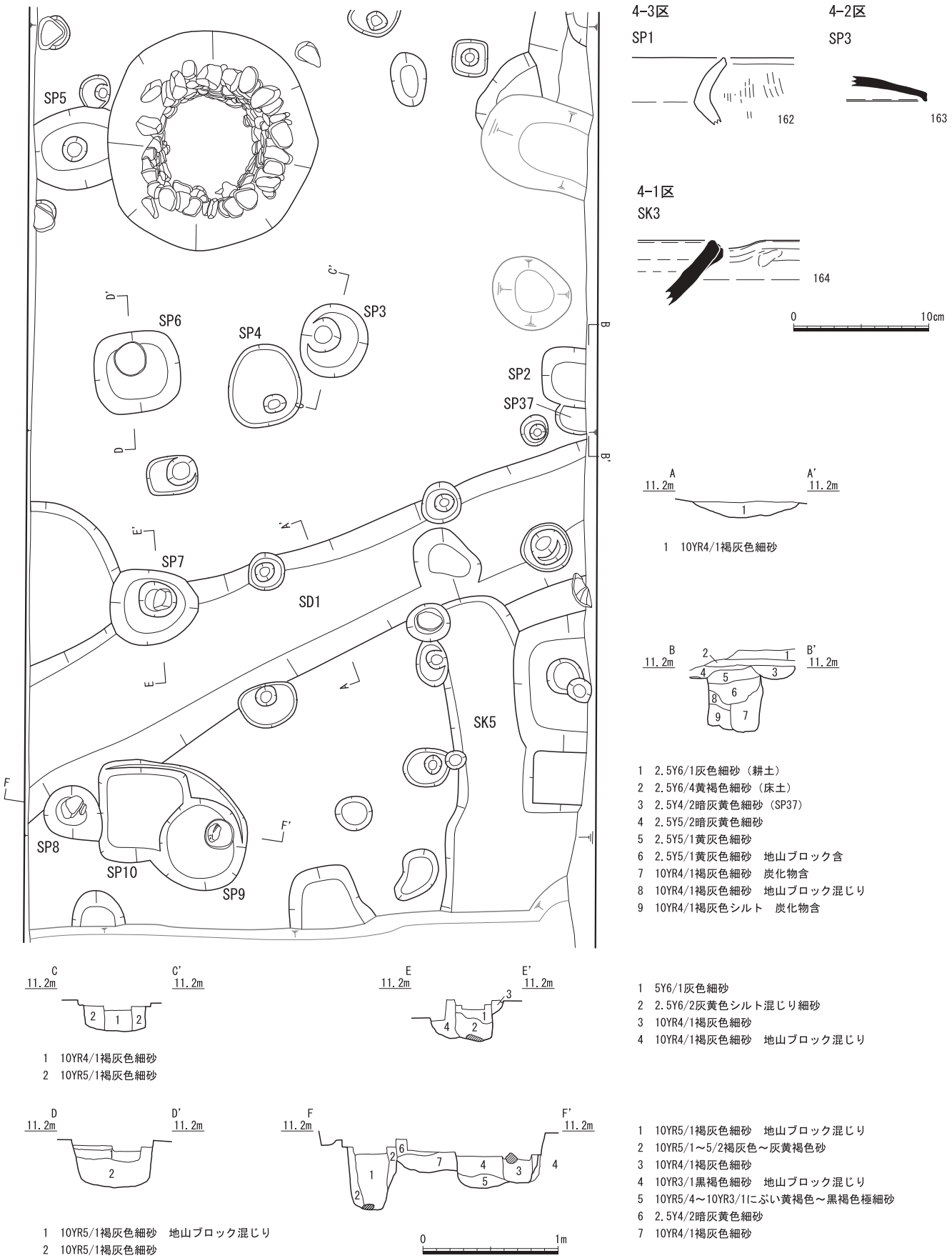


図34　4-2区 下層遺構平面・断面図（S=1:40）、出土遺物（S=1:4）

SK3　SE1の北1.5mの調査区中央で検出した。平面形は東西方向に長い円形を呈し、長辺1.63m、短辺1.1m、深さ34cmを測る。遺構自体は江戸時代であるが、埋土から**164**の須恵器片口鉢が出土している。調査区内に遺構は確認できないが、周辺に当該時期の遺構が存在する可能性がある。

SK5　SP１の北約2.7mの位置で検出した。上位にSP19が位置する。平面形は調査区外に広がるためはっきりしないが、隅丸方形を呈すると想定できる。検出規模で長辺1.05m、短辺55cm、深さ21cmを測る。遺物は出土していない。

SD1　調査区を斜めに東から西へ横断する。SP7･8･10に切られる。検出規模で延長4.5m、幅1.06m、深さ16cmを測る。溝の断面形は浅い皿形を呈す。遺物の出土がなく明確に時期を決めがたい。

5区SK1　江戸時代の土塁下にあたる範囲で検出した。平面形は不明であるが、検出規模で長辺1.2m、短辺1.08m、深さ36cmを測る。遺物は埋土から**165**の須恵器蓋、**166**の土師器甕が出土した。

5区SP1　SK1の西約1.5mで検出した。平面形は円形を呈すと思われる。検出規模で長辺36cm、短辺30cm、深さ46cmを測る。遺物は埋土から**167**の土師器杯、**168**の土師器甕が出土した。

5区SP2　SP1の南約1.8mの位置で検出した。平面形は円形を呈し、直径38cm、深さ42cmを測る。遺物は出土していない。これらの遺構はSK3を除けば、基本的にSK20と同じ褐灰色の埋土である。わずかに出土する遺物もSK20と矛盾しないことから奈良時代の遺構と判断できる。遺構の性格を明らかにできるものは少ないが、SP5･6･7･10は建物を構成する柱穴と考えられる。柱通りの主軸はN2° Eで、概ね正方位を指向する建物である。

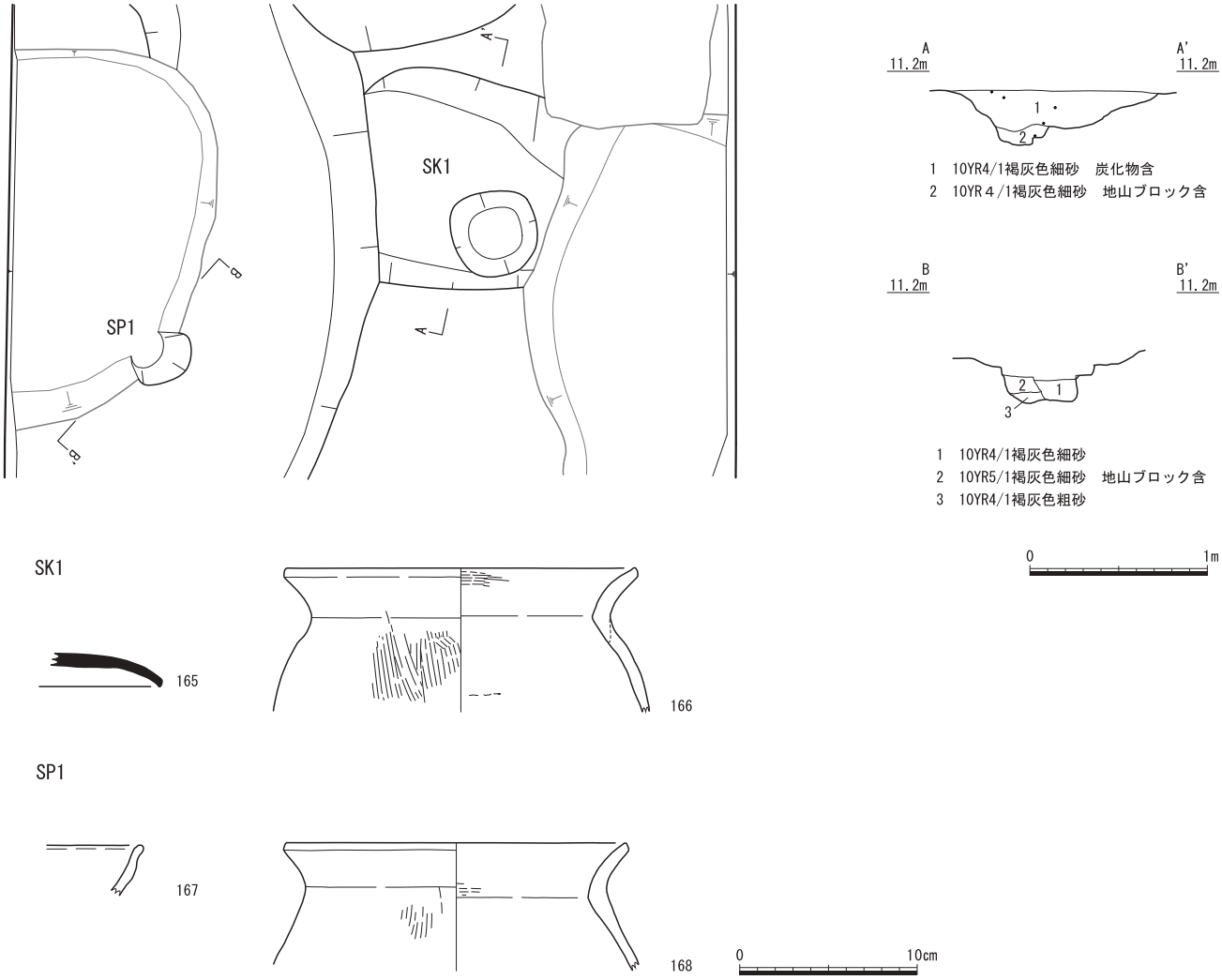


図35　5区 SK1・SP1下層遺構平面・断面図（S=1:40）、出土遺物（S＝1:4）

第Ⅶ章　総括

調査によって明らかとなった事実は多い。中でも外堀及び土塁の位置とその埋没過程が判明したことは大きな成果であった。今回の調査で検出した遺構と平成10年度に駅前町遺跡で検出した側溝の位置とを勘案し外堀周辺の状況を模式的に示したのが図36である。

まず土塁についてであるが、土塁構築土は削平を受けていたために確認できなかったが、5区で検出した石組溝から基底部の幅は約10.5mであることが判明した。3区では土塁に伴う石組み暗渠の可能性のある石列を確認した。次に外堀についてであるが、外堀北肩のオリジナルな状態は確認できなかったが、その部分で近代石組溝を検出した。この近代石組溝を構築するにあたり土塁下の地山を新たに掘削したとは考えにくいことから、江戸時代の外堀北肩の位置を踏襲している可能性が高い。外堀の厳密な規模は不明であるが、「姫路城総堀管尺大間数図」によれば、調査地付近の堀幅は7間5尺（約15.3m）、深さは4尺（約1.2m）と記載されている。前述したようにこの数値は、遺構として認識できる外堀の規模より一回り小さいと考えられる。調査区内で外堀の南肩が検出できていないこと、堀埋土が絵図に記された堀の深さ1.2mよりも厚く堆積していることもそのことを裏付ける。調査地の約200m東側で行った北条門周辺の調査では堀の深さは約2.8mであることを確認しており、今回の調査地点における数値も大きくかけ離れたものではないと考えられる。

姫路城の外堀は、一部船場川と重なる部分も含めて全長約5.23ｋｍある。江戸時代には姫路城の外郭を守る重要施設として機能したが、明治維新後は城外と城内の町場との往来を阻害する大きな障害となった。明治6年には外京口門と福中町・二階町の延長部分、同7年には坂元町・本町からそれぞれ船場川を渡るための架橋工事の伺書が出されている（姫路市1988）。その後、明治21年の姫路駅の開業が土塁を含む外堀の消滅に拍車をかけることとなった。図37は明治40年の市街地図である。本地図によれば南部外堀は未だ旧状を保っているものの、姫路駅周辺については既に土塁の存在をうかがうことはできない。また、この段階には外堀を残しつつも城内から延びる道路が堀を越え城外へ延びていることが確認できる。調査で堀埋土から出土した遺物は明治20年を大きく下らないものであることがわかった。このことから明治40年の姫路市街地図には、未だ埋まっていない状態の外堀が描かれているものの、実態としては、かなり埋没が進行し、堀浚い等も行われない状態であったと考えられる。その後、北条門から飾磨門に至る外堀が明治40年から大きく下らない時期に埋められた。この外堀に替わり近代石組溝が新たに構築された。その規模は断面積3.5㎡、北条門から飾磨門までの総延長約600mの範囲に計画されている。この溝は消滅した外堀の替わりに町屋域からの排水を受ける目的で構築された水路と考えられ、最大流量は約2,040㎥となる。この数値は当該近代水路のものであるが、外堀が埋まってもこの流量が確保できれば、城内からの排水が処理できていたことを示すものであり、江戸時代に城内から暗渠等を通じ外堀に流れ込んでいた水量を推測する資料ともなりうる。

次にこの近代水路の廃絶について考えてみたい。図38は大正13年の姫路市街地図である。この図では明治40年の地図に姫路裁判所が描かれていた場所に神戸姫路電気鉄道（現山陽電気鉄道）の駅舎が描かれている。神戸姫路電気鉄道は大正12年（1923年）に姫路－明石間が開業し、昭和3年（1928年）には姫路－兵庫間の直通運転が開始されている（山陽電気鉄道株式会社1972）。当時の駅舎は現在の駅舎よりも東に位置し、近代水路の延長線上にあたる。このことから神戸姫路電気鉄道の駅舎の建設に伴い近代水路の廃止が計画された可能性が高い。これを裏付けるのが水路の埋土から出土した遺物である。駅舎建設に伴って水路の埋め立て工事が即座に行われたかどうかははっきりしないが、最も年代の新しい遺物は大正12年以降に販売されたピースシロップ瓶であり、出土遺物にはこれを大きく下る時期の遺物が含まれていない。また、姫路市史編集室が所蔵する大正14年の「姫路市地番地図」にはこの水路の記載はない。同時にこの図では図38に描かれている飾磨門以西の外堀の表記もないことから、大正13年から14年にかけて残存する堀や水路の埋め立てといった一連の工事が行われた可能性がある。これにより北条門から飾磨門を含む姫路城の南部外堀の痕跡は全て姿を消した。その後、戦後の復興土地区画整理により船場川の付け替えや外堀川への改修も含め、西側は大蔵前公園以南、東側は神屋公園

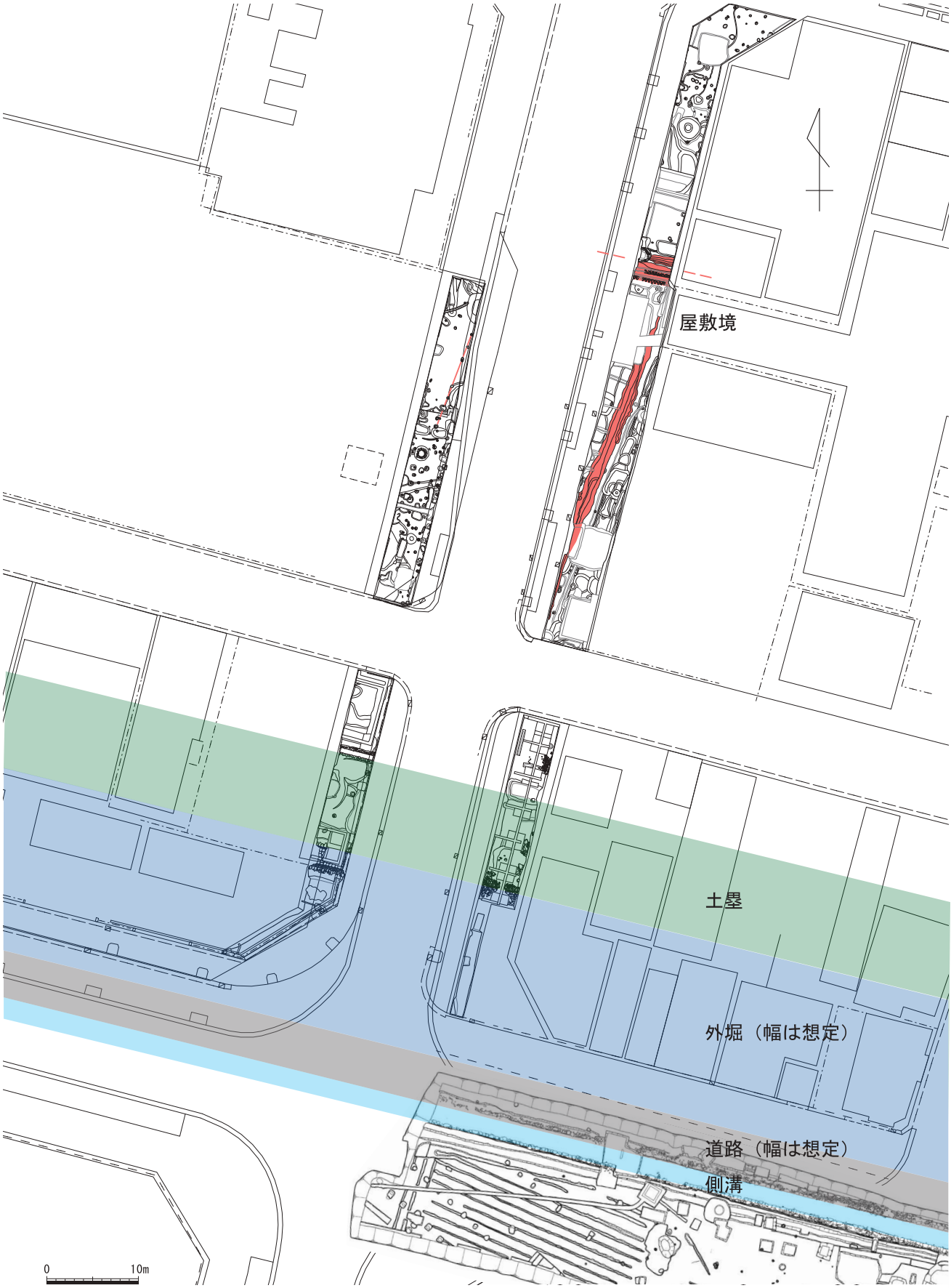


図36　検出遺構に基づく外堀復元図（S=1:600）

付近までが完全に埋め立てられた。

調査では武家屋敷に関する知見も得られた。武家屋敷の屋敷境の主軸方向について、2区で検出した南北方向の屋敷境は図3の絵図にみるように外堀に対して斜行している。その主軸はN21° Eであり、飾磨郡の条里地割に沿っていることが判明した。4区で検出した柵もしくは塀も同様である。対して1区と2区の境で検出した東西方向の背割りはN14° Eの直交方向で外堀・土塁と平行する。4－3区で検出した礎石も同様であり、それぞれの主軸が異なっていることが判明した。出土遺物や絵図をみる限り、このずれは江戸時代を通じて維持されているようで解消されていない。何に基づいて頑なに主軸方向が維持されているのかは不明である。姫路城城

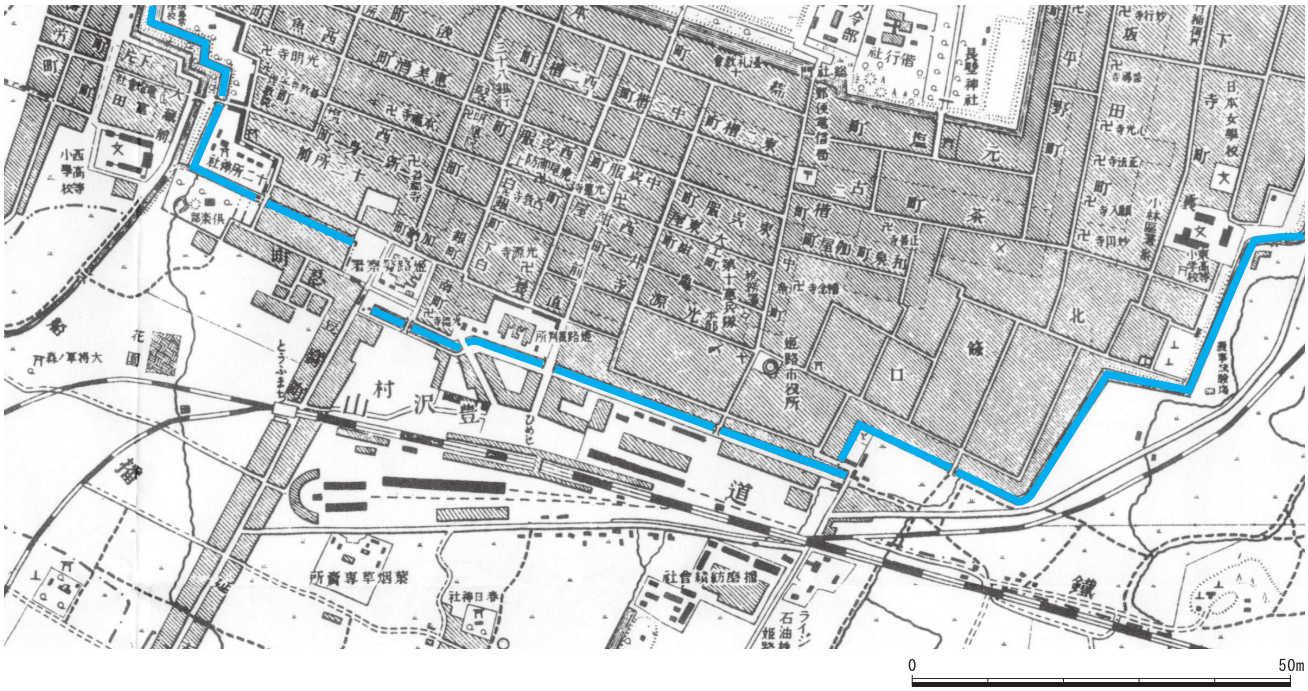


図37　明治40年姫路市街図　部分（S=1:10,000）（『姫路市史』第十二巻　付図3を一部改変のうえ転載）

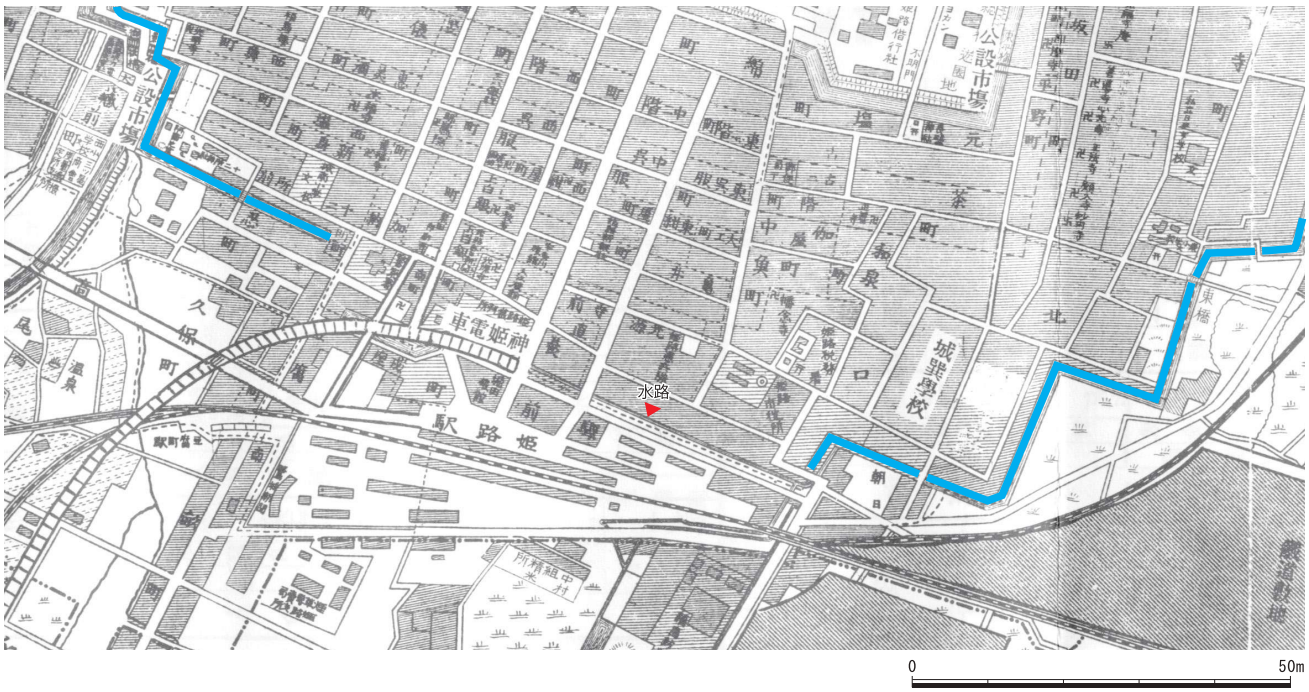


図38　大正13年姫路市全図　部分（S=1:10,000）（『姫路市史』第十三巻上　付図1を一部改変のうえ転載）

下町跡におけるこれまでの調査成果から、こうした城下町の主要な軸線は近世以前に成立した地割りに基づくものであることが判明している(姫路市埋蔵文化財センター 2018)。今回の調査成果はこうした主軸の異なる地割りが従来指摘されていた町割りだけでなく、屋敷境や柵(塀)、建物等といった屋敷内における様々な構成様相にも江戸時代を通じて反映されていることを示している。これらは近世姫路城下町の実態を考えていく上で重要かつ興味深い事例といえる。

調査では城下町の下層遺構として奈良時代の遺構・遺物を検出した。数は少ないながらも漆付着土器や製塩土器といった特徴的な遺物が出土した。建物の可能性を指摘できる遺構の主軸は概ね正方位を指向しており、姫路駅構内で見つかった豆腐町遺跡と様相を同じくする。調査範囲が限定的であるため、その広がりについては判然としないが、豆腐町遺跡との関連を含め、古代の姫路を考えるうえで極めて重要な成果といえる。今回の調査と同じように姫路城下町の下層において検出される奈良時代の遺構は、正方位を指向するものが多い。こうした遺構は点的であるものの未だ実態の不明である播磨国府を探るうえで重要な手がかりといえる。

参考文献

小川真理子　1990 「稜椀の研究－播磨を中心として－」『今里幾次先生古稀記念　播磨考古学論叢』
籠谷　直人　2002 「交通・通信事業の発展」『姫路市史』 第五巻下　本編　近現代2
籠谷　直人　2000 「鉄道の発達」『姫路市史』第五巻上　本編　近現代1
山陽電気鉄道株式会社　1972 『山陽電気鉄道65年史』
田中真吾・成瀬敏郎　1998 「地形誌」『姫路市史』第七巻上　資料編自然
中島　千進　1989 『姫路名産　弥七こんろ』郷土文化学会報告・第二冊　郷土文化学会
成瀬　敏郎　1998 「姫路平野の構成層」『姫路市史』 第7巻上　資料編自然
姫路市　1988 『姫路市史』第十四巻　別編　姫路城
姫路市教育委員会　2011 『姫路城城下町跡－姫路城跡第254次　南部中堀発掘調査報告書－』
2014a 『姫路城城下町跡－姫路城跡第289次発掘調査報告書－』
2014b 『姫路城城下町跡－姫路城跡第300次発掘調査報告書－』
姫路市立城郭研究室　2014 『姫路城絵図集』
姫路市埋蔵文化財センター　2015「姫路城跡における近年の調査成果」『TSUBOHORI2015－姫路市埋蔵文化財調査略報－』
2018『白鷺飛翔－姫路城築城以前－』
堀田　浩之　1988「築城プランと基準線」『姫路市史』第十四巻　別編　姫路城
都ホテル　1989『都ホテル100年史』
八木　哲浩　1988「池田輝政の築城」『姫路市史』第十四巻　別編　姫路城

遺構一覧表 1

調査区	遺構名	長辺(延長)	短辺(幅)	深さ	平面形状	特記事項
1区	SP1	0.5m	0.3m	0.15m	長方形	
1区	SP2	0.15m		0.15m	円形	
1区	SP3	0.3m		0.2m	円形	
1区	SP4	0.5m	0.4m	0.35m	楕円形	
1区	SP5	0.3m		0.3m	円形	
1区	SP6	0.25m		0.15m	円形	
1区	SP7	0.4m		0.3m	円形	
1区	SP8	0.3m		0.4m	円形	
1区	SP9	0.3m	0.2m	0.05m	楕円形	
1区	SP10	0.2m		0.25m	円形	
1区	SP11	0.35m	0.25m	0.2m	楕円形	根石を伴う
1区	SP12	0.3m		0.1m	円形	根石を伴う
1区	SP13	0.2m		0.25m	円形	
1区	SP14	0.35m		0.5m	円形	
1区	SP15	0.4m	0.3m	0.25m	楕円形	
1区	SP16	0.3m		0.2m	円形	
1区	SP17	0.5m	0.4m	0.6m	円形	
1区	SP18	0.3m		0.45m	円形	
1区	SP19	0.35m	0.25m	0.1m	楕円形	
1区	SP20	0.3m		0.15m	円形	
1区	SP21	0.4m	0.3m	0.4m	円形	
1区	SP22	0.3m		0.3m	円形	SE1に切られる
1区	SP23	0.4m		0.35m	円形	
1区	SP24	0.3m		0.25m	円形	
1区	SP25	0.25m		0.15m	円形	
1区	SP26	0.35m		0.15m	円形	
	SP27					欠番
	SP28					欠番
1区	SP29	0.4m		0.15m	円形	
1区	SP30	0.3m		0.25m	円形	
1区	SP31	0.3m		0.25m	円形	
1区	SP32	0.3m		0.1m	円形	
1区	SP33	0.3m		0.15m	円形	
1区	SP34	0.4m		0.1m	円形か	
1区	SP35	0.15m		0.05m	円形	
1区	SP36	0.3m		0.15m	円形	
2区	SP37	0.3m		0.2m	円形	
1区	SK1	0.6m		0.3m	円形	
	SK2					欠番
1区	SK3	1.2m	0.4m	0.1m	楕円形	
1区	SK4	0.9m以上	0.8m	0.15m	楕円形	SK5を切る
1区	SK5	1.8m以上		0.1m	楕円形か	SK4に切られる
1区	SK6	1.0m	1.0m	0.3m	不整形	
1区	SK7	0.5m		0.1m	不明	
1区	SK8	1.8m	0.7m	1.0m	円形か	SE1に切られる
1区	SK9	7.8m		1.1m	不整形	
1区	SK10	0.7m	0.3m	0.2m	楕円形	
	SK11					欠番
2区	SK12	0.7m以上	0.3m	0.1m	楕円形	
2区	SK13	2m以上	0.3m	0.6m	不明	SD1を切る
	SK14					欠番
	SK15					欠番
2区	SK16	1.9m以上	1.0m以上	0.4m	隅丸方形か	SK35を切る
2区	SK17	0.8m	0.6m	0.35m	不整形	SK35を切る
2区	SK18	0.4m以上	0.4m以上	0.15m	不明	
2区	SK19	2.3m以上	1.2m以上	0.3m	隅丸方形	SD2に切られる
2区	SK20	1.4m	0.7m	0.4m	楕円形	SK30に切られ、SK22を切る
	SK21					欠番
2区	SK22	1.7m	0.8m	0.3m	隅丸方形か	SK20、SK30,SD2に切られる
	SK23					欠番
	SK24					欠番
	SK25					欠番
	SK26					欠番
2区	SK27	2.5m	1m以上	0.5m	隅丸方形か	SK28、SD1を切る
2区	SK28	3.6m以上	1m以上	0.3m	隅丸方形か	SK27に切られ、SD1を切る
1区	SK29	1.0m以上	1.0m以上	0.65m	隅丸方形か	SD8、SE2に切られる
2区	SK30	3.0m	2.0m	0.35m	隅丸方形	SK31、SD2に切られ、SK20、SK22を切る

遺構一覧表２

調査区	遺構名	長辺(延長)	短辺(幅)	深さ	平面形状	特記事項
2区	SK31	1.3m	1.2m	0.35m	不整形	SK30、SK32を切る
2区	SK32	2.5m以上	1m	0.35m	楕円形	SK30に切られる
1区	SK33	2.3m	1.5m	0.5m	隅丸方形	SD7、SD8に切られる
2区	SK34	1.3m以上	0.6m以上	0.35m	不明	
2区	SK35	0.9m		0.3m	円形	
	SK36					欠番
	SK37					欠番
2区	SK38	2.0m以上	1.5m以上	0.45m	円形か	SK16、SK17に切られる
1区	SK39	0.3m		0.1m	円形	
1区	SK40	0.8m	0.3m	0.2m	不明	
2区	SD1	37m以上	2.5m	0.3～0.5m		SK13、SK19、SK27、SK28に切られる、屋敷境
	SD2					欠番
	SD3					欠番
2区	SD4	12m以上	0.7m	0.5m		SK22、SK30を切り、SK16に切られる
	SD5					欠番
1区	SD6	3.7m以上	1.2m以上	0.7m		SD2に切られ、SD7を切る
1区	SD7	3.7m以上	1.4m以上	0.5m		SE2、SD6に切られ、SK33を切る
1区	SD8	1m	0.3m	0.05m		SK29、SK33を切り、SE2に切られる
1区	SE1	2.7m	2.5m	1.6m以上	円形	SK8、SP22を切る、石組は残存せず
1区	SE2	1.6		0.5m	円形	内径1.1mの石組を伴う
4-1区	SK1	0.7m	0.27m	0.5m	不明	
4-1区	SK2	0.6m	0.38m	0.54m	長円形	
4-1区	SK3	1.63m	1.1m	0.34m	不明	
4-1区	SP4	0.41m	0.2m	0.31m	長円形	
4-1区	SK5	1.7m以上	0.27m以上	0.33m	不明	調査区外へ延びる
4-1区	SK6	0.95m以上	0.77m	0.34m	長円形か	SK8に切られる、断面形は逆台形
4-1区	SP7	0.44m	0.27m	0.3m	円形	
4-1区	SK8	2.92m以上	24㎝以上	0.8m以上	不明	SK6・SK9を切る、SD1に切られる
4-1区	SK9	4.27m以上	1.07m以上	0.75m	長円形か	SD1・SK8に切られる、断面形はU字状
4-1区	SK10	2.0m以上	1.65m以上	1.49m	不明	SK18に切られる
4-1区	SP11	0.45m	0.35m	0.45m	円形	
4-1区	SP12	0.33m	0.28m	0.33m	円形	
4-1区	SK13	1.05m以上	0.5m	0.26m	不明	
4-1区	SK14	0.64m以上	0.55m	0.28m	不明	
4-1区	SP15	欠番				
4-1区	SK16	1.77m	1.18m	0.45m	隅丸方形	4-2区SP37を切る
4-1区	SP17	0.47m	0.43m	0.19m	円形	根石伴う、SK16に切られる
4-1区	SP18	0.4m	0.37m	0.26m	円形	根石伴う、SP19を切る
4-1区	SP19	0.23m		0.26m	円形	SP18に切られる
4-1区	SK20	1.75m以上	0.98m以上	0.88m	不明	SK16に切られる
4-1区	SP21	0.83m以上	0.6m	0.27m	円形	
4-1区	SP22	0.36m以上		0.34m	不明	SK27・撹乱に切られる
4-1区	SP23	0.3m		0.25m	円形	SK27を切る
4-1区	SP24	0.51m	0.29m	0.37m	長円形	
4-1区	SP25	0.33m	0.26m	0.4m	円形	
4-1区	SP26	0.27m	0.25m	0.33m	円形	
4-1区	SK27	2.83m以上	1.3m以上	0.7m	不明	SP22を切り、SP23に切られる
4-1区	SK28	3.45m以上	1.3m以上	0.91m	不明	SK10・SD01を切る
4-1区	SP29	0.25m		0.39m	長円形	根石伴う
4-1区	SP30	0.17m	0.15m	0.33m	円形	
4-1区	SP31	0.14m		0.19m	円形	撹乱に切られる
4-1区	SD1	2.84m以上	27㎝	0.35m		SK18に切られる、SK8・SK9を切る、断面形はU字状
4-2区	SP1	0.54m	0.4m以上	0.41m	隅丸方形か	SP13に切られる
4-2区	SP2	0.34m	0.33m以上	0.44m	隅丸方形か	
4-2区	SP3	0.55m	0.5m	0.3m	円形	
4-2区	SP4	0.6m	0.54m	0.11m	円形	
4-2区	SP5	0.61m	0.55m	0.48m	不明	SE1、SP26に切られる
4-2区	SP6	0.63m	0.6m	0.39m	隅丸方形	
4-2区	SP7	0.65m	0.55m	0.36m	円形	SD1を切る
4-2区	SP8	0.44m	0.39m	0.5m	円形	SK10を切る
4-2区	SP9	0.67m	0.65m	0.4m	円形	SK10を切る
4-2区	SP10	0.75m	0.67m	0.2m	隅丸方形	SK8・9に切られる
4-2区	SP11	0.26m	0.22m	0.14m	円形	
4-2区	SP12	0.26m	0.22m	0.12m	円形	
4-2区	SP13	0.28m以上	0.15m以上	0.12m	円形か	SP1を切る
4-2区	SP14	0.28m	0.26m	0.08m	円形	
4-2区	SP15	0.16m	0.14m	0.04m	円形	SP16を切る

遺構一覧表３

調査区	遺構名	長辺(延長)	短辺(幅)	深さ	平面形状	特記事項
4-2区	SP16	0.35m以上	0.3m	0.19m	楕円形	SP15に切られる
4-2区	SP17	0.32m以上	0.24m	0.18m	円形	SP8に切られる、SK4を切る
4-2区	SP18	0.33m	0.28m	0.09m	円形	SD１を切る
4-2区	SP19	0.3m		0.28m	円形	
4-2区	SP20	0.38m		0.21m	円形	SD1を切る
4-2区	SP21	0.3m		0.45m	円形	SD1を切る
4-2区	SP22	0.28m		0.29m	円形	SD1を切る
4-2区	SP23	0.44m	0.34m	0.21m	長円形	SD1を切る
4-2区	SP24	欠番				
4-2区	SP25	0.38m	0.29m	0.49m	隅丸方形	
4-2区	SP26	0.25m	0.22m	0.1m	円形	SP5に切られる
4-2区	SP27	0.15m	0.13m	0.08m	円形	
4-2区	SP28	0.48m以上	0.13m以上	0.07m	不明	
4-2区	SP29	0.25m	0.2m	0.12m	円形	根石あり
4-2区	SP30	0.21m		0.14m	円形	
4-2区	SP31	0.31m	0.28m以上	0.2m	円形か	
4-2区	SP32	0.27m		0.12m	方形	
4-2区	SP33	0.4m	0.27m	0.06m	長円形	
4-2区	SP34	0.28m	0.25m	0.12m	円形	SP35を切る
4-2区	SP35	0.39m	0.34m	0.11m	円形	SP34に切られる
4-2区	SP36	0.23m	0.21m	0.11m	円形	
4-2区	SP37	0.42m	0.35m以上	0.19m	円形か	SK16に切られる
4-2区	SP38	0.23m以上	0.2m以上	0.01m	不明	SP2に切られる
4-2区	SP39	0.43m	0.28m	0.07m	不整形	
4-2区	SP40	0.25m	0.15m以上	0.05m	円形か	4-1区SK31に切られる
4-2区	SP41	0.26m	0.2m	0.03m	円形	
4-2区	SK1	1.55m以上	0.43m以上	0.35m	不明	
4-2区	SK2	1.92m	1.15m	0.08m	不整形	中央部分に攪乱
4-2区	SK3	1.63m	1.1m	0.34m	不明	
4-2区	SK4	3.35m以上	1m以上	0.1m	不明	SK5を切る
4-2区	SK5	1.05m以上	0.55m以上	0.21m	隅丸方形か	SK4に切られる
4-2区	SK6	1.12m以上	0.7m以上	0.07m	不明	
4-2区	SK7	1.25m	1.05m	0.16m	不整形	中央部分に攪乱
4-2区	SD1	4.5m以上	1.06m	0.19m		SK4、SP7･8･10･18･20･21･22･23に切られる、断面形は浅い皿状
4-2区	SD2	1.8m以上	0.15m	0.05m		SK16に切られる
4-2区	SE1	1.6m	1.55m	1.55m以上	円形	1.55m以下は未掘
4-3区	SP1	0.31m		0.18m	円形	
4-3区	SP2	0.28m	0.25m	0.18m	円形	
4-3区	SP3	0.34m	0.3m	0.15m	円形	
4-3区	SP4	0.26m	0.22m	0.15m	円形	
4-3区	SP5	0.33m		0.21m	円形	
4-3区	SP6	0.19m	0.17m	0.12m	円形	
4-3区	SP7	0.3m		0.12m	円形	
4-3区	SK8	0.61m	0.54m	0.19m	円形	SP19を切る
4-3区	SK9	0.8m以上	0.5m	0.08m	長円形か	
4-3区	SP10	0.49m	0.44m	0.27m	隅丸方形	SP11･SP12を切る
4-3区	SP11	0.34m	0.25m以上	0.07m	円形か	SP10に切られる
4-3区	SP12	0.32m	0.25m以上	0.11m	円形か	SP10に切られる
4-3区	SP13	0.3m以上	0.29m	0.17m	円形か	
4-3区	SP14	0.18m	0.14m以上	0.14m	円形か	
4-3区	SP15	0.22m	0.2m	0.22m	円形	
4-3区	SP16	0.26m	0.18m	0.34m	円形	
4-3区	SP17	0.43m	0.35m	0.26m	円形	
4-3区	SP18	0.42m以上	0.39m	0.14m	隅丸方形か	
4-3区	SP19	0.17m以上	0.3m	0.08m	円形か	SK8に切られる
4-3区	SP20	0.51m	0.23m	0.28m	長円形	SX1の底で確認
4-3区	SK1	1.15m	1.11m	0.32m	円形	近現代土坑に切られる
4-3区	SK2	0.8m	0.25m	0.5m	不明	
4-3区	SX1	7.36m以上	3.1m以上	0.45m	不整形	
4-3区	近現代土坑	3.92m	1m	0.7m	長方形	壁面被熱
5区	SP1	0.36m	0.3m以上	0.46m	円形か	
5区	SP2	0.38m	0.39m	0.42m	円形	
5区	SK1	1.2m	1.08m以上	0.36m	不明	
5区	SK2	5.1m以上	2.4m以上	0.9m	不明	既存建物による攪乱を受ける、2基の土坑の切り合い
5区	石組溝	3.86m以上	1.4m	0.6m		河原石組み
5区	近代石組溝	4.1m以上	2.48m	1.6m		間知石組み、水路

遺物観察表 1

※法量は全てcm

番号	調査区	遺構名	種別	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	特記事項
1	1区	SD6	磁器	碗	-	(4.2)	(4.2)	(10.0)	口縁1/3	肥前系、外面草花文
2	1区	SD6	磁器	碗	-	(2.7)	3.4	(9.8)	1/10	肥前系、高台脇二重圏線
3	1区	SE2	磁器	碗	(9.6)	5.3	(4.0)	-	2/5	肥前系、外面菊花文コンニャク印判、高台内崩し渦福字銘
4	1区	SE2	磁器	碗	(9.4)	5.7	(4.4)	-	1/3	肥前系、広東碗、外面梅笹文
5	1区	SE2	磁器	皿	(21.2)	3.0	(13.4)	-	1/3	肥前系、口縁輪花状、ハリ支え、内面唐草文、見込松竹梅文、外面唐草文
6	1区	SE2	磁器	皿	(13.7)	3.9	(7.8)	-	1/5	肥前系、口縁輪花状、内面竹文、見込み五弁花コンニャク印判、外面唐草文、高台内渦福
7	1区	SE2	磁器	皿	(10.0)	2.6	5.7	-	1/2	瀬戸・美濃焼、丸皿、内面海辺人家図、外面波文
8	1区	SE2	磁器	仏飯器	6.2	6.0	3.3	-	4/5	肥前系、外面唐草文、肥前Ⅴ期
9	1区	SE2	陶器	片口	(22.8)	11.7	11.0	-	1/3	口縁玉縁、口縁直下に片口、内面ハマ痕
10	1区	SE2	陶器	皿	(12.1)	3.7	4.4	-	1/2	京信楽系、口縁上部緑釉、高台無釉
11	1区	SE2	陶器	土瓶	-	(8.3)	-	(15.0)	1/4	算盤玉型、外面糸目、耳部にキザミ
12	1区	SE2	陶器	甕	(25.9)	(10.3)	-	(35.6)	口縁1/5	丹波焼、外面鉄釉に灰釉流し、丹波Ⅲ-3b期
13	1区	SE2	陶器	擂鉢	(29.8)	(6.7)	-	-	口縁1/8	堺・明石系、内面櫛目3.5cm/10本
14	1区	SE2	陶器	擂鉢	(25.0)	9.5	12.0	-	2/5	丹波焼、内面櫛目1cm/10本、見込みスリ目渦巻状、内面目跡
15	1区	SK9	磁器	皿	(13.5)	2.7	7.9	-	1/3	内面墨弾きによる網目地朝顔文、ハリ支え
16	1区	SK9	陶器	碗	-	(3.8)	4.0	(9.2)	2/5	唐津焼、灰釉碗、高台無釉、高台内に兜巾状削り残し
17	1区	SK9	陶器	皿	-	(2.3)	(16.4)	(24.4)	1/5	瀬戸・美濃焼、志野大皿、内面鉄絵竹笹文
18	1区	SK9	土師器	皿	(12.1)	2.3	(8.2)	(12.2)	口縁1/5	底部糸切り、口縁部灯芯痕
19	1区	SK9	石製品	砥石	長(12.59)	幅2.65	厚3.41		9/10	砂岩製、荒砥
20	2区	SD1	磁器	皿	(14.5)	2.85	(7.8)	-	1/6	青花、内面唐草文、外面唐草文、高台脇放射状削り
21	2区	SD1	磁器	皿	(13.5)	4.0	(5.3)	-	1/4	肥前系、見込蛇の目釉ハギ、高台砂付着
22	2区	SD1	陶器	皿	-	(4.2)	(4.4)	(12.6)	1/6	肥前系、胎土目、内面鉄絵
23	2区	SD1	陶器	碗	-	(3.7)	4.0	(9.0)	底部2/3	肥前系、高台畳付け糸切跡、高台内に兜巾
24	2区	SD1	陶器	壺	(8.0)	(9.6)	(10.9)	(13.2)	1/4	備前焼、外面肩部に波状沈線文、火襷
25	2区	SD1	陶器	壺	-	(4.6)	(10.1)	(12.0)	底部1/4	備前焼、外面溶着
26	2区	SD1	陶器	蓋	-	(3.5)	-	(10.9)	2/3	信楽焼、全体自然釉、上面線刻
27	2区	SD1	陶器	平鉢	(37.2)	5.2	(30.0)	(37.5)	1/8	備前焼、内面自然釉
28	2区	SD1	陶器	擂鉢	-	(5.25)	(10.4)	(18.6)	底部1/10	備前焼、内面斜め刷目3cm/8本
29	2区	SD1	陶器	擂鉢	-	(8.5)	-	-	底部1/20	備前焼、内面斜め刷目2.2cm/9本
30	2区	SD1	土師器	皿	10.15	2.9	2.4	10.3	1/1	手づくね
31	2区	SD1	土師器	皿	10.2	2.45	6.4	10.4	1/1	手づくね、色調明褐色、底部に型痕、32と同型
32	2区	SD1	土師器	皿	10.15	2.2	6.0	10.3	1/1	手づくね、色調明褐色、外面底部2箇所に粘土付着、31と同型
33	2区	SD1	土師器	皿	9.6	2.1	1.5	9.9	口縁3/4	手づくね
34	2区	SD1	土師器	皿	9.4	2.3	4.0	9.6	口縁3/4	手づくね、口縁部灯芯痕
35	2区	SD1	土師器	皿	(8.7)	1.6	(4.7)	(8.8)	口縁1/3	手づくね
36	2区	SD1	土師器	皿	(10.4)	2.0	(6.4)	(10.6)	口縁1/4	底部糸切り
37	2区	SD1	土師器	皿	(8.6)	1.55	(5.4)	(8.8)	口縁1/5	手づくね、口縁部灯芯痕
38	2区	SD1	土師器	皿	(8.7)	2.15	(4.7)	(8.8)	底部1/3	底部糸切り
39	2区	SD1	瓦質土器	容器	-	(5.1)	-	-	口縁1/10	蓋が伴う構造、火消し壺か
40	2区	SD4	磁器	碗	(10.4)	(4.4)	-	-	1/8	肥前系、外面梅文か
41	2区	SD4	磁器	碗	(10.8)	(4.7)	-	-	1/8	肥前系、丸碗、外面宝輪文、肥前Ⅳ期
42	2区	SD4	磁器	碗	-	(6.15)	5.0	(9.2)	4/5	肥前系、半筒形、外面草花文、肥前Ⅳ期
43	2区	SD4	磁器	香炉	(5.8)	4.7	(5.1)	(6.0)	1/4	青磁竹筒形、三足
44	2区	SD4	陶器	碗	-	(5.2)	5.6	-	2/5	胴部下半削出による段
45	2区	SD4	磁器	碗	-	(4.2)	3.9	-	1/10	肥前系、外面草花文か。高台裏砂付着
46	2区	SD1	陶器	碗	-	(3.3)	5.25	9.7	底部1/3	呉器手碗
47	2区	SD4	土製品	ミニチュア鉢	3.8	1.45	2.6	-	9/10	内面透明釉
48	2区	SD4	陶器	甕	-	(12.2)	-	-	口縁1/10	肥前系、外面波刷毛目、口縁断面T字状、肥前Ⅳ期
49	2区	SD4	陶器	鉢	-	(8.3)	-	-	1/20	瀬戸焼、外面ヘラ削り印刻流水文
50	2区	SD4	陶器	擂鉢	-	(5.5)	-	-	口縁1/10	備前焼、口縁外帯4段、縁内に凸帯、口縁部重焼痕
51	2区	SD4	土師器	焙烙	-	(5.1)	-	-	口縁1/20	E類、外面スス付着
52	2区	SK22	陶器	碗	(11.2)	(7.1)	-	(11.6)	1/12	瀬戸・美濃焼、天目形
53	2区	SK22	陶器	碗	(11.5)	(4.3)	-	(11.8)	1/20	肥前系、鉄釉丸碗
54	2区	SK22	陶器	鉢	(11.4)	(8.2)	-	(11.8)	1/8	京信楽系、外面銹絵と白化粧土文様、文様剥離
55	2区	SK23	磁器	皿	-	(2.5)	(6.9)	(12.5)	1/15	肥前系、内外面砂目痕、肥前Ⅱ期
56	2区	SK22・23	土師器	皿	10.6	2.6	3.3	10.8	1/1	手づくね、口縁部灯明痕
57	2区	SK22・23	土師器	皿	10.2	2.5	3.8	10.4	口縁2/3	手づくね、口縁部灯明痕
58	2区	SK22	陶器	鉢	-	(4.9)	(10.0)	(12.6)	1/20	丹波焼

遺物観察表２

※法量は全てcm

番号	調査区	遺構名	種別	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	特記事項
59	2区	SK22	土師器	焼塩壺	5.5	8.4	5.4	7.5	1/1	
60	2区	SK19	土師器	焙烙	25.6	8.5	(26.8)	(27.9)	口縁1/2	A3類、外面下半に右上がりタタキ
61	2区	SK27	磁器	碗	(9.9)	5.4	(4.0)	(10.0)	1/2	肥前系、外面菊花丸文・草花文
62	2区	SK27	磁器	碗	(10.2)	6.7	4.5	-	1/2	陶胎染付、外面唐草文
63	2区	SK27	磁器	小碗	5.8	2.3	2.25	5.9	2/3	肥前系、外面秋草蛇籠文
64	2区	SK27	陶器	碗	(10.9)	5.9	3.94	(11.1)	1/4	京・信楽系、外面ケズリ調整で糸目上の稜線、見込ハマ痕
65	2区	SK27	陶器	碗	(10.05)	5.42	3.2	(10.6)	1/3	京・信楽系、外面銹絵
66	2区	SK27	陶器	碗	(9.2)	5.5	(2.8)	-	1/3	京・信楽系、銹絵半球碗、外面銹絵
67	2区	SK27	陶器	小鉢	(11.9)	(3.6)	-	(12.4)	1/5	京・信楽焼、内面銹絵染付菖蒲文
68	2区	SK27	陶器	壺	(19.2)	(22.8)	-	(30.2)	口縁1/6	丹波焼、双耳壺か？
69	2区	SK27	陶器	甕	-	(13.1)	19.9	(34.6)	底部1/1	丹波焼、内面は粗い刷毛塗り
70	2区	SK27	土師器	焙烙	(28.2)	(4.7)	-	(29.2)	口縁1/3	E類
71	2区	SK28	磁器	碗	(9.9)	5.2	(4.0)	-	1/5	肥前系、外面菊丸文と草花文
72	2区	SK28	磁器	皿	(10.1)	2.24	5.95	-	1/2	肥前系、内面唐草文、見込二重圏線内手書き五弁花文、口縁内外面四方襷文、高台内二重角内に「筒江」、肥前Ⅳ期
73	2区	SK28	青磁	香炉	(9.1)	4.9	(6.0)	-	3/10	肥前系、外面陽刻連子格子文、蛇の目凹形高台
74	2区	SK28	陶器	碗	(9.6)	(4.5)	-	(10.3)	1/5	瀬戸・美濃焼、腰折形、外面銹絵梅枝文
75	2区	SK28	陶器	碗	(9.95)	(4.5)	-	(10.18)	1/4	京・信楽系、腰折形
76	2区	SK28	陶器	鉢	(33.8)	(13.5)	12.2	-	2/5	肥前系、外面鉄釉流しかけ、内面白化粧土刷毛目鉄釉流し
77	2区	SK28	陶器	擂鉢	(33.0)	16.1	19.7	(35.5)	2/5	堺・明石系、刷目3.5cm/9本、見込みは交差刷目
78	2区	SK28	陶器	擂鉢	(38.8)	(9.9)	-	-	口縁1/8	堺・明石系、片口部内面に刻印、内面刷目3.1cm/9本
79	2区	SK28	土師器	皿	(9.8)	2.0	(6.6)	(10.0)	口縁2/3	底部糸切り、内外面摩滅
80	2区	SK28	土師器	焙烙	-	(4.35)	-	-	口縁1/20	E類、焼成陶質
81	4-1区	SK9	須恵器	杯	-	(1.6)	(12.4)	(14.4)	底部1/4	内面漆付着、底部回転ヘラ切り、高台貼付
82	4-1区	SK28	磁器	椀	10.6	4.2	3.7	-	3/5	端反形、人工コバルトによる染付、内外面唐獅子と七宝文、高台内一重圏線内に角福
83	4-1区	SK28	磁器	鉢	(22.3)	8.0	8.1	-	3/10	青花、端反碗、口縁端部釉ハジケ、内面荒磯文、外面飛龍文
84	4-1区	SK10	磁器	皿	6.6	2.6	2.7	6.7	4/5	肥前系、高台内砂付着
85	4-1区	SK10	磁器	碗	(9.5)	5.05	(4.1)	-	2/5	瀬戸新製焼、端反碗、外面霊芝文
86	4-1区	SK10	磁器	碗	(14.4)	7.5	5.1	-	1/3	肥前系、外面霊芝文、見込一重圏線内霊芝花文、肥前Ⅴ期
87	4-1区	SK10	磁器	皿	(21.0)	2.92	12.1	-	2/5	肥前系、内面墨弾きによる唐草文、見込松竹梅文、外面唐草文、ハリ支え
88	4-1区	SK10	陶器	灯明皿	5.6	(2.65)	-	-	2/5	柿釉。脚付き、外縁のみ灯芯痕
89	4-1区	SK10	陶器	碗	(8.7)	5.65	(3.0)	(9.2)	2/3	京信楽系、半球形、口縁部敲打痕か
90	4-1区	SK10	陶器	甕蓋	11.55	1.35	4.2	-	2/3	備前焼、落とし蓋、丸摘み、上面鉄泥塗布、糸目上の削り跡
91	4-1区	SK10	土師器	焙烙	(32.8)	5.35	-	(34.4)	口縁1/8	H類
92	4-1区	SK10	陶器	擂鉢	-	(5.5)	(13.6)	(23.8)	底部1/3	堺・明石系、見込櫛目放射状、内面櫛目2.9cm/10本
93	4-1区	SK10	陶器	擂鉢	-	(6.7)	12.4	(23.6)	1/10	堺・明石系、見込櫛目放射状、内面櫛目1.9cm/8本
94	4-1区	SK10	瓦質土器	火鉢か	(13.4)	(9.4)	(14.8)	-	1/10	器形不明。上部に円形の開口部があることから火鉢と想定、雲母微量含
95	4-1区	SK5	陶器	甕	(23.6)	(13.9)	-	-	口縁1/8	外面トビカンナ状の削り、口縁から内面灰釉
96	4-1区	SK27	磁器	皿	10.1	2.4	6.12	-	7/10	瀬戸・美濃焼、内面銅版転写、梅花丸文、雲形枠内青海波文
97	4-1区	SK27	磁器	碗	(12.0)	6.9	5.5	-	1/2	挨高台腰張形、外面鉄絵丸に三つ巴文、人工コバルトによる染付若松文
98	4-1区	SK27	土製品	人形	幅4.5	高6.35	厚2.85		8/10	型押し成形、型合わせ、器表にわずかに雲母
99	4-2区	SP19	陶器	徳利	3.25	25.0	9.6	13.9	1/1	通い徳利。外面全体に白釉。その上に鉄釉文字「山本酒店」「電話二七六」「非売品」「貪　个」、灰釉流し散らし掛け
100	4-3区	SK1	石製品	硯	長(9.35)	幅6.13	厚1.46		9/10	黒色粘板岩、外縁部と裏面に線刻
101	4-3区	SK1	瓦質土器	羽釜	(19.4)	(8.6)	-	(28.0)	口縁1/40	外面沈線3条、羽部貼付
102	4-3区	SX1中央	土師器	皿	(10.5)	1.9	(7.0)	(10.6)	口縁1/20	底部糸切り
103	4-3区	SX1西	磁器	碗	-	(1.8)	(5.2)	(7.4)	底部3/4	肥前、畳付砂付着、高台内兜巾、肥前Ⅱ-2期
104	4-3区	SX1中央	陶器	碗	-	(3.3)	5.0	(9.3)	1/4	京焼風陶器、呉器手碗
105	4-3区	SK1西	瓦質土器	火鉢	(32.1)	12.6	(30.5)	(34.6)	口縁1/5	内面板状工具によるヨコナデ、器壁剥離
106	5区	SK2	陶器	碗	-	(2.89)	4.85	(8.7)	1/10	京焼風陶器、呉器手碗
107	5区	SK2	磁器	皿	(19.5)	3.3	(6.8)	-	1/8	肥前、高台内砂付着、肥前Ⅱ期
108	3区	石列上層	磁器	碗	-	(3.8)	(4.2)	(8.8)	1/6	肥前系、外面草文
109	3区	石材上層	磁器	碗	-	(4.2)	3.8	(9.6)	1/3	外面胴部下多重線
110	5区	外堀	土師器	灯明皿	5.75	1.2	2.4	-	1/1	柿釉皿、底部糸切り
111	5区	外堀	陶器	皿	8.45	1.9	3.0	-	9/10	見込にハマ痕、内外面灰釉
112	5区	外堀	土製品	芥子面	左右2.23	厚1.22	上下2.60		1/1	人面、目・眉に墨
113	5区	外堀	土製品	人形	左右4.2	上下7.0	前後3.2		1/1	型合わせか、接合部丁寧なヘラナデ、彩色残存（緑・青・赤・墨）
114	5区	外堀	陶器	仏花瓶	-	(11.3)	4.2	7.27	4/5	双耳壺、外面鉄釉、底部は意図的な打ち欠きにより貫通

遺物観察表３

※法量は全てcm

番号	調査区	遺構名	種別	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	特記事項
115	5区	外堀	陶器	土瓶身	(11.6)	(4.9)	-	(17.6)	1/20	外面トビガンナ、鉄釉
115	5区	外堀	陶器	土瓶蓋	-	(2.65)	4.4	(10.2)	4/5	落し蓋、鉄釉
116	5区	外堀	磁器	碗	(11.4)	4.6	3.8	-	1/2	平形碗、人工コバルトによる染付
117	5区	外堀	磁器	碗	(10.2)	5.8	4.1	-	1/2	瀬戸新製焼、外面並草葉文、見込内一重圏線内に雁金文、高台内兜巾状の削り痕
118	5区	外堀	磁器	碗	-	(6.0)	(4.3)	(7.05)	3/10	小碗、人工コバルトによる染付、外面は青海波に梅花
119	5区	外堀	磁器	皿	10.95	3.1	7.1	-	1/2	陶質磁器、英国DAWSON製、ロクロ型押菊花形、内面銅版転写紫色、高台内面にDAWSON、３の陰刻、DAWSON･PEACOCKの文字
120	5区	外堀	磁器	段重蓋	13.7	3.3	-	15.7	9/10	色絵、無摘み、口受け、彩色は赤、橙、緑、茶
121	5区	近代石組	陶器	小杯	5.4	3.5	2.8	-	1/1	灰釉小杯、底部平高台
122	5区	近代石組	陶器	小杯	(5.9)	3.7	3.1	-	4/5	灰釉端反小杯、無高台、内外面灰釉
123	5区	近代石組	陶器	小杯	6.15	4.19	3.2	-	1/1	灰釉端反小杯、外面灰釉、高台無釉
124	5区	近代石組	陶器	土瓶蓋	7.5	1.25	3.7	-	1/1	落とし蓋、丸摘み、上面のみ灰釉、縁=外周部無釉
125	5区	近代石組	陶器	土瓶蓋	6.85	1.4	5.4	8.9	9/10	落とし蓋、全体に扁平、不整形の摘み
126	5区	近代石組	陶器	土瓶蓋	6.43	2.0	3.8	8.5	1/1	落とし蓋、口縁部白化粧の上に透明釉
127	5区	近代石組	陶器	土瓶蓋	6.9	2.3	4.8	9.03	9/10	落とし蓋、丸玉摘み、全体に歪みあり、粗雑
128	5区	近代石組	陶器	汽車土瓶	8.7	7.3	7.35	14.1	1/1	内キ、鉄砲口、底部碁笥底、灰釉鉄絵「糸魚川」「早川尾」字
129	5区	近代石組	陶器	汽車土瓶	8.3	6.8	7.9	13.7	1/1	内キ、鉄砲口、茶漉し穴1、鉄絵「生野」「いくの」字
130	5区	近代石組	陶器	汽車土瓶	8.9	6.3	6.8	(10.37)	9/10	鉄砲口、底部碁笥底、鉄絵「米原」「井づゝや」字
131	5区	近代石組	陶器	汽車土瓶	8.1	6.9	6.65	13.9	1/1	鉄砲口、底部碁笥底、白化粧土後、鉄絵「和田山」「わだやま」字
132	5区	近代石組	陶器	汽車土瓶	8.7	7.6	6.95	(11.95)	9/10	灰釉鉄絵「お茶は静岡山は富士」と富士山、外面ロクロ目顕著、茶漉し穴3個
133	5区	近代石組	陶器	汽車土瓶	8.3	7.94	7.1	13.2	1/1	鉄砲口、底部碁笥底、白化粧土後、呉須「和田山」「わだやま」
134	5区	近代石組	陶器	汽車土瓶	(6.7)	6.6	7.0	(11.9)	1/2	鉄砲口、底部ベタ底、外面鉄絵「なごや」字
135	5区	近代石組	ガラス	小瓶	1.17	7.50	2.8	3.36	1/1	白髪染、「君が代」「乙」エンボス
136	5区	近代石組	ガラス	目薬瓶	1.64	7.0	2.88	3.1	1/1	目薬瓶、コバルトブルー、半透明、「天下茶屋目薬」「十川製」エンボス
137	5区	近代石組	ガラス	薬瓶	1.7	9.15	4.2	4.72	1/1	無色透明、側面に目盛り
138	5区	近代石組	ガラス	薬瓶	1.67	9.01	3.75	4.15	1/1	無色透明、側面に目盛り
139	5区	近代石組	ガラス	シロップ瓶	3.35	13.1	8.6	10.25	9/10	無色透明、蓋「PEACE SYRUP」、身「ピースシロップ鳩本舗京都万仁合名会社」エンボス
140	5区	近代石組	ガラス	茶瓶	2.8	16.1	7.0	7.3	1/1	「鉄道局御指定御茶富岡式茶瓶製造元大日本麦酒株式会社」エンボス
141	5区	近代石組	ガラス	カルピス瓶	1.7	17.5	5.38	5.9	1/1	無色透明、「カルピス」「定価金拾五銭」「名古屋駅松浦」エンボス
142	5区	近代石組	ガラス	牛乳瓶	2.1	16.8	4.56	5.45	1/1	無色透明、「全乳」エンボス、「中安牧場」赤彩
143	5区	近代石組	土師器	焜炉	-	(9.0)	(20.5)	(21.2)	1/10	姫路産、円筒形、三足部分に刻印「炙」、底部内面に内側枠を貼り付ける環状痕、底部糸切
144	4-1区	包含層	須恵器	皿	(19.6)	2.3	(18.2)	(19.8)	底部1/4	底部ヘラ切り、生焼け
145	4-1区	包含層	土師器	杯A	(15.5)	(4.05)	-	(16.2)	口縁1/3	内面スス付着、摩滅･剥離しているため調整不明瞭
146	4-1区	包含層	須恵器	稜碗蓋	-	(2.8)	-	(17.6)	2/5	輪状摘み貼り付け
147	4-1区	包含層	須恵器	稜椀	-	(3.6)	-	-	口縁1/10	内外面ナデ
148	4-1区	包含層	須恵器	壺K	-	(8.1)	(12.6)	(18.6)	底部1/4	底部ヘラ切り
149	4-1区	包含層	須恵器	杯B	(18.2)	5.7	(13.7)	(18.4)	底部1/8	内外面ナデ
150	4-1区	包含層	須恵器	杯A	(17.3)	3.3	(14.0)	(17.6)	底部1/6	底部ヘラ切り、内外面ナデ、胎土精良
151	4-1区	SK20	土師器	蓋	21.15	3.7	-	21.8	1/1	外面分割ミガキ、内面螺旋暗文
152	4-1区	SK20	須恵器	蓋	(13.8)	2.05	-	(14.0)	口縁2/5	内外面ナデ
153	4-1区	SK20	土師器	杯	17.2	3.25	15.2	17.5	口縁2/5	内面ナデ、外面底部線刻
154	4-1区	SK20	瓦質土器	壺	-	(6.65)	-	-	体部1/8	耳部残存、外面黒化、155と同一個体か
155	4-1区	SK20	瓦質土器	壺	(5.6)	(8.8)	-	(16.8)	口縁1/10	外面黒化、154と同一個体か
156	4-1区	SK20	土師器	甕	(14.8)	(6.4)	-	(16.0)	口縁1/5	外面ハケ(7条/単)、内面粘土紐の継ぎ目痕
157	4-1区	SK20	土師器	甕	(28.1)	(7.25)	-	(28.3)	口縁1/10	外面ハケ(12条/単)、内面工具によるナデ、摩滅しているため調整不明瞭、所々粘土紐の継ぎ目痕あり
158	4-1区	SK20	土師器	製塩土器	(11.0)	(4.9)	-	(12.6)	口縁1/5	ヨコナデ、ナデ、外面黒斑あり
159	4-1区	SK20	土師器	製塩土器	(10.8)	(8.05)	-	(13.0)	口縁2/5	内面ナデ、工具によるナデ、外面指押さえ
160	4-1区	SK20	土師器	製塩土器	13.2	(7.9)	-	14.0	口縁4/5	内面斜め方向指ナデ、横方向指ナデ、口縁楕円形に歪む
161	4-1区	SK20	土師器	製塩土器	-	(10.35)	-	-	口縁1/4	内外面ともにナデ、指押さえ
162	4-2区	SP1	土師器	甕	-	(5.0)	-	-	口縁1/20	内外面とも著しく摩滅している
163	4-2区	SP3	須恵器	蓋	-	(1.8)	-	-	口縁1/20	笠形
164	4-1区	SK3	須恵器	片口鉢	-	(4.8)	-	-	口縁1/20	端部拡張せず、口縁端面は外傾する面をもつ
165	5区	SK1	須恵器	蓋	-	1.9	-	-	口縁1/20	生焼け
166	5区	SK1	土師器	甕	(19.7)	(8.1)	-	(21.2)	口縁1/5	内面粘土紐の継ぎ目、外面ハケ、器壁摩滅
167	5区	SP1	土師器	杯	-	(2.85)	-	-	口縁1/10	内面摩滅、外面ナデ
168	5区	SP1	土師器	甕	(19.2)	(7.2)	-	(20.6)	頸部1/5	外面ハケ、内面摩滅

写真1　1区・2区・4区オルソ　(S=1：300)

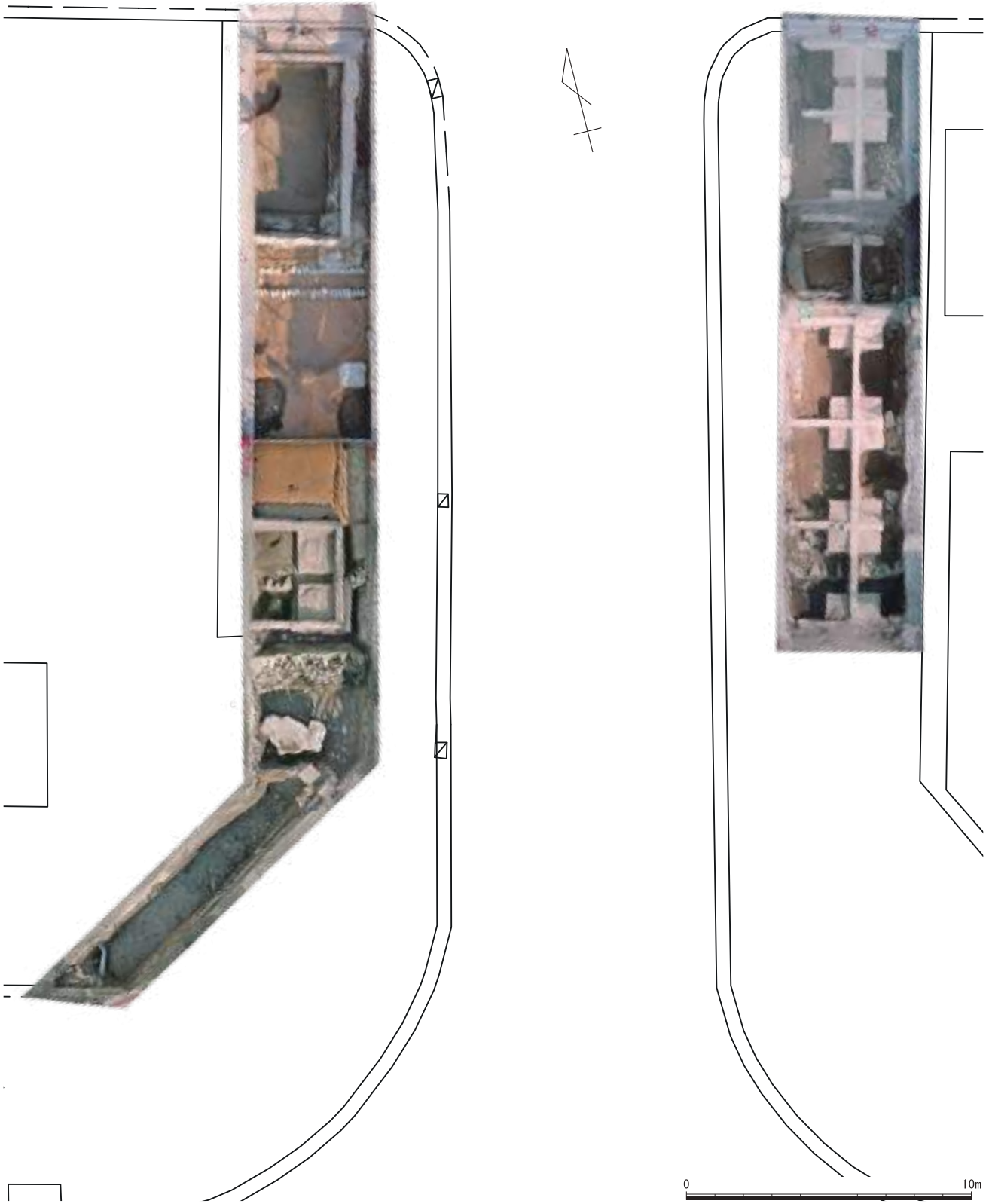


写真2　3区・5区オルソ（S=1:200）

写真3　1区　全景　（南から）

写真4　2区　全景　（北から）

写真5　2区　全景　（東から）

写真6　3区　全景　（南から）

写真7　3区　南端　（北から）

写真図版 6

写真8　1区　SD6・SD7　（西から）

写真9　1区　SD6土層断面　（西から）

写真10　1区　SD7土層断面　（西から）

写真11　1区　SE2　（北から）

写真12　1区　SK9　（北東から）

写真13　2区　SD1　（北から）

写真14　2区　SD1土層断面　（南から）

写真15　2区　SD4　（北から）

写真16　2区　SD4土層断面　（南から）

写真17　3区　石組み　（西から）

写真18　3区　石組溝と石列　（南から）

写真19　3区　石列　（南西から）

写真20　5区南部　全景　（南から）

写真21　5区北部　全景　（南から）

写真22　4-1区西部　全景　（北から）

写真23　4-1区東部　全景　（北から）

写真24　4-2区　全景　（北から）

写真25　4-3区　全景　（北から）

写真26　4-1区西部　西壁　（南東から）

写真27　4-2区　SE1・SP5　（西から）

写真28　4-2区　SK20　遺物出土状況　（西から）

写真29　4-3区　東壁礎石　（西から）

写真30　4-2区　SP6～SP11　（北から）

写真31　5区　近代石組溝　（西から）

写真32　5区　石組溝　（西から）

写真33　5区　近代石組溝掘方・東壁　（北西から）

写真34　5区　近代石組溝掘方・外堀土層断面　（西から）

写真35　5区南端　堀埋土　（北東から）

写真36　5区　近代石組溝断面　（東から）

写真37　5区　近代石組溝　遺物出土状況（東から）

81

154 表

155 表

146

154 裏

155 裏

151 表

153 表

152

151 裏

153 裏

156

157

160

161

158

159

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第303次・第315次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第72集
編著者名	中川　猛・黒田祐介
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
発行年月日	平成31年（2019年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
		市町村	遺跡番号						
姫路城（ひめじじょう） 城下町跡（じょうかまちあと）	姫路市（ひめじし） 東駅前町（ひがしえきまえちょう）	28201	020169	34° 49′ 41″	134° 41′ 36″	2013. 7. 23 ～ 2013. 10. 1 ・ 2013. 11. 22 ～ 2014. 2. 12	438㎡ 262㎡	道路 拡幅 工事	2013 0169 ・ 2013 0384

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
姫路城城下町跡	集落跡	古代 近世 近代	柱穴・溝 外堀・土塁際側溝・屋敷境・井戸・土坑 石組溝	須恵器・土師器・製塩土器 陶磁器・土師器・石製品 汽車土瓶・ガラス瓶

要約

姫路城外堀と土塁裾に構築された石組溝、武家屋敷に伴う遺構と屋敷境を検出した。外堀の位置は絵図や近代以降の地図や住居区画から想定されていたが、厳密な位置は長らく不明であった。発掘調査によって位置が判明したことから北条門までの間の外堀位置が確定した。明治維新後、外堀を埋め戻していく中で構築された近代石組溝を検出し、近世から近代に至る過程が具体的に明らかとなった。武家屋敷では、背割溝等の変遷やその主軸方向が明らかになるとともに、絵図の記載の正しさを裏付ける成果を得た。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第72集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第303次・第315次発掘調査報告書―

平成31年（2019年）3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL　(079)252-3950

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　内海印刷株式会社
〒670－0808　兵庫県姫路市白国五丁目8-4